第七章　皇室經費

第六十八條

特ニ定ムル皇室歳費ハ皇室諸般ノ費用ヲ支辨ス。

第六十九條

前條ノ皇室歳費ヲ以テ支辨シ難ク又ハ非常ノ需用アル時ハ其科目ヲ掲ケ元老院ニ諮詢シ國庫ヨリ徴收ス。

第七十條

皇室歳費ノ諸科目、豫算、決算其他規則ハ、皇室理財法ヲ定メ之ニ依ル。

第七十一條

皇室ニ屬シ檢計職ヲ置キ會計檢査ノコトヲ掌管セシム。

第八章　皇族制規

第七十二條

皇族屬籍ハ元老院ニ於テ尚藏セシメ、皇位繼承權ノ本證トス。

第七十三條

皇族ノ誕生、命名、薨去、結婚、離緣、成年及賜姓ハ宮内大臣勅ヲ奉シ、官報ヲ以テ之ヲ公布ス。

第七十四條

前條ノ時ニ當リ宮内大臣ハ勅ヲ奉シ嚴重ノ書式ヲ用ヒ之ヲ元老院議長ニ通報ス。

第七十五條

皇統譜ハ圖書寮ニ於テ尚藏ス。

第七十六條

天皇ハ諸皇族ヲ統理シ之ヲ保護監督ス。

第七十七條

攝政在職ノ時ハ前條ノ權ヲ執行ス。

第七十八條

皇族幼年間ノ教育ハ天皇親ラ之ヲ監察シ特ニ教員ヲ置クコトアルヘシ。

第七十九條

皇族男女幼年ニシテ父ナキ者ハ天皇ハ其ノ父母ノ撰擧ニ由リ後見人ヲ認可シ、又ハ別ニ勅撰スルコトアルベシ、但シ後見人ハ成年以上ノ皇族ニ限ル。

第八十條

皇族ノ婚嫁ハ必ラス勅許ヲ請フヘシ、其順序ニ依ラサル契約ハ總テ無效トス。

第八十一條

皇族ノ婚嫁ヲ勅許スル時ハ親署ノ璽書ヲ用ヒ、宮内大臣之ニ副署ス。

第八十二條

勅許ヲ經スシテ結婚スル時ハ其妃ハ諸般ノ禮遇特權ヲ有セス、所生ノ子ハ庶子ニ準ス。

第八十三條

內親王、女王勅許ヲ經スシテ嫁スル時ハ粧費及歲費ヲ賜ハス。

第八十四條

皇族ハ他人ヲ以テ繼嗣トナスコトヲ得ス、但シ皇位繼承ノ順序ヲ紊ラサル者ハ特ニ請願スルコ

トヲ得。

第八十五條

皇族ハ勅旨ヲ承ケ他皇族ノ家ヲ繼承スルコトアルヘシ、但シ皇位繼承ノ順序ハ其等親ノ原位ニ依ル。

第八十六條

他皇族ノ家ヲ繼承スル者ハ家屬教養其他ノ義務ニ任ス。

第八十七條

皇族ハ外國及本住地外ヘ旅行スル時勅許ヲ請ヘシ。

第八十八條

皇族ハ必ラス勳章ヲ受佩ス。

第八十九條

皇族各家ノ徽章ハ皇室菊花ノ樣式ヲ損益シ之ヲ用ユ。

第九十條

皇族ノ禮服及乘艦ノ旗、皇族ニ對スル陸海軍ノ禮砲、家職ノ規則ハ別ニ定ムル所ニ依ル。

第九十一條

內親王、女王臣籍ニ嫁シ、誕生セル男女ハ各其父ノ分限ニ從フ。

第九章　皇族裁判　懲戒

第九十二條

皇族相互ノ訴訟及皇族ノ身分ニ係ル訴訟ハ皇族會議ヲ開キ之ヲ裁判ス。

第九十三條

皇族ト人民トノ間ニ起ル物件ノ民事及違警罪ノ訴訟ハ普通ノ法衙ニ於テ之ヲ裁判ス、但シ皇族ハ其財産ノ主任員ヲ以テ法律上ノ代人トシ、自ラ訴訟ニ當ルコトナシ。

第九十四條

皇族ノ重輕罪ハ元老院ニ於テ委員ヲ勅撰シ之ヲ裁判セシム。

第九十五條

皇族ハ勅裁ヲ得ルニ非サレハ拘引スルコトヲ得ス。

第九十六條

皇族會議ハ成年以上ノ皇族ヨリ勅撰ス、但シ内大臣、宮内大臣、司法大臣、元老院議長、大審院長、其ノ他皇室諸部ノ勅任官中ヨリモ特撰シ其會議ニ參列セシム。

第九十七條

天皇ハ皇族會議ヲ親提ス、或ハ皇族中ノ一員ニ命シ議長タラシム。

第九十八條

皇族會議及第九十四條ノ裁判ハ勅裁ヲ得タル後之ヲ執行ス。

第九十九條

皇族會議及第九十四條ノ裁判ハ普通ノ法式ニ拘ラス。

第百條

皇族其品位ヲ辱ムルノ所行アリ又ハ皇室ニ對シ忠順ナラサル時ハ皇族特權ノ全部又ハ一部ヲ剝奪シ若クハ停止シテ之ヲ懲戒ス。

第百一條

皇族蕩産ノ所行アル時ハ治産ノ禁ヲ宣告シ、其管財者ヲ任ス。

第百二條

前二條ハ皇族會議ニ諮詢シタル後之ヲ執行ス。

第百三條

皇族會議及第九十四條ノ裁判、第百條、第百一條ノ懲戒ハ控訴又ハ上告スルコトヲ得ス。

第百四條

皇族ノ科罰ハ刑法ニ依ル。

第十章　皇族列臣籍

第百五條

皇位繼承權アル者十員以上ニ充ツル時ハ、皇玄孫以下疎遠ノ皇族ヨリ遞次臣籍ニ列スルコトアルヘシ。

第百六條

皇族蕃殖シ皇位繼承權アル者不足ナキ時ハ皇玄孫以上モ亦臣籍ニ列スルコトアルヘシ、此時ニ於テハ前條ノ限ニ在ラス。

第百七條

皇族臣籍ニ列スル時眷屬ノ女子ハ之ニ附籍ス、事宜ニ由リ庶兄及子弟モ亦此例ニ依ル。

第百八條

皇族臣籍ニ列スル時ハ

祖宗以來ノ例ニ依リ姓ヲ賜ヒ府縣ニ貫屬セシム。

第百九條

皇族臣籍ニ列スル時ハ爵ヲ授ク。

第十一章　附　則

第百十條

現在ノ皇族既ニ親王ノ號ヲ宣賜シタル者ハ舊ニ依ル。

第百十一條

現在親王ノ號ヲ宣賜シタル者ヨリ皇位繼承ノ順序近キ諸王ハ成年ニ達シタル後特ニ親王ノ號ヲ宣賜スルコトアルヘシ。

第百十二條

現在既ニ皇養子、皇猶子又ハ他ノ繼嗣タル者ハ舊ニ依ル、今後ハ之ヲ許サス。

第百十三條

皇位繼承ノ順序現今ノ皇族又ハ其子孫ニ及フ時ハ總テ實系ノ等親ニ依ル、皇養子、皇猶子又ハ他ノ繼嗣タリシ故ヲ以テ混スルコトナシ。

第百十四條

天皇及皇族元服ノ制ヲ廢止ス。

第百十五條

親王、內親王ノ叙品、諸王、女王ノ叙位ヲ廢止ス。

第百十六條

神宮、賢所、神器、陵墓ヲ尊崇奉護スル、以下諸規則ハ皇室典例ヲ定メ之ニ依ル。

第百十七條

皇室諸禮ハ

祖宗ノ例ニ倣ヒ、明治式ヲ定メ之ニ依ル。

第百十八條

皇族ノ財産歳費以下諸規則ハ皇族條例ヲ定メ之ニ依ル。

第百十九條

此典範ニ屬スル諸規則ハ別ニ之ヲ定ム。

皇族條例

柳原前光（内按）

目錄

第一章（自第一條至第八條）皇族財産
第二章（自第九條至第十六條）皇族歳費
第三章（自第十七條至第十三條）皇族諸給
第四章（自第四十四條至第四十七條）皇族授爵
第五章（自第四十八條至第五十一條）附則

第一章　皇族財産

第一條　皇族ノ宮邸及常産ハ國税地方税ヲ課セス、其他私産ハ此例ニ在ラス。

第二條　皇族ノ常産ニ編入スルモノ左ニ開列ス。

一、勅賜セル不動産及公債證書、諸株券。

一、歴代遺傳及皇族ノ身位ニ屬スル貴重ノ諸物品。

第三條　皇族ノ宮邸及常産ハ之ヲ貸借ノ抵當トシ又ハ讓與賣却スルコトヲ得ス。

第四條　皇族ノ宮邸及常産ハ宮内大臣ヨリ官報ヲ以テ之ヲ公布ス。

第五條　皇族常産ハ長系ノ子孫之ヲ繼承ス、若シ支親ニ分割セント欲スル時ハ在世中又ハ遺命ヲ以テ勅裁ヲ請フベシ、但シ不動産ハ女子ニ分與スルコトヲ得ス。

第六條　前條ニ於テ男系ノ子孫及繼承者ナキ時ハ皇族常産ハ皇室ニ歸ス。

第七條　皇族私法ニ依リ得有セシ財産ハ贈與其意ニ隨フ、但シ在世中贈與ノ契約ナク、薨去ノ後證憑アル遺命ナキ時ハ常産ニ編入ス。

第八條　皇族薨去シ遺留私産別ニ證憑アル遺命ナク、又繼承者ナキ時ハ皇室ニ歸ス。

第二章　皇族歳費

第九條　太上天皇、太皇太后、皇太后、皇后ノ歳費ハ、天皇特ニ之ヲ定ム。

第十條　皇太子成年ニ達スル時ハ歳費十五萬圓ヲ受ク、妃ヲ納ル、時ハ別ニ十五萬圓ヲ加フ。

第十一條　皇太孫成年ニ達シタル時ハ歳費十二萬圓ヲ受ク、妃ヲ納ル、時ハ別ニ十二萬圓ヲ加フ。

第十二條　皇太子ナキ時ノ皇太孫ハ歳費皇太子ニ同シ、其妃モ亦同シ。

第十三條　皇太子妃、皇太孫妃寡居スル時ハ額ヲ減ジ歳費ノ三分ノ二ヲ賜フ。

第十四條　皇族攝政タル時ノ歳費ハ皇太子ニ同シ、妃アル時ノ加費モ亦同シ。

第十五條　皇族ノ歳費ヲ定メ左ニ表出ス。

一等	七萬圓	皇子	七千圓	幼年家主
	四萬六千六百六十六圓	妃		
	三萬千百十圓	寡妃		

二等	六萬圓	皇女 皇孫	六千五百圓	幼年家主
	四萬圓	妃		
	二萬六千六百六十六圓	寡妃		
三等	五萬圓	皇孫女 皇曾孫	六千圓	幼年家主
	三萬三千三百三十三圓	妃		
	二萬二千二百二十二圓	寡妃		
四等	四萬圓	皇曾孫女 皇玄孫	五千五百圓	幼年家主 成年嗣子
	二萬六千六百六十六圓	妃	三千六百六十六圓	妃
	一萬七千七百七十七圓	寡妃	二千四百四十四圓	寡妃
五等	三萬圓	皇玄孫女		
六等	二萬五千圓	十世以内男	五千圓	幼年家主 成年嗣子
	八千三百三十三圓	妃	三千三百三十三圓	妃
	五千五百五十五圓	寡妃	二千二百二十二圓	寡妃
七等	二萬圓	十世以外 近系男	四千五百圓	幼年家主 成年嗣子
	六千六百六十六圓	妃	三千圓	妃
	四千四百四十四圓	寡妃	二千圓	寡妃
八等	一萬五千圓	十世以外 遠系男	四千圓	幼年家主 成年嗣子
	五千圓	妃	二千六百六十六圓	妃
	三千三百三十三圓	寡妃	千七百七十七圓	寡妃

第十六條　前條表下ニ掲ケタル幼年家主、成年嗣子ハ表上ノ子ヲ指ス。

第十七條　皇玄孫以上成年ニ達スル時ハ其等親ニ應シ歳費ヲ賜フコト第十五條ニ依ル。

第十八條　皇玄孫以下成年ニ達シ一家ヲ建ル時ハ、其等親ニ應シ歳費ヲ賜フコト第十五條ニ依

ル。

第十九條　皇玄孫女以上婚姻シ又ハ勅旨ヲ承ケ別居スル時ハ、其等親ニ應ジ同系男子ヨリ一等ヲ下シタル歳費ヲ賜フコト第十五條ニ依ル。

第二十條　皇玄孫以上ノ妃ハ其夫ノ三分ノ二、其以下ノ妃ハ三分ノ一ニ當ル歳費ヲ賜フコト第十五條ニ依ル。

第二十一條　皇族男子、皇族女子ト婚スル時ハ其女子身位ニ應スル一ノ多額ナル歳費ヲ賜フ。

第二十二條　皇子妃以下寡居スル時ハ額ヲ減シ歳費ノ三分ノ二ヲ賜フコト第十五條ニ依ル。

第二十三條　皇族ノ幼男及未タ婚姻セス又ハ別居セサルノ女子ハ其父又ハ成年ノ兄ヨリ養育ヲ受ケ歳費ヲ賜ハス、其父兄ナキ時ハ男子一人ヲ幼年家主トシ其等親ニ應シ歳費ヲ賜フコト第十五條ニ依ル。

第二十四條　前條ニ於テ男子ノ家主タルヘキ者ナク又ハ歳費ヲ受クル幼年家主其家屬夥多ニシテ養育ヲ負擔シ難キ時ハ特ニ扶助料ヲ賜フコトアルヘシ。

第二十五條　皇玄孫以下ノ嗣子成年ニ達スル時ハ歳費ヲ賜フコト第十五條ニ依ル。

第二十六條　前條成年嗣子ノ妃ハ其夫三分一ニ當ル歳費ヲ賜フコト第十五條ノ例ニ依ル。

第二十七條　天皇支系ヨリ入テ大統ヲ承クル時ハ皇兄弟ハ一等歳費ヲ賜ヒ、其子孫ハ遞次ニ下等ノ歳費ヲ賜ヒ、皇姉妹ノ皇伯叔父ハ二等歳費ヲ賜フ、以下之ニ準ス。

第二十八條　歳費ハ債主ヨリ之ヲ差押スルコトヲ得ス。

第二十九條　歳費ヲ賜ヘル皇族薨去スル時ハ歳費ノ四分一ヲ賜ヒ、其後之ヲ止ム。

第三十條　歳費ハ毎年四回ニ分チ内藏寮ヨリ交付ス。

第三十一條　皇族ノ官俸及勲勞ニ依テ特ニ賜ルヘキ年金ハ歳費ノ外トス。

第三十二條　不動産又ハ公債證書、諸株券ヲ以テ皇族常産ト定メ賜ヘルモノ又ハ之ヲ繼承スルモノハ歳費ヲ賜ハス、但シ第十五條ニ照シ不足アレハ之ヲ補充ス。

第三十三條　皇族常産ヲ賜ヘル者ハ、家屬養育嫁娶ノ費ニ任ス。

第三十四條　常産ヲ賜ヘル皇族繼嗣絶ユル時ハ寡居妃ハ其夫ノ等親ニ應シ歳費ヲ賜フコト第十五條ノ例ニ依ル。

第三十五條　皇族常産ヲ有スル者男系ノ子孫及繼承者ナク其常産皇室ニ歸スル時ハ家屬ハ相當ノ歳費ヲ賜フ。

第三十六條　歳費又ハ常産ヲ有スル皇族家屬夥多其費ヲ支ヘ難キ時ハ特ニ扶助料ヲ賜フコトアルヘシ。

第三章　皇族諸給

第三十七條　皇玄孫以上成年ニ達シタル時ハ其父ノ宮邸ヲ繼承スベキモノヲ除ク外、別ニ一個ノ宮邸ヲ賜フ。

第三十八條　皇玄孫以下ノ皇孫特旨ヲ承ケ一家ヲ建タル時ハ前條ニ依ル。

第三十九條　皇玄孫女以上勅旨ヲ承ケ別居シタル時ハ第三十七條ニ依ル。

第四十條　第三十七條ニ於テ空邸ナキ時ハ代料ヲ賜フ、其等差左ニ開列ス。

三十五萬圓以下	皇子
三十萬圓以下	皇孫
二十五萬圓以下	皇曾孫
二十萬圓以下	皇玄孫
十五萬圓以下	十世以內
十萬圓以下	十世以外近系
五萬圓以下	十世以外遠系

第四十一條　皇族女子出嫁ノ時粧費ヲ賜フ、其等差左ニ開列ス。

三萬圓	皇嫡長女
二萬五千圓	皇女
二萬圓	皇孫女
一萬五千圓	皇曾孫女
一萬圓	皇玄孫女
五千圓	十世以內
三千圓	十世以外近系
千圓	十世以外遠系

第四十二條　皇族妃ヲ納ルル時ヨリ歲費ヲ賜フ、故ニ婚禮費ヲ賜ハズ。

第四十三條　皇族薨去ノ時歲費アル者ハ其額ノ三分一ヲ賜ヒ葬費ニ充ツ。

第四章　皇族授爵

第四十四條　皇族臣籍ニ列スル時ハ皇系親疎ノ等差ニ從ヒ爵ヲ授クルコト左ニ開列ス。

公　爵　皇玄孫以上
侯　爵　十世以内
伯　爵　十世以外近系
子　爵　十世以外遠系

第四十五條　授爵ノ時ハ家資トシテ公債證書又ハ政府ノ保證アル會社株券ヲ賜フ、凡ソ其收入歲額左ニ開列ス。

公　爵　四千五百圓
侯　爵　四　千　圓
伯　爵　三千五百圓
子　爵　三　千　圓

第四十六條　勳勞アル者又ハ重輕罪懲戒ニ觸レタル者、其他事狀ニ由リ爵級ヲ上下シ家資ヲ增減スルコトアルベシ、此時ニ於テハ第四十四條、第四十五條ノ限ニ在ラズ。

第四十七條　父祖ヨリ遺傳セシ常產ノ收入アル者、第四十五條ニ照シ不足アル時ハ其額ヲ補充ス。

第五章　附　則

第四十八條　現在ノ皇族ニ對シ皇位繼承順序ヲ表スルタメ崇光天皇以來皇胤實系ヲ案ジ、左ニ略出ス。

崇光天皇以來皇胤實系略表

∴ 本系ヲ表ス。　・一家ヲ表ス。　。嫡出ヲ表ス。

第一以下ノ數ハ皇位繼承順序ヲ表ス。

∴上略崇光天皇——榮仁親王——貞成親王（贈太上天皇稱後崇光院）——後花園天皇——後御土門天皇——後柏原天皇——後奈良天皇——正親町天皇
——誠仁親王（贈太上天皇稱陽光院）——後陽成天皇——後水尾天皇——靈元天皇
——東山天皇——直仁親王——典仁親王（贈太上天皇稱慶光天皇）——光格天皇

- 仁孝天皇
  - 職仁親王（有栖川）
    - 織仁親王
      - 韶仁親王
        - 幟仁親王
  - 第二、靈元天皇六世 熾仁親王
    - 第三 威仁親王（熾仁親王繼嗣）
      - ●伏見 貞常親王
        - 貞康親王
          - 邦房親王
            - 貞清親王
              - 邦尙親王
        - 貞敦親王
          - 邦輔親王
        - 貞致親王
          - 邦永親王
            - 貞建親王
              - 邦賴親王
        - 貞敬親王
          - 邦家親王
            - ○貞愛親王
              - ○第五 邦芳王
            - ●華項第六 博恭王
            - ●北白川第八 能久親王
              - 第九 恒久王
            - ●小松第七 彰仁親王

- ●山階第十二 晃親王
  - ●久邇第十四 朝彥親王
    - 第十八 多嘉王
    - 第十七 ●梨本 守正王
    - 第十六 邦彥王（勅許爲繼嗣）
    - 第十五 邦憲王（廢嗣）
  - 第十三 菊麿王
- ●閑院第十 載仁親王
  - 第十一 依仁親王（彰仁親王繼嗣）

第四十九條　現在ノ親王、諸王ニ歲費ヲ賜フノ等差ヲ定メ、左ニ開列ス。

十世以內　熾仁親王、威仁親王ノ系。

十世以外近系　貞愛親王及其子庶兄ノ系。

十世以外遠系　貞愛親王ノ庶弟及ビ叔父系。

第五十條　皇族命名ニ仁ノ字ヲ用フルハ今後皇玄孫以上ニ限ル。

第五十一條　此條例ヲ改正增補セント欲スル時ハ皇族及宮中顧問官ニ諮詢シ之ヲ決定ス。

皇族條例案

第一章　皇族身分

第一條　皇族ト稱スルハ太上天皇、太皇太后、皇太后、皇后、親王、內親王、親王妃、諸王、王女、諸王妃ヲ謂フ。

第二條　諸王ノ姓ヲ賜ヒ人臣ニ列シタル者、及ビ女王ノ他姓ニ嫁シタル者ハ皇族ノ列ニ在ラズ。

第三條　皇子ハ男ハ親王ト稱ヘ、女ハ內親王ト稱フ、皇孫以下ハ王、女王ト稱フ。

第四條　皇孫ヲ冊立シテ皇太子トナストキハ親王ト稱フ。

第五條　皇族ノ位列ハ總テ皇位繼承ノ順序ヲ以テ準トス、皇族女子ハ男子ノ順序ニ依準ス、位列疑議ニ涉ルトキ式部頭ノ具狀ニ由リ天皇之ヲ裁決ス。

第六條　皇太子、皇太孫ノ外皇族ノ成年ハ二十一年トス。

第七條　皇族ノ誕生、命名、薨去、婚嫁、離婚、成年及ビ賜姓ハ宮內大臣ヨリ官報ヲ以テ之ヲ公布スベシ。

第八條　皇族譜ハ圖書寮ニ於テ之ヲ尙藏ス。

第二章　皇族統督

第九條　皇族幼年ノ敎育ハ天皇親ラ之ヲ監督ス。

第十條　皇族男子幼年ニシテ父ナキ者ハ宮內ノ官僚ニ命ジテ保護及ビ敎育ノ事ヲ掌ラシム、事宜ニ由リ天皇ハ其父母ノ撰ブ所又ハ遺囑スル所ノ上申ニ由リ後見人ヲ認可シ又ハ之ヲ勅撰スルコトアルベシ、後見人ハ皇族中ノ成年者ニ限ルベシ。

第十一條　皇族ニ附屬スル高等官員及ビ敎育人員ハ天皇ノ親裁ヲ經テ之ヲ任命ス。

第十二條　攝政ヲ置クトキハ攝政ハ天皇ニ代リ第九條、第十一條ノ事ヲ攝行ス。

第三章　立后及皇族ノ婚嫁相續

第十三條　皇后及ビ皇太子、皇太孫ノ妃ヲ立ツルハ皇族又ハ公侯ノ家ニ限ルベシ。

第十四條　其他ノ親王、諸王ノ妃ハ皇族又ハ華族ノ家ニ娶ルベシ。

第十五條　皇太子以下皇族ノ婚嫁ハ天皇ノ勅許ニ由ル。

第十六條　前條ノ勅許ハ親署アル御批ヲ付シ、宮內大臣之ニ對署スベシ。

第十七條　勅許ヲ經ズシテ婚娶スルトキハ其妃タル者尊稱、禮遇、徽章、奉養及ビ其他皇族ノ特權ニ對シテ其效ヲ有セズ、所生ノ子ハ庶子ニ同ジ。

第十八條　勅許ヲ經ザル婚姻上ノ契約ハ總テ無效トス。

第十九條　皇族ハ他人ヲ子養シテ繼嗣トナスコトヲ得ズ、但シ皇位繼承ノ順序ヲ紊ラザル者ハ特ニ勅許ヲ請フコトヲ得。

第二十條　皇族ハ勅旨ニ依リ他ノ支系皇族ノ家ヲ繼承スルコトアルベシ、但シ皇位繼承ノ順序ハ仍ホ其等親ノ原位ニ依ル。

支系ヲ繼承スル者ハ其家屬ノ教養及ビ其他ノ義務ニ任ズベシ。

第四章　皇族歲費、常產及諸般賜給

第二十一條　皇族ハ帝室經費ヨリ各々歲費ヲ給フ。

第二十二條　皇太子成年ニ達スルトキハ歲費十五萬圓ヲ受ク、妃ヲ納ルヽトキハ二十五萬圓ヲ受ク。

第二十三條　皇太孫成年ニ達スルトキハ歲費十萬圓ヲ受ク、妃ヲ納ルヽトキハ十六萬六千六百六十六圓ヲ受ク。

皇太子沒シ皇太孫重キヲ承クル者ハ歲費皇太子ニ同ジ。

第二十四條　皇族攝政タル時ノ歲費ハ皇太子ニ同ジ、王妃アル時ノ加費亦同ジ。

第二十五條　成年皇族ノ爲ニ歲費表ヲ定ムルコト左ノ如シ。

一等	六萬圓	皇子	
	四萬圓	既婚加費	
二等	四萬圓	皇女	皇孫
	二萬六千六百六十六圓	皇孫既婚加費	
三等	三萬五千圓	皇孫女	皇曾孫
	二萬三千三百三十三圓	皇曾孫既婚加費	

四等	三萬圓	皇玄孫
	二萬圓	皇玄孫既婚加費
五等	二萬五千圓	十世以內男
	八千三百三十三圓	十世以內男ノ既婚加費
六等	二萬圓	十世以外男
	六千六百六十二圓	既婚加費
七等	一萬五千圓	十世以外次系男
	五千圓	既婚加費

第二十六條　諸王以下特旨ヲ以テ皇族常產ヲ賜フコトアルベシ、皇族常產ヲ賜フ者及ビ其子孫之ヲ繼續スル者ハ前條ノ例ニ依ラズ。

皇族常ノ產ハ或ハ歲費ノ元資ニ相當スル不動產又ハ證券ヲ賜ヒ、或ハ歲費ヲ以テ相續財產トナス。

第二十七條　皇子ヲ除ク外、皇孫以下ハ其嫡長子又ハ相當ノ繼嗣者ニ限リ表ニ依リ賜給ス、其ノ次子以下ハ總テ一等ヲ下シタル歲費ヲ賜フ、卽チ皇孫ニシテ次子以下ハ皇曾孫ノ歲費ヲ賜フノ類。

次子以下ノ子ハ其父ヨリ一等ヲ下シ、其次子ハ又其長子ヨリ一等ヲ下スコト上ノ例ニ依ル。

第二十八條　皇玄孫以上妃ヲ納ル、トキハ三分ノ二ニ當ル歲費ヲ加ヘ賜フ。

第二十九條　皇玄孫以下ノ成年嗣子、妃ヲ納ル、トキハ三分ノ一ニ當ル歲費ヲ加ヘ賜フ、其嗣子ニ非ザレバ加ヘ賜ハズ。

第三十條　皇族男子皇族女子ト婚スルトキハ其女子ノ受クル所ノ歲費、男子ノ既婚加費ニ充ツル者ハ加費ヲ賜ハズ、其充タザル限ヲ加ヘ賜フ。

第三十一條　皇族ノ幼男及ビ皇族女子ハ幼年成年ニ拘ラズ其父又ハ成年ノ兄アリテ其養育ヲ受クル者ハ別ニ歲費ヲ給ハズ、其父兄ナキ者ハ常產ノ繼嗣者ヲ除ク外、養育金ヲ賜フコト男子成年歲費五分一以下ヲ以テス、但シ數男女アル者ノ養育金ノ合計ハ其父ノ受クベキ所ノ歲費ノ金額ヲ踰ユルコトヲ得ズ。

皇孫以下歲費ヲ賜フハ其父兄ノ家ヲ承ケ又ハ別ニ一家ヲ爲シ又ハ妃ヲ納ル、者ニ限ル、其成年ニシテ一家ヲ爲サズ及ビ未ダ妃ヲ納レザル者ハ嫡長又ハ相當ノ嗣子ニ限リ歲費ノ五分一ヲ賜フベシ。

第三十二條　寡居ノ皇太子妃、皇太孫妃、親王妃、王妃ハ夫王在世中ノ歳費ノ半ヲ賜フ。
常產ヲ賜ヘル皇族繼嗣絶ユルトキハ、寡居ノ王妃ハ其等親ニ應ジ表ニ依リ歳費ヲ賜フコト前項ノ例ノ如シ。

第三十三條　天皇支系ヨリ入テ大統ヲ承クル時ハ皇兄弟ハ一等歳費ヲ賜ヒ、其子孫ハ遞次ニ下等ノ歳費ヲ賜フ、皇姉妹ハ二等歳費ヲ賜フ、其他伯叔以上ハ特恩ヲ請求スルコトヲ得ズ。

第三十四條　歳費ハ一年四回ニ分チ內藏寮ヨリ交付ス、歳費ハ借主ヨリ之ヲ差押ユルコトヲ得ズ。

第三十五條　皇族官ニ就ケル官俸及ビ勳功ニ依テ特ニ賜ヘル年金ハ歳費ノ外トス。

第三十六條　皇族常產ヲ賜ハリタル者ハ其家屬ノ奉養嫁娶ノ費ニ任ズベシ、若シ家屬多クシテ敎養ノ費ヲ支ユルニ堪ヘザルトキハ次男以下成年者ニ特旨ヲ以テ別ニ歳費ヲ賜フコトアルベシ。

第三十七條　皇族常產ヲ賜ヒ又ハ分割シタル者ハ男系子孫之ヲ相續ス、其特命アルヲ除ク外、支親ハ皇族常產ヲ相續スルコトヲ得ズ、若シ男系ノ子孫及ビ相續者ナキトキハ其常產ハ皇室ニ歸シ、家屬ハ別ニ相當ノ歳費ヲ賜フベシ。

第三十八條　皇玄孫以上成年ニ達シタルトキハ其父ノ宮邸ヲ繼承スベキ者ヲ除ク外、別ニ一個ノ宮邸ヲ賜フベシ。

第三十九條　皇族一個ノ宮邸ヲ賜フベキノ時ニ當リ若シ空邸無キ時ハ代料ヲ賜フ、其等差左ノ如シ。

三十萬圓以下	皇	子
二十萬圓以下	皇	孫
十五萬圓以下	皇曾	玄孫

第四十條　內親王、女王未ダ婚嫁セザル間ハ成年幼年ニ拘ラズ總テ父母ノ監護養育ニ屬ス、其婚嫁スル時ハ皇女、皇孫女ハ男子ヨリ一等ヲ下シタル歳費ヲ賜フ。

第四十一條　皇族女子出嫁ノ時粧費ヲ賜フ、其等差左ノ如シ。

三萬圓	皇嫡	女
二萬圓	皇庶	女
一萬五千圓	皇嫡	孫女
一萬圓	皇庶孫女及ビ皇曾孫女以下十世以內ノ皇族女子	

再婚ハ粧費ヲ賜ハズ。

第四十二條　內親王、女王ノ婚嫁セザル者特別ノ勅許ヲ得テ別居スルトキハ一時ニ粧費ノ半ヲ

賜ヒ、及ビ男子ヨリ一等ヲ下シタル歳費ヲ賜フ。

第四十三條　皇族妃ヲ納ル、時ヨリ加費ヲ賜フ、故ニ婚禮費ヲ賜ハズ。

第四十四條　皇族薨去ノ時歳費アル者ハ其額ノ三分一ヲ賜ヒ、葬費ニ充ツ。

第四十五條　皇族ノ多寡ニ應ジ、將來ニ皇族歳費又ハ諸般ノ賜給ヲ增減スルコトアルトキハ、内閣及ビ宮中顧問ノ諮詢ヲ經テ本令ヲ追加スベシ。

第五章　皇族財産

第四十六條　皇族ノ宮邸及ビ皇族常産ハ國税地方税ヲ課セズ、其他ノ私産ハ此例ニ在ラズ。

第四十七條　勅賜宮邸及ビ皇族常産ハ之ヲ貸借ノ抵當トシ又ハ讓與賣却スルコトヲ得ズ、其維持方法ハ皇室常産ニ準ズ。

皇族常産ノ目錄ハ宮内省之ヲ尚藏ス。

第四十八條　皇族常産ノ外、私法ニ依リ得有セシ財産ハ贈遺其意ニ隨フ、但シ生前贈遺ノ契約ナク薨去ノ後證憑アル遺命ナキ時ハ其皇族常産アル者ハ常産ニ歸シ、常産ナキ者ハ後嗣者ニ歸ス。

第四十九條　皇族常産ハ當然ニ後嗣者之ヲ繼承ス、若シ第二子以下ニ分割シ及ビ遺命ヲ以テ分割セントスル時ハ豫メ上申書ヲ呈シ天皇ノ勅裁ヲ請フベシ、但シ不動産ハ何等ノ理由アルモ女子ニ分與スルコトヲ得ズ。

遺命書ノ生存中ニ於テ勅裁ヲ得ザル者ハ特旨アルニ非ザレバ遺命ノ效ナシ。

第五十條　皇族薨去シ遺留私産別ニ證憑アル遺命ナク又民法上ノ繼承者無キ時ハ總テ皇室ニ歸ス。

第六章　皇族懲戒

第五十一條　皇族其品位ヲ辱ムルノ所行アリ又ハ皇室ニ忠順ナラザル時ハ勅旨ヲ以テ皇族特權ノ全部又ハ一部ヲ剝奪シ又ハ停止スベシ。

第五十二條　皇族蕩産ノ所行アルトキハ勅旨ヲ以テ治産ノ禁ヲ申渡シ、其財産管理者ヲ任ズベシ。

第五十三條　前二條ノ場合ニ當リ天皇ハ皇族會議ヲ開キ諮詢シタル後之ヲ決定ス。

第七章　皇族訴訟裁判

第五十四條　皇族相互ノ訴訟及ビ皇族ノ身分ニ係ル訴訟ハ皇族會議ヲ開キ天皇親臨シテ裁判シ又ハ事宜ニ由リ特別ニ裁判員ヲ命ジ裁判セシムベシ。

皇族會議又ハ特別ノ裁判ハ普通ノ法式ニ拘ラズ。

第五十五條　前條ノ裁判ハ控訴又ハ上告スルコトヲ得ズ。

第五十六條　皇族ト人民トノ間ニ起ル物件ノ民事及ビ違警罪ノ訴訟ハ、普通ノ法衙ニ於テ裁判ス。

皇族ハ其財産ノ主任員ヲ以テ法律上ノ代人トシ、自ラ訴訟ニ當ルコトナシ。

第五十七條　皇族ノ重輕罪ハ元老院ニ於テ特ニ裁判員ヲ組織シ之ヲ裁判セシメ、勅裁ヲ得テ施行ス。

皇族ハ勅許ヲ經ルノ後ニ非ザレバ拘引スルコトヲ得ズ。

第五十八條　皇族ノ科罰ハ總テ刑法ニ依ル。

第八章　皇族會議

第五十九條　皇族會議ハ皇族成年以上ノ男子ト及ビ内大臣、司法大臣、宮内大臣、元老院議長大審院長、其他皇室諸部ノ勅任官中ヨリ特撰シタル者ヲ以テ組織ス。

司法大臣ハ皇族會議ノ專任報告員タルベシ。

第六十條　天皇若シ皇族會議ニ親臨セザルトキハ皇族中ノ一人ヲ指シテ議長タラシムベシ。

第六十一條　皇族會議ハ天皇ノ裁決ヲ經ザレバ其效ヲ有セズ。

第九章　皇族列臣籍

第六十二條　皇族繼承ノ權アル者十員以上ニ充ツルトキハ、皇玄孫以下疎遠ノ皇族ヲ以テ遞次臣籍ニ列スルコトアルベシ。

但シ皇族蕃殖シ皇位繼承ノ權アル者不足ナキトキハ皇玄孫以上モ亦臣籍ニ列スルコトアルベシ。

第六十三條　皇族臣籍ニ列スル時ハ女子ノ眷族タル者ハ之ニ附籍ス、事宜ニ依リ庶兄及ビ子弟モ亦此例ニ依ル。

第六十四條　皇族臣籍ニ列スル時ハ、桓武天皇以來ノ例ニ依リ姓ヲ賜ヒ府縣ニ貫屬セシム。

第六十五條　皇族臣籍ニ列スル時ハ皇系親疎ノ等差ニ從ヒ爵ヲ授クルコト左ノ如シ。

公爵	皇玄孫以上	
侯爵	十世以內	
伯爵	十世以外	
子爵	十世以外次系	

第六十六條　皇族ノ功勞アル者ハ爵ヲ授ケ又ハ進ムルコト前條ノ例ニ拘ラズ。

第六十七條　授爵ノ時ハ家資トシテ公債證書又ハ政府ノ保證アル會社ノ證券ヲ賜フベシ。

其收入歲額ハ左ニ開列スル所ニ依ル。

公爵	四千五百圓
侯爵	四千圓
伯爵	三千五百圓
子爵	三千圓

第六十八條　重輕罪又ハ懲戒ノ爲ニ臣籍ニ列シタル時ハ第六十五條及ビ前條ニ定ムル所ノ限ニ在ラズ。

第六十九條　賜フ所ノ家資ハ其父祖ヨリ遺傳セシ常產收入歲額第六十七條ノ定數ニ充タザル限ニ迄之ヲ補給スル者トス、常產其定數ニ充ツル時ハ別ニ賜フコトナシ。

第十章　附則

第七十條　現在ノ皇族既ニ親王ノ號ヲ宣賜シタル者ハ舊ニ依ル、內親王モ亦同ジ。

第七十一條　現在ノ宣下親王ノ子ハ家格ニ拘ラズ總テ王、女王トス。

第七十二條　現在既ニ皇養子、皇猶子又ハ其他ノ繼嗣タル者ハ舊ニ依ル、但シ皇位繼承ノ順序現在ノ宣下親王及ビ諸王ニ及ブ時ハ總テ實系ノ等親ニ依リ皇養子、皇猶子又ハ他繼嗣タリシ故ヲ以テ混ズルコトナシ。

第七十三條　現在ノ宣下親王及ビ諸王ニ歲費ヲ賜フノ等差ヲ定ムルコト左ノ如シ。

十世以內	熾仁親王ノ系及ビ威仁親王
十世以外長孫	貞愛親王及ビ子及ビ長庶兄

十世以外次孫　貞愛親王ノ庶弟及ビ叔父ノ系

第七十四條　現在宣下親王ニ常産ヲ賜ヒ子孫繼續ノ皇族トスルハ特ニ勅旨ニ依ル。

第七十五條　親王、內親王ノ敍品、諸王、女王ノ敍位ハ總テ之ヲ廢止ス。

第七十六條　親王ノ家格又ハ一代、二代皇族ニ列スルノ諸達及ビ其他本條例ニ牴觸スル者ハ總テ之ヲ廢止ス。

第七十七條　本條例ニ附屬スル諸般規則ハ別ニ之ヲ定ムベシ。

皇室典憲ニ付疑題乞裁定件々

『……』ハ朱書

『疑題中ノ重件ハ既ニ總理大臣ノ指揮ヲ得、更ニ又柳原伯ノ意見ヲ酌ミ立案セリ。此ノ卷ハ存シテ以テ後日ノ考ニ備フ』

井上毅

目次

一、繼嗣順序ヲ變換スル場合ノ事
一、皇太子在ラズ皇太子ノ子孫モ在ラザルトキノ傳位ノ事
一、踐祚卽位ノ事

一、天皇幼年ノ時ニ太傅ヲ置ク事
一、攝政ノ成年ノ事
一、皇位ノ璽章ノ事
一、親王宣下ノ事
一、皇室財產ノ事
一、皇族歲俸ノ事
一、皇太后ト皇后トノ位次ノ事
一、先帝ノ親王ト今上ノ親王トノ位次ノ事
一、立太子ノ事
一、庶出皇族ノ事
一、四親王家處分ノ事
一、皇孫以下ノ歲費ニ長系ト次系トヲ分ツヤ否ヤノ事
一、皇族位列ノ事

一、繼嗣順序ヲ變換スル場合ノ事。

此レハ皇位繼承ニ取テノ一大事ナリ。

宮中顧問會議ノ說明朱書ニハ（攝嗣順當ノ皇子前記ノ如キ違豫ナルトキハ繼嗣ノ權ハ次ノ皇子ニ傳フ）トシタリ。

柳原案ニ依レバ（皇位繼承者ヲ心性又ハ外形ノ虧缺又ハ其他ノ事故ニ依リ繼承ノ順序ヲ變換スルコト必要ナルトキハ元老院ニ諮詢シテ之ヲ決定ス）トシタリ。此レハ英國ニテ下院ノ議ヲ以テ繼承ノ順序ヲ換フルノ例ニ依ルガ如シ。又主トシテ佛ノ三世「ナポレオン」ノ時ノ元老院ヲ以テ憲法ノ看守トシタルニ依レバ（繼嗣ノ事、一タビ外議ニ付スルトキハ多事ノ弊ハ必ラズ免ルベカラズ。改メテ宮中顧問トセラルベキニ似タリ）。李國ノ法ニ依レバ何等ノ病氣アリトモ繼承ノ順序ハ變易セズシテ攝政ヲ用ヒテ之ヲ輔攝ス。

右ノ三ノ方法ノ中、宮中顧問ノ議尤モ便宜ニシテ我國ノ先例及ビ事情ニ適スルニ似タリ。李國ノ法ハ從前王位ヲ以テ私有トシ、民法ノ相續法ニ據行シタル舊習ヨリ由來スルモノニシテ、政事上國法ノ相續ニ適當ナラズ。然ルニ此事ハ繼承法ノ最重事ナリ、若シ宮中顧問ノ議ニ從ハル、ナラバ、說明ニ止メズシテ必ラズ明文掲載ヲ要スベシ。

獨逸ノ舊法ニ從ヘバ此ノ如キ非常ノ場合ニハ繼承ノ順序ヲ換フルヲ以テ常トス

甲、何等ノ病患モ繼承ノ順序ヲ變ゼズ。

乙、繼承ノ順序ヲ變ズルトキハ元老院ニ諮詢ス。

（或ハ改メテ宮中顧問トス）

『……』ハ朱書以下之ニ倣フ

樞密顧問トス』

丙、一條ノ明文ヲ以テ繼承者順序變換ノ場合ヲ定ム。

右ノ中ノ一ニ定メラレンコトヲ乞フ。

『乙、丙ヲ參酌シ、元老院ヲ皇族會議及ビ樞密顧問ト改ム』

一、皇太子在ラズ、皇太子ノ子孫モ在ラザルトキノ傳位ノ事。

宮中顧問ノ案ニ從ヘバ、

皇太子及ビ其子孫倶ニ在ラザルトキハ左ノ順序ニ據ル。

一、皇次子、皇三子以下

二、皇次子ノ子孫

三、皇三子ノ子孫

以下準之、倶、皇次子、皇三子ト雖モ立坊ノ後ハ直ニ其子孫ニ傳フ。

トシタリ。

柳原案ニ從ヘバ、

（皇長子ノ子孫在ラザルトキハ皇次子以下及ビ其子孫ニ傳フ）

トシタリ、皇次子及ビ其子孫ニ傳ヘ、皇次子及ビ其子孫在ラザルトキハ皇三子ニ傳フルノ意ナルベシ。

大要兩案ニ分ル。

甲、

（一）皇長子――（二）皇長子ノ子――

（三）皇次子――（四）皇次子ノ子――

（五）皇三子――

乙、

（一）――（二）

（三）――……（五）

（四）――

此事關係甚ダ小ナラズ、兩案ノ一ニ裁定ヲ乞フ。

『甲ニ從フ』

一、踐祚、卽位ノ事。

上古御國ノ習ハシニテハ踐祚ハ卽チ卽位ニテ別事ニ非ラズ、(令ノ義解ニ、天皇卽位謂之踐祚、祚位也、福也トアリ)又踐祚ノ日ニ三種神器ヲモ奉ラレタリ。

此ノ古代ノ風ハ英國ノ有名ナル古諺ニ、國王不死ト謂ヘル、卽チ國王ハ一個人ニ非ラズシテ國家ノ代表ナルガニ故ニ、前王世ヲ去ルトキハ後王卽時位ヲ繼ギ寸間ノ空位アルヲ容レズトノ主義ニ符合スルモノナリ。

然ルニ天智天皇ニ至リ唐ノ禮服ヲ用ヒ卽位ノ禮ヲ定メ玉フ(醍醐地藏院古記)、而シテ位ヲ繼ギナガラ仍ホ皇太子ト稱ヘ、七年ノ後ニ始メテ卽位ノ禮ヲ行ヒ天皇ト稱ヘ玉フ。是レ踐祚ト卽位ト兩樣ノ區別ヲナシタル初メナリ。其後桓武天皇ニ至リ皇位ヲ繼ギ、卽チ天皇ト稱ヘ、後ニ卽位ノ禮ヲ行ハル。是ヨリ後、歷代踐祚ノ後或ハ數年ニシテ卽位ノ禮ヲ行ハレタルコトアリ。(然ルモ神器ハ必ラズ踐祚ノ時ニ於テ奉ルコト上古ト異ナラズ)。此ノ近來ノ習ハシハ卽位ノ禮ハ歐洲ノ「コロネーション」ト全ク相似タリ。

今左ノ案ニ裁定アランコトヲ請フ。

踐祚ヲ以テ卽チ皇位繼承ノ事トシ、此時神器ヲ奉リ直チニ天皇ノ尊稱ヲ繼ギ玉フベシ。

『依』

一、天皇幼年ノ時ニ太傅ヲ置ク事。

柳原案ニ特勅アル時ニ攝政參議ヲ置キ、攝政ヲ輔佐スルコトヽシタリ、是レハ巴威爾佛國、葡國等ニ依ルモノニシテ、獨逸學者ノ說ニ從ヘバ、共同執政(攝政參議)ハ君主政ノ精神ニ背ク、故ニ攝政參議ノ案ハ削除スベキニ似タリ。

但シ攝政ノ外ニ太傅ヲ置クコトヲ憲法又ハ家憲ニ揭グルハ(和蘭等)、畢竟攝政ノ專恣ヲ防制スル爲ニシテ、攝政及ビ其子孫ハ太傅タルコトヲ得ズ等ノ細密ナル條章ヲ設ケタリ。柳原案ハ正ニ此ニ依リ構成サレタルナリ。然ルニ獨逸ノ法ニ從ヘバ、攝政ハ榮譽特權ノ外ハ總テ天皇ニ同ジトシ、攝政ニシテ太傅ヲ兼ヌルモ又ハ別人ニ太傅ヲ任ズルモ皆攝政ノ權ニ委ネタリ、此ノ兩樣ハ一問題ナルベシ。

攝政ノ外ニ太傅ヲ置キ之ヲ家憲ニ揭グルヲ甲案トス。

太傅ノ事ハ家憲ニ揭ゲズ、置クト置カザルトハ時ノ便宜ニ從フ、是ヲ乙案トス。

右裁定ヲ乞フ。

『甲ニ從フ』

一、攝政ノ成年ノ事。

柳原案ニ攝政ノ成年ハ天皇及ビ皇族ノ例ト同ジク十八歳トシタリ、然ルニ今茲ニ十七歳ノ天子アルノ場合ニ當リ、最近ノ皇族攝政ノ順序ニ當レル人ハ僅カニ十八歳ヲ踰ユ、現在天皇ト一歳ノ差アラント假定セバ、仍ホ其人ハ家憲ニ依リ攝政トナルベシ。此レ事情ニ適セザルニ似タリ、故ニ佛國、葡國ノ例ニ依リ攝政ノ爲ノ成年ヲ二十五歳ト定ムルカ、又ハ伊國ニ依リ二十一歳ト定ムベキガ如シ。

右乞裁。

又或國ノ例ニ依リ、天皇ノ成年ヲノミ憲法又ハ家憲ニテ定メ、其他ノ皇族ハ普通ノ丁年法ニ從ハレテハ如何、成年ノ皇族ノ賜邸、賜俸等ノ都合ト並ニ教育ノ爲ニハ却テ便宜ナルガ如シ。

『末ノ說ニ從フ』

一、皇位ノ璽章ノ事。

柳原案ニ（第六十八條）皇位ノ璽章ハ、

一、大日本國璽

一、天皇御璽

一、皇帝之寶

一、天子神寶

ノ四ツトセリ。

然ルニ大日本國璽ヲ以テ皇位ノ璽章トスルコト我國ノ古典並ニ各國ニ俱ニ例ナキコトニテ、此レハ一新以後ニ御璽ヲ一名國璽ト稱スル名義ヨリ誤マリ來リ、遂ニ國璽ヲ彫刻スルニ至リタルナリ。其實ハ支那ニテ國璽ト云ヘルハ卽チ御璽ノ事ナリ。

夫レ大日本國ヲ代表セル天子ニテ、其天子璽章ニ天皇又ハ皇帝ノ尊號ヲ用ヒズシテ仍ホ大日本國ノ名ヲ用フルハ、名分ニ於テモ君主政體ノ主義ニ於テモ改メザルベカラザルモノナリ。

大日本國璽ト云ヘル璽章ハ削ルベキヤ、乞裁。

『削』

一、親王宣下ノ事。

古ハ親王トハ卽チ皇子ニテ親王宣下アルコトナシ、親王宣下ハ光孝天皇ノ時ニ、皇子湯原王、榎井王ノ諸王ナリシヲ親王トシ玉ヘルヨリ始マレリ。故ニ維新後（明治九年五月三十日布告）御直ノ宮ノ親王宣下ヲ廢セラレタルハ當然ト謂フベシ。

然ルニ嫡親王ト庶親王ノ間ニ又一概ニ謂ヒ難キコトアリ、今日嫡親王ノ御誕生ノ公布アリテ庶親王ハ公布ナシ、若シ庶親王ヨリ直ニ立太子ノ事ヲ行ハセラルヽノ場合アリトセンニ、是レ國民ノ未ダ承知セザル皇子ニシテ、遽ニ太子ノ位ニ立チ玉フナリ。故ニ庶親王ノ爲ニハ親王宣下ノ式ヲ行ヒ、眞實ノ親王タルコトヲ認メ玉ヒテ遍ネク內外人民ニ公布アルハ一種ノ便法ナルニ似タリ。

公布ナキノ皇子ニシテ立太子ノ事アリ又或ハ直チニ大位ニ登リ玉フコトアラバ洋人ノ所謂皇位ハ明白ヲ要スト謂ヘル主義ニ違フナリ

歐洲ニテ王室ニハ私生子ヲ認ムルコトヲ許サズト雖モ、那破侖三世ハ憲法ニ於テ養子ヲ以テ帝位ヲ繼グコトヲ許シタルハ、佛國ノ法律家ノ問題ニ私生子ヲ養子トシテ相續ヲ許スベキヤ否ヤノ事ノ未定タルヲ利用セントシタリト云フ、此レ固ヨリ模範トスルニ足ラズト雖モ亦一ノ參照トスルニ足ル。

故ニ左ノ兩案ノ一ニ裁定アランコトヲ請フ。

甲、總テ親王宣下ヲ廢シ皇子ハ生レナガラ親王ト稱ヘ、其他ハ諸王トス（宮中顧問ノ案）、

或ハ皇子孫ハ皆親王ト稱ヘ、其他ノ皇族ハ諸王トス。

世襲親王ヲ廢ス（柳原案）。

乙、嫡皇子ハ生レナガラ親王ト稱ヘ、庶皇子並ニ其他ノ皇族ニハ親王宣下ノ式アリテ始メテ親王トス。

『宮中顧問ノ案ニ依ル。

其ノ後第二案ニ於テ改メテ玄孫以上親王トス』

一、帝室財產ノ事。

帝室財產ノ一語ハ兩樣ノ解釋ヲ有シ、而シテ往々混雜シ易キガ如シ、兩樣ノ解釋トハ其一ハ、

帝室全部ノ費用ニ充ツル爲ニ帝室ノ財產ヲ定メ、現在官有地ヲ以テ悉皆御料地トシ御料局ニ屬ス。

又他ノ一ハ、

帝室內部ノ御料、卽チ御手元金ニ充ツル爲ニ帝室ノ私產ヲ定メ御料局ニ屬ス。

第一ノ解釋ハ歐洲各國ノ所謂「シウイル、リスト」ニシテ、帝王ノ尊嚴ナル供奉ニ充

ツルモノ、卽チ帝王ノ公產ナリ。故ニ此ノ解釋ノ主義ヲ實行スルトキハ巨大ナル財產ヲ分割シテ御料地トナスヲ必要トス。

第二ノ解釋ハ其中ニ或ハ帝室相傳ニ屬シ、或ハ帝王一身ニ屬スルノ區分アレドモ、均シク私法ノ範圍ニ係リ政權ニ關係ナク、御手元ノ御遺料タル私產ノ性質ニ歸スルモノナリ。故ニ此ノ意義ニ依ルトキハ之ヲ實施スルニ當テ巨大ナル御料地ヲ定メラルベキニ非ラズ。

獨逸學者ノ說ニ據ルニ、獨逸ニ於テ此ノ第一、第二ノ公私兩樣ノ意義ヲ混淆シテ王室ノ財產ヲ以テ王家ノ公費ヲ支辨セントシ、從テ王家ノ私產ヲ封殖スルヲ以テ必要トシ國民ト利ヲ爭フニ汲々タルノ邦少ナカラズ（シルチエー氏）侯國（クール、ヘツセン）ニ於テ千八百十三年ニ六千萬「フロレン」ノ價値アル財產ノ處分ニ關シ、君主ト豪族トノ間ニ紛爭ヲ生ジ、或ハ國主ノ私有物ナリトシ、或ハ國有物トシテ抗議解ケザリシガ如キ是レナリ。（ホツプ氏ニ據ル）。

孛國ニ於テハ他ノ獨逸各國殊ニ墺國ノ努メテ王家ノ私產ヲ封殖スルニ拘ラズ、其祖先以來、一國ノ君主ハ一國ノ元首ニシテ公權ニ屬シテ私權ニ屬セズ、故ニ君主ノ奉養ハ當然ニ國庫、卽チ國有物ノ入額ヨリ供給スベクシテ、私產ヲ以テ供給スベキニ非ラズトノ大義ヲ發明シ、「フリドリヒ、ウヰルヘルム」一世王ハ千七百十三年ニ於テ王領地ヲ擧ゲテ官有物ニ歸スベキコトヲ明言シ、同時ニ其入額ノ中二百五十萬「ターレル」ヲ以テ王室ノ經費（シヴイル、リスト）ニ當テタリ。孛國普通法典ハ特ニ一條ヲ揭ゲタリ、曰ク、王領地及ビ王室財產ハ政府ノ特ニ所有スル不動產ナリト、故ニ孛國ニ於テハ王領地卽チ官有地ニシテ、其入額ハ一ニ國ノ元首ノ需要ニ供シ、一ハ國ノ他ノ需用ニ供スルモノナリ（リオンネ氏ニ據ル）。

「ウユルテムベルク」國モ亦孛國ニ倣ヒ、憲法第百三條ニ於テ「王室財產ハ王國ヨリ分離スベカラザル官有物ナリ」ト明言シタリ。（百八條ニ於テ別ニ王家ノ私產ヲ定ム）。

シカノミナラズ、孛國法典ハ君主ノ私有財產ニ就テモ亦左ノ如ク規定シタリ、曰ク、私有財產ノ得有主タル國王ニ於テ生前ニ又ハ死後ノ爲ニ不動產ノ處分ヲ定メ置カザルトキハ、此ノ不動產ハ國ノ王領地ニ合併シタルモノト看做スベシト。（第二部第十四篇第十四條第十五條）。

再ビ獨逸學者ノ說ニ據ルニ、歐洲中古ノ君主封建ノ一大豪族タルニ當テ國家ヲ以テ私權トナシ、各々私有ノ領地ヲ占メ、其入額ニ依リテ一家ノ奉養ト並ニ政務ノ經費ヲ支辨シタリ。此レ乃チ內庫費ノ由テ起ル所ノ原因ナリ。其後各領主ノ上ニ君臨スルニ及

ンデ非常ノ費用ト稱シ、各領主ヨリ貢稅ヲ徵ス。爲ニ豪族會議ニ於テ徵收ノ承諾ヲ取リタリ。此レ又他ノ一方ニ於テ租稅承諾ノ議權ノ由テ始マル所ナリ。（シルチエー氏、リオネ氏、ロスレル氏）。

我國ハ上古ヨリ帝室及ビ政府ノ費要ハ均シク全國ノ義務ニヨリ徵收スル所ノ租稅ヲ以テ之ヲ支辨シ、更ニ帝室ノ經費トシテ別ニ財產ヲ置カレザリシハ全ク至尊ノ位ヲ以テ公法上ノ一國ノ元首トシ、一家ノ私事トナサヾル所ノ立憲ノ大則ニ符合スルモノナリ。（但シ屯倉（ミヤケ）田ノ設ケアリシハ卽チ前ニ擧ゲタル第二ノ解釋ノ種類ニシテ、御手元御料ノ性質ナリシナルベシ）。

屯倉田ノ御手本料ナリシコトハ歷世ノ天皇ノ皇后又ハ皇子ノ爲ニ屯倉ヲ置カレ或ハ寵臣ニ賜ヒシ事アルニテ知ラレタリ

此事ハ我ガ憲法ヲ建テラルヽニ於テ、一方ニ於テハ內庫費ノ陋制ニ依ラズ、他ノ一方ニ於テハ議稅權ノ過度ナル擴張ヲ許サヾル爲ニ、第一ニ貴重スベキ國體ノ基礎ナリト信ズ。

一、帝室經費ハ國法上ノ必要ニシテ國庫ノ最重義務ナリ。（官有地入額ト租稅トニ拘ラズ）。

一、憲法又ハ他ノ法律ヲ以テ定メラレタル帝室經費額ハ會議ノ結果ヲ以テ之ヲ左右スルコトヲ得ズ、又決算ヲ勘査セズ。

一、現在ノ官有地ハ卽チ皇有地ニシテ、官有ト皇有トノ分割ヲ爲サズ。但シ大藏省ノ管理ニ屬シ（又ハ農商務省、又ハ內務省）宮內省ニ屬セズ。

一、帝室ノ儲蓄ヨリ生ジタル私法上ノ財產ハ御料局ニ於テ管理ス。

一、御料局管理スル所ノ財產ハ官有地ト全ク之ヲ區別ス。

此ノ方法ハ獨リ國體及ビ立憲ノ主義ニ適フノミナラズ、又實際ノ便宜ヲ得ルモノナリ、左ニ「ウエルケル」氏ノ說ヲ抄錄ス。

（問）王室費ハ王領地ノ入額又ハ其他ノ入額ヲ指定シ、王室ニ奉供スルヲ便宜トスルヤ、又ハ「ハヌーウエル」國ノ如ク一定ノ土地山林ヲ以テ王室ノ直轄トスルヲ便宜トスルヤ。

（答）此ノ疑問ハ私心過慮ニ起ルモノナリ、國庫ノ歲入ハ王室直接ノ歲入ニ比スレバ賤汚ナルモノニ非ラズ、又危險ナルモノニ非ザルナリ、彼ノ一定ノ土地ヲ以テ王室ノ直轄トスルガ如キハ、既ニ「ハヌーウエル」ニ於テ經驗シタルガ如ク、王室ノ土地政府ノ管理ヲ受ケザルガ爲ニ無益ノ冗費ヲ要シ、且ツ經理其宜シキヲ得ザルコトヲ免レザルナリト。

右仰裁定。

『現今ノ官有地ハ卽チ皇有地ノ性質トシ、大藏省ニ管理セシム。
但シ皇室常產ヲ置ク』

一、皇族年俸ノ事。

皇族ノ年俸ヲ賜フニ兩樣ノ法アリ。

甲ハ各皇族ノ等親ニ應ジ、一代限ニ年俸ヲ賜ヒ、縱令年俸ヲ換ヘ不動產ヲ賜ヒタルニセヨ、又一代限ニ皇室ニ還歸セシメ、其子孫ハ又其等親ニ應ジ、遞減シテ別ニ給ス。(柳原伯ノ案)。

四親王家ハ乙ノ性質ナリ

乙ハ親王及ビ皇太孫ヲ除ク外ハ支系別家ノ性質トシテ定俸ヲ賜ヒ、其正統子孫ニ相續セシム。其支系ノ二三男ハ其未丁年ニ當テハ家主ヨリ奉養シ、丁年ノ後ハ其父ノ三分一ニ充タザル年俸ヲ補給ス。(是レ李遜、巴威爾等ノ國ニ行フ所ナリ)。

右兩樣ノ一ニ定メラレンコトヲ乞フ。

『巴威爾家憲第六章第六條ニ、次生ノ皇子ハ其給養費ノ定マリタル上ハ其一族ノ給與ハ勿論、其息女ノ嫁資、其息男ノ構邸費並ニ給與及ビ自系中ノ守寡費ノ支辨ヲナサヾルベカラズ。若シ第一族多數ニシテ其給養費ヲ以テ應分ノ給與ヲ爲スニ堪ヘザルカ、或ハ支系ノ皇子ノ爲メ王家ノ皇子ノ給養費ヲ最少額三分一ニモ給與スルコト能ハザルトキハ、國王ハ其缺額ヲ補塡ス。

次生皇子ノ支系中ニ斷絕スルモノアルトキハ、其支系皇子ニ與フル給養費額ハ之ニ付着スル守寡費及ビ皇女ノ給與及ビ嫁資ノ負擔ト共ニ其支系ノ他族ニ平等ニ分配ス。但シ該支系最後ノ系主ニ於テ既ニ國王ノ認諾ヲ經テ定メタル所アルニ非ザレバ、國王ハ該給養費額ヨリ該皇女ニ與フベキ給與及ビ嫁資ヲ定ムルノ權アリトス。

李遜王國家法第二十五章ニ、王ノ二三男已下ノ王男ノ領收セラル、所ノ歲費ハ其薨去ニ際シ其男系ノ王男ニ歸ス。

但シ該王男ハ諸男女ノ活計及ビ孀婦ノ見繼料ヲ負擔セザルベカラズ。

王ノ二三男已下ノ王男ニシテ在世中王ノ許可ヲ經タルトキハ其歲費ヲ如何ニ其男系王男ニ配分スル乎ヲ定ムルコトヲ得。

同第二十七章ニ王ノ二三男已下ノ王男若シ其眷屬特ニ夥シク、隨テ定額歲費ヲ以テ應分ノ家計ヲ營ム能ハザルトキハ國庫ヨリ其不足ヲ補給スベシ。

『兩樣兼ネ用ヰテ立案ス』

一、皇太后ト皇后トノ位次ノ事。

今皇族ノ位置ヲ敍列センニ、皇太后ト皇后トハ何レヲ前ニ置クベキヤ。

獨逸各國ノ家憲ハ皇后ヲ先ニシ皇太后ヲ後ニシタリ。

露國ノ家憲ニハ其第二十八條ニ云ク、皇后ハ寡居ノ時ト雖モ夫ノ皇帝在世ノ時ニ異ナルコトナク一定ノ權利ヲ有ス、故ニ在位ノ皇帝ノ皇后ヨリ首位ニ屬ストアリ。

右兩樣ノ中何レヲ御採用アルベキヤ。

若シ皇太后ヲ以テ前ニ置クノ議ニ決セラルレバ、從テ一般皇族ノ位列モ亦先帝ノ親王ヲ以テ今上ノ親王ノ上ニ位次セラルベシ、此ノ議如何。

露國ノ家憲第二條ニ云ク、皇族親屬ノ等級ハ嘗テ皇帝タリシ本案ヨリ生ジタル親疎ノ等差ニ準ズト、第二十四條參看スベシ。

李遜第三章ニ云ク、王男、王女ノ階級ハ、王ノ血緣ノ親疎ヲ以テ之ヲ定ムト。

亦取進止。

『皇后ヲ上位トス、

後第二案ニ露國ノ例ニ依ル』

一、皇太子ノ事。

皇太子ノ事ハ上代ノ日嗣御子ヨリ傳來シタル典故ナレバ之ヲ保存セラルヽハ當然ノ事ナルベシ。但シ左ノ疑題アリ。

甲、往古以來太子ノ名義ハ御父子ニ拘ラズシテ一ノ宣下ノ性質ヲ爲シタリ。故ニ御兄弟ノ間ニハ立太弟ト宣命アルノ外、皇姪ヲ立坊アルモ亦太子ト呼ビ（成務天皇日本武尊ノ第二子ナル足仲彥尊ヲ立テヽ皇太子ト爲ス、卽チ仲哀天皇ナリ）從姪孫ノ天皇ヨリ族叔祖ヲ立坊アルモ亦太子ト呼ベリ（孝謙天皇ノ淳仁天皇ニ於ケル）。今皇位繼承ノ順序ヲ定メラレ、皇子孫ナキトキハ皇兄弟ノ皇伯叔ニ傳フトセラレンニ、此時立太子ノ冊命アルベキ乎。

乙、若シ立太子ハ皇子、皇孫、皇姪ノ卑屬親ニ限リ、其他ノ同等親以上ニハ行ハルベキニ非ラズトセバ、皇兄弟以上ノ繼承ノ時ニハ踐祚ノ日迄何等ノ宣下モナクシテ打過ギ玉フベキ乎。

前ノ議ニ從ヘバ立太子ハ養子ノ性質ノ如クナリテ名義穩ナラズ、後ノ議ニ依レバ實際ノ事情ニハ稍ヤ適當ヲ缺クニ似タリ。

又履仲天皇、反正天皇（皇弟）ヲ以テ儲君トシ玉ヒシ例ニ依リ、儲君ノ名義ヲ法律上ニ

定メラレ宣下公布アルベシトノ議モアルベシ。此レモ當時ハ「ヒツギノミコ」ト稱フル名號ハアリシナルベケレドモ、儲君ノ字ハ史家ノ當テ用ヒタルニテ、綽號ニ類シ、今日法律上正當ノ名稱トハナシ難キニ似タリ。

此ノ事如何御決定アルベキカ。(敍品ヲ存セラレ一品親王宣下ヲ以テ換用アルモ亦一ノ便宜法ナルニ似タルカ)。

『乙ニ從フ、一品親王ノ說不取』

一、庶出ノ皇族ノ事。

皇位繼承ニ於テ已ニ嫡庶ノ分ヲ嚴重ニシタル上ハ、庶出ノ皇族モ亦嫡出ト區別アラシムベキニ似タリ、如何ノ區別アラシムベキ乎、其席次並ニ歲俸ハ如何。

又勅許ヲ經ザル皇族ノ婚姻ニ誕生アリシ子ハ庶子ニ準ズベキ乎。

右乞裁。

『嫡庶ノ分ヲ以テ起案ス』

一、四親王家處分ノ事。

中古ノ制五世以下ハ姓ヲ賜ヒテ人臣ニ列スルコトアリタレドモ(或ハ五世ヲ待タズトモ)、歐洲ノ例ヲ參考スルニハ、皇族ノ子孫ハイツマデモ皇族ニテ人臣ニ降ルコトナシ。故ニ孛國ノ如キハ其祖先ヨリ分流シタル小宗ノ王族アリテ、其一ヲ「ホーヘンツヲーレルン、ヘシンゲン」家トシ、其二ヲ「ホーヘンツヲーレルン、シマリンゲン」家トス。(但シ、「ヘシンゲン」家ハ今ハ斷エタリ)、此ノ二家ハ諸般ノ家格總テ王室ニ同ジク、我國ノ四親王家ト粗似タリ。此主義ニ從ヘバ現在ノ親王家ヲ廢スルハ如何アラン。且ツ又支系ノ皇族ヲ存立スルハ獨リ皇嗣ノ儲備トナスノミナラズ、皇家ノ婚姻上ニ於テ其道ヲ廣カラシムル便宜アルニ似タリ。

或ハ五世親絕ノ主義ト、宗室世襲ノ原則トヲ兩存シテ天皇ノ特旨處分ニ任セテハ如何。

右乞裁。

『未定。

後、第二案世襲親王家格ヲ廢ス』

一、皇孫以下ノ歲費ニ長系ト次系トヲ分ツヤ否ヤノ事。

皇孫以下ニハ其支系中ニ又長系ト次系トアリテ、支那ノ大宗小宗ノ如ク、段々ニ枝分

スベキナリ。然ルニ長男ト次男以下ヲ分タズシテ一概ニ歳費表ニ依リ賜給セラレンコト如何アラン。第一ニハ大宗ト小宗トノ區分ナキハ道理ニ合ハザルナリ。第二ニハ長系ノ方ハ婦女ト幼弟トノ眷屬ノ教養ヲ擔ヒ、次男以下ハ此ノ負擔ナキニ歳費ハ同等ナルハ公平ナラザルナリ。

或ハ皇孫以下嫡長繼嗣者ニ限リ、表ニ依リ賜給シ、其他ノ次男以下ハ遞次ニ一級下等ノ歳費ヲ賜フトセンコト適當ナルカ。例ヘバ皇曾孫ノ父ノ繼嗣タルハ第三等費ヲ賜フモ、其次系ニシテ父ノ繼嗣タラザルハ第四等費ヲ賜フガ如シ。

右仰裁。

『長系次系ヲ分ツ』

一、皇族位列ノ事。

皇族ノ席次ヲ專ラ皇位繼承ノ順序ニ依ラントスルトキハ、種々不都合ノ事情アリ。

第一、皇族女子ハ總テ男子ノ極末ニ列ヲ占メラルベキ乎。

第二、同ジク天皇ノ皇子ナリ、而シテ先帝ノ皇子ハ今帝ノ皇子ヨリ下ニ列スベキ乎。

叔ハ姪ノ下ニ列スベキ乎。

露國ノ皇族令ニ從ヘバ、第一等ノ尊稱ヲ皇子女兄弟姉妹及ビ皇孫ニ授ケ、第二等ノ尊稱ヲ皇曾孫ニ授ケ、其尊稱ノ等級ニ從テ位列ヲ爲ス、是レ乃チ先帝ノ親王ハ今帝ノ曾孫ノ上ニ列シ、皇位繼承ノ順序ニ拘ラザルナリ。

今斟酌シテ左ノ如ク定メラルベキ乎。是レ一案ナリ。

（甲）凡ソ皇族ノ位列ハ總テ親等ニ依ル、卽チ凡ソ皇子ハ皇孫ニ先ダチ、皇孫ハ皇曾孫ニ先ダツノ類。

親等ヲ數フルハ其由テ出ル所ノ天皇トノ間ノ親等ニ從ヒ、今上トノ間ノ等親如何ニ拘ラズ。

凡ソ皇子ハ先帝ノ皇子ト今上トニ拘ラズ總テ嫡長ノ次第ニ從フ、皇孫以下皆同ジ。

皇太子、皇太孫、皇太曾孫ハ前次ノ例ニ在ラズ。（右露國ニ依ル）。

（乙）皇族ノ位列ハ總テ皇位繼承ノ順序ヲ以テ準トナス、但シ天皇ハ特ニ皇孫ノ位列ヲ指定スルコトヲ得。（孛遜ニ依ル）。

皇族女子ハ男子ノ順序ニ依準ス。

右乞裁定。

但シ或ハ暫ク明文ニ載セズシテ之ヲ式部ニ任スルモ尤モ可ナルニ似タリ。

『乙ニ依ル。

後、第二案末ノ但シ説ニ依ル』

皇室典範第二十一條修正意見

皇室典範第二十一條ハ左ノ如ク修正セラレンコトヲ冀望ス。

天皇未ダ成年ニ達セザルカ又ハ其ノ他ノ故障ニ由リ久シク大政ヲ親ラスルコト能ハズシテ、臨時ニ應ズル爲ニ豫ジメ親ラ計畫ヲ爲サズ若クハ爲シ能ハザルトキハ、次條ノ明文ニ循ヒ攝政ヲ置クベシ。

第一　精神若クハ身體ノ不治云々トアル不治ハ啻ニ贅字タルノミナラズ甚シキ危險アルヲ免レザルモノナリ。何トナレバ凡ソ疾病ノ治不治ハ醫家ニ在テモ亦一ノ爭論點ニシテ、之ガ爲ニ紛議ノ種因ヲ他日ニ貽スノ恐レアレバナリ。而シテ攝政ヲ置クノ當否ニ關スルコトヲ以テ此ノ如キ曖昧ノ間ニ附シ去ルハ大ニ不可ナリ。

第二　精神又ハ身體ノ重患云々ノ字ハ、或ル憲法ニ於テ往々之ヲ見ルモ、普通一般ニ於テハ此ノ如キ明條ヲ掲ゲズ。予ハ寧ロ此ノ如キ明條ヲ設ケザルヲ善トス。何トナレバ此般ノ明文ハ

不快ノ感ヲ喚起スルヲ以テナリ。

第三　攝政ハ多クノ場合ニ於テ任命ニ依ルベキモノニアラズト。而シテ反テ繼承ノ順序ニ從ヒ其ノ固有ノ權利ニ由リテ其ノ職ヲ行フモノナリ。故ニ攝政ノ場合ニ於テハ宜シク任ノ字ヲ改刪スベシ。

第四　成年ニ達セザル事ト大政ヲ親ラスルコト能ハザル事トハ二個ノ場合ニシテ、自ラ性質ノ同一視スベカラザルモノナリ。若シ成年ニ達セザルノ故ヲ以テ攝政ヲ置クコトヲ許サバ、唯ダ幼冲タルノ一事ヲ以テモ之ヲ置クニ足ルベシ。然リト雖モ第二ノ場合、卽チ大政ヲ親ラスルコト能ハズト謂ハバ、先ヅ疾病ノ有無ヲ問ハズ、果シテ大政ヲ親ラスルコト能ハザルカ否ヲ立證セザルベカラズ。現ニ君主重病ニ罹リテ尙ホ大政ヲ自ラ總攬シ得ルコトアリ、又總攬スルノ精神ヲ有スルコト屢々之レ有リ、例ヘバ「ポーランド」瓦敦堡ノ今王及ビ「メクレンボルグ」大公等ハ、旣ニ不治ノ重患ニ罹ルト雖モ、尙ホ大政ヲ親ラスルニアラズヤ。獨逸先帝「フレデリツキ」ノ如キハ其身老病ニ罹リ、旦夕計ルベカラザルニ至ルモ、其ノ崩御ノ時マデ大政ヲ親ラセリ。而シテ皆別ニ攝政ヲ置カズシテ其ノ時機ニ應ジ以テ大政ヲ代理スルノ計畫ヲ爲シ、又計畫スルコトヲ得タリ。

第五　疾病ノ外ニ於テモ亦他ノ事由ノ生ズルコトアラン。例ヘバ久シク本國ニ在ラザルトキ、戰時ニ當テ俘虜トナリタルトキ、又高齡ニナリタルトキノ如キ是レナリ。

試ニ攝政ニ關シ各國憲法ノ明條ヲ參考ニ供セン。

普露西憲法第五十六條

國王未ダ成年ニ達セズ、若クハ其ノ他故障アリテ永久政ヲ親ラスルコト能ハザルトキハ、最近ナル男系ノ皇嗣攝政ヲ行フ。此ノ場合ニ於テハ直ニ兩院ヲ徵聚シ、兩院合會シテ攝政ヲ設クルノ必要ニ付議決セシムベシ。

巴威里憲法第十一條

國王故障アリテ一年以上政ヲ親ラスル能ハズ、而シテ此ノ如キ場合ノ爲ニ豫ジメ親ラ計畫ヲ爲サズ、若クハ計畫ヲ爲シ能ハザルトキハ國會ニ其ノ理由ヲ通知シ、其ノ承諾ヲ經テ攝政ヲ置クベシ。但シ國王幼冲ノ場合ニ於テモ此ノ例ニ依ル。

白耳義憲法第八十一條

國王崩殂ニ際シ、其ノ嗣儲猶ホ丁年未滿ナルトキハ兩院相會シテ總會ヲ開キ、攝政及ビ後見ノ事ヲ議決スベシ。

同上第八十二條

國王親ラ政ヲ聽ク能ハザルトキハ大臣之ヲ檢定シタル後、直ニ兩院ヲ召集シ、兩院集合ノ

後、攝政及ビ後見ノ事ヲ議決セシムベシ。

索遜憲法第九條

攝政ハ國王未ダ丁年ニ達セザルトキ又ハ久シク親ラ大政ヲ行フヲ得ズ、且ツ豫ジメ政務ニ付處分ヲ爲サズ若クハ之ヲ爲シ得ザルトキニ置クモノトス。此ノ二個ノ場合ニ於テ國王ノ最親丁年男子ヲ以テ攝政ニ充ツ云々。

同上第十條

若シ王位ヲ嗣グベキ者自ラ國政ヲ行フヲ得ザルトキハ云々。

瓦敦堡憲法第十一條

國王幼冲ナルトキ、又ハ其ノ他ノ事故ニ因リ政ヲ親ラスルコト能ハザルトキハ攝政ヲ置クベシ。

同上第十三條

若シ世嗣精神又ハ身體ノ故障ニ因リ大政ヲ親ラスルコト能ハザルトキ云々。

一千八百五十六年佛國上院令ハ、皇帝幼冲ノ場合ノミヲ指定シ、而シテ攝政不能力ノ場合ニ於テ左ノ如キ明文ヲ掲ゲタリ。

攝政ト爲ルベキ佛國ノ皇子高齡ニ達シ、其ノ他正當ナル故障ノ爲ニ攝政ノ職ヲ執ルコト能ハザルトキハ云々。

「ヘッセン」憲法第五條

大公幼冲又ハ其他ノ故障云々。

「ヲルテンバルク」憲法

大公幼冲若クハ其ノ他ノ故障ニ由リ久シク政ヲ親ラスルコト能ハザルトキ云々。

「ブロンスウキツキ」憲法第十六條ハ單ニ幼冲ノ場合ノミヲ指定セリ。

「コーボルヒ」憲法第十二條

大公未ダ成年ニ達セザルカ、又ハ精神、又ハ身體ノ軟弱、若クハ其ノ他ノ故障ニ由リ、親ラ政務ヲ執ルコト能ハザルトキハ、攝政一員ヲ置ク。

「ロイス」憲法第七條第八條

國王幼冲若クハ其ノ他ノ事由ノ爲ニ永遠政務ヲ親ラスルコト能ハザルトキハ攝政一員ヲ置ク。

「ロイス」後部ノ憲法第九條

國王幼冲ノ間若クハ國王政ヲ親ラスルコト能ハザル間ハ、太后又ハ一定ノ男系ノ王嗣政務ヲ執ルベシ。

舊獨逸法（第十四世紀ノ黄金令）

嫡男ハ癲狂懦弱若クハ其ノ他庶民ヲ統御スル能ハザル著シキ缺點アルニ非ザレバ其ノ家ヲ繼承スベシ。

謹具意見

井上毅

皇室典範中ニ於テ皇統ニ關係アル事件ハ上モナキ重大ナル事ナレバ、他ノ細目ヲ閣キ、先ヅ二個條ノ意見ヲ述ブベシ。

第一　男系絶ユルトキハ女系ヲ以テ繼承スル事

此事ニ就テ論者往々歐羅巴各國ノ女系相續ト我ガ國ノ女帝卽位ノ例トヲ以テ混雜シテ同一ノ見解ヲ下スコトアリ。蓋シ事情ヲ分析セザルモノタルコトヲ免レザルベシ。曾テ嚶鳴社ト稱フル政黨ノ人々ノ此事ヲ討議セルノ論ヲ得タレバ、玆ニ其記錄ヲ抄出ス。

女帝ヲ立ルノ可否

（雄辯美辭軌範ニ見ユ）

（發議者）島田三郎氏曰ク、予ハ本題ノ可否ニ就テ自說ヲ陳ブルニ先ダチ、首トシテ題意ヲ定ムルヲ以テ必要ト思考スルナリ。我國既ニ國會ノ開期定マレリ、然ラバ則チ憲法設立ノ期モ亦既ニ近シト云フベシ。本題ハ我國ニ於テ憲法ヲ設立スル時ハ女帝ヲ立テマヒラスノ定例ヲ置クベキ乎、抑モ皇位ハ男統ニ限リテ登ラルヽヲ國憲トナスベキ乎ノ問題ニ係レリ。予ハ我國ノ情狀ニ於テハ、皇女ヲ帝位ニ立マヒラスルノ制ニ與セズシテ、男統ノ登極ニ限ルコトトセント冀望スルナリ。斯ク論斷セバ、此ニ二條ノ反對說ヲ出スベシト信ズルヲ以テ、豫ジメ其反對說ヲ設ケ、逐一之ヲ論破シ去リ、予ノ主論ヲシテ鞏固ナラシメントス。第一ノ反對ハ、我國古來女帝ヲ立ツルノ慣習アリ、今ニ及ンデ男統ニ限ルトスルハ是レ慣習ヲ破壞スルナリト、是レ論者ハ古來ノ慣習ヲ尊重スルノ人ニシテ、國書ニ通ズル者ニ多カルベシ。又第二ノ反對者ハ將ニ言ハントス、現時社會ノ風氣大ニ開ケ、昔時唯武是レ尙ブノ氣運ニアラザルヲ以テ、隨テ體力ニ長ズル男子ノ專權ヲ惡ムノ論其力ヲ逞クシ、男女ノ權利漸ク將ニ平ヲ得ントス。古ヘ男統ニ限レルノ國ト雖モ、今ハ男女同ジク皇位ヲ繼襲スルニ至レリ。各國ノ憲法ヲ通觀スルニ、大抵然ラザルハナキナリ。是レ幽谷ヲ出デテ喬木ニ遷レルモノト云フベキノミ。然ルニ我國獨リ之ニ反シテ憲法上卽位ノ例ヲ立テザラントスルハ、十九世紀ノ氣運ニ反スルモノナリ。況ンヤ古來女帝立位ノ國風アルニ於テヲヤ。今ニ及ンデ之ヲ斷ントスルハ、之ヲ文明ノ却歩ト云ハザル可ラズト、是ノ類ノ論ヤ必ラズ洋書ヲ解スルノ人ニ多カルベシ。予ハ此二種ノ論ヲ排擊スルニ、先ヅ左ノ一言ヲ以テセントス。曰ク、女帝ヲ立テザルヲ以テ古來ノ慣習ヲ破ルト云フノ論者ハ、唯ダ我國女帝卽位ノ例アルヲ知リテ、其情態ノ甚ダ今日ニ異ナルコトヲ思ハザルノ人ト云ハザル可ラズ。請フ其實蹟ヲ略述セン。神功皇后ノ應神ヲ攝シ、飯豐青尊ノ顯宗卽位ノ前ニ朝ニ臨ミ玉ヒシガ如キハ、史家之ヲ大統ノ中ニ列セザルヲ以テ、固ヨリ女帝ノ例ニ引用スベキニアラズ。其ノ二千五百有餘年間、皇女ニシテ九王ノ位ヲ踐マセラレ玉ヒシハ、推古天皇ヨリ後櫻町天皇ニ至ル迄實ニ八世、推古ト云ヒ、皇極ト云ヒ、持統ト云ヒ、元明ト云ヒ、正元ト云ヒ、孝謙ト云ヒ、明正ト云ヒ、後櫻町ト云フ、其皇極ノ再祚シテ齊明ト稱セラレ、孝謙ノ再祚シテ稱德ト仰ガレ玉ヒシハ、固ト各々御一人ノ事ナレバ、今又別ニ之ヲ算セザルベシ。抑モ此ノ八代ノ女帝ニシヲ始終配偶ノ君マシマサズ、處女ノ

御身ヲ以テ大統ヲ繼承セラレタルハ孝謙以下四帝ノミ。其ノ他ハ皆一旦皇配アラザルハナキナリ。夫レ推古ハ敏達帝ノ皇后ナリ。崇峻暴明ノ後ニ大位ニ卽キ玉ヘリ。且ツ直チニ廐戸皇子ヲ立テ皇太子トセリ。是レ時ヲ竢テ位ヲ太子ニ傳フルノ意、其卽位ノ初メニ定マルナレバ、大位ニ登リ玉フト云フト雖モ其實ハ甚ダ攝位ニ類セリ。皇極帝ハ舒明帝ニ配シテ其崩後ニ大統ヲ承ケタリ、識者云フ、是レ其生ミ玉ヘル中大兄皇子ノ年長シ玉フヲ竢テルナリト、天武帝ノ後ニ大統ヲ承ケラレシハ、實ニ其ノ皇后ニシテ持統帝是レナリ。卽チ草壁皇子ノ長ズルヲ待ツニアリシト云フ。元明帝ハ初メ實ニ草壁皇子ノ妃ナリキ、其立ツヤ首皇子ノ長ズルヲ待ツニアリ。其嘗テ配偶ノ位置ニ立チ玉ハズシテ帝位ニ登ラレタルハ元正帝ヨリ初マル。繼イデ孝謙帝アリ、然レドモ元正ノ立ツヤ、儲位ニ首皇子アリ、孝謙ノ立ツヤ前ニ皇太子道祖王ヲ置キ、後ニ皇太子大炊王ヲ置ケリ。其後久シキヲ經テ明正帝ノ後水尾ノ遜位ヲ承ケラレタルハ、御齡纔カニ七歳ニシテ又儲嗣ノ事ナシ。是レ獨リ異例ナリトス。而シテ後櫻町帝ノ立ツヤ、實ニ英仁親王ノ長ズルヲ待ツニアリシト云フ。以上擧グル所ヲ通觀スルニ、八帝中嘗テ配偶ノ位置ニ立チ玉ハズシテ終始獨處セラレタルハ元正帝以下四帝ニシテ、卽位ト共ニ儲君ヲ置カレザリシハ獨リ明正帝御一人アルノミ。亦以テ古來我國女帝ノ外國今日ニ於テ立ツル所ノモノト同ジカラザルヲ見ルベキナリ。且ツ女帝ノ事ニ於テハ古來ノ慣習ヲ引イテ今日ノ定例トスベカラザル要件アリ。何ゾヤ女帝ノ配偶ヲ置クノ一事卽チ是レナリ。夫レ天地アリテ人類アリ。人類アリテ男女アリ、男女アリテ夫婦アリ、夫婦ノ道ハ古今上下ノ別ナク天理ノ自然ニシテ人情ノ至レルモノナリ。今ヨリ以後憲法ニ於テ女帝ヲ立ルコトトセンカ、其獨處シ玉フコトハ是レ天理人情ノ至情ノ至極セルモノニアラズ、則チ予ガ我國女帝ノ古例ハ之ヲ今日ノ定制トス可ラズト云フ所以ナリ。然ラバ卽チ歐西立君國ノ制ニ倣ヒ、大婚ノ禮ヲ行フテ皇婿ヲ立テラレンカ、如何ナル人ヲ至尊ニ配シテ其位置ニ適スルトセン。歐西諸國ハ外國ノ皇親ヲ奉迎スルノ例アリテ其便ヲ得ルト雖モ、我國ハ言語風俗ヨリ考フルモ、又上下ノ人情ヨリ考フルモ、歐西ノ皇族ニ論ナク、支那ノ皇族ト雖モ亦我ガ女帝ト大婚ヲ相爲ス可ラザルハ吾人ノ認メテ疑ハザル所ナリ。然ラバ則チ我ガ皇國內ノ人ニ皇婿ヲ求メンカ、是レモ亦甚ダ不可ナルモノアリ。夫レ皇帝ノ大位ヲ尊崇シ奉リ、人臣ノ得テ近ヅク可ラザルモノトスルハ、君制國ノ第一主義ナリ。天ニ二日ナク、國ニ二主ナキハ是レ亦君制國ノ第一主義ナリ。故ニ上御一人ヲ除キテハ日本國人悉ク臣民ナリ。臣民ニシテ至尊ニ配侍スルコトアラバ、其尊嚴ヲ損セザル無キヲ得ンヤ。或ハ云ハン、理ニ因テ推スニ男女固

ト尊卑ノ別ナシ、皇妃ハ人臣ニシテ至尊ニ配ス、皇婿人臣ヨリ出ヅル固ヨリ不可ナルコトナシト、予ハ此說ニ同意スル能ハザルナリ。何ゾヤ、政治ハ時勢人情ヲ以テ之ガ基本トセザル可ラズ、我國ノ現狀男ヲ以テ尊シトナシ、之ヲ女子ノ上ニ位セリ。今皇婿ヲ以テ憲法上女帝ヲ第一尊位ニ置クモ、通國ノ人情ハ制度ヲ以テ之ヲ一朝ニ變ズル能ハザルモノナルガ故ニ、女帝ノ上ニ一ノ尊位ヲ占ムルノ人アルガ如キ想ヲ爲スハ、日本國人ノ得テ免カル、能ハザル所ナルベシ。豈皇帝ノ尊嚴ヲ損スルコトナキヲ得ンヤ。且ツ夫レ皇婿暗々裏ニ女帝ヲ動カシテ間接ニ政事ニ干涉スルノ弊ナキヲ保ツコト能ハズ。若シ此レアランカ、唯ダ女帝ノ威德ヲ損スルノミナラズ、併セテ國家ノ福利ヲ破ブルニ至ラントス。古來我國ノ女帝ハ登極ノ後、獨處シテ至尊ノ位ヲ占メ玉ヒシガ故ニ、其威德ヲ損スルコトナシ。然リト雖モ是レ道理人情ニ適スル制度ニアラズシテ、之ヲ今日ニ行フ可ラズ。泰西ノ諸國ハ外國ノ皇族ニ結婚スルノ風習アリ、且ツ男女ヲ區別シテ尊卑ノ位置ヲ定ムルコト我國人ノ如キニアラズ、故ニ其尊嚴ニ害ナシト雖モ、外國トノ結婚ハ我國狀ノ未ダ適セザルモノアリ。是レ予ガ我國ニ於テハ假令皇親ノ遠キニ取ルモ之ヲ男統ニ限ルヲ可トシ、徒ラニ其近キニ取リテ女帝ヲ立ツ可ラズト云フ所以ナリ。（反對ノ論之ヲ略ス）

沼間守一氏曰ク、予ハ本論ヲ贊成スル者ナリ。故ニ此ニ一言シテ反對論者ノ論旨矛盾スル所ヲ示サントス。是レヲ示ストキハ本論ノ正當ナルコト自カラ現ハル、ヲ以テナリ。予ハ試ミニ女帝立ツベシト論ズル諸氏ニ問ントス、此ニ男女ノ子ヲ有スル者アラン、其長子女ニシテ次子男ナルトキハ、其家ヲ相續セシムルニ男子ヲ以テスル乎、抑モ女子ニ讓ラン乎、我國風其長タリ次タルノ順次ニ拘ハラズ、男子ニ相續セシムルニアラズヤ。是レ獨リ我國ノミ然ルニアラズ、又民間ノミ然ルニアラズ。立憲君制ノ諸國ト雖モ此ノ如キナリ、王家ト雖モ亦此ノ如キナリ。然ラバ卽チ男女ニ區別ナシト云フ可ラズ。男女ニ階級ナシト云フ可ラズ、反對論者ニシテ此簡單見易キノ事實ヲ曉ラズ、則チ女帝ヲ立ツルヲ可トスルノ謬見ナルヲ覺ラントス。既ニ此區別アルヲ見バ何ゾ奇論ヲ立テ反對ヲ爲スヲ要センヤ。又男ヲ尊ビ女ヲ卑ムノ慣習、人民ノ腦髓ヲ支配スル我國ニ至テハ、女帝ヲ立テ皇婿ヲ置クノ不可ナルハ多辯ヲ費スヲ要セザルベシ。論者ノ如キハ立憲國ノ皇帝ハ善人ヲ要セズ、賢良ナルヲ要セズ、庸暗ニテモ可ナリト言フノ口氣ヲ放ツテ反對ノ口實トス。眞ニ無禮ノ發言ト云フベシ。何レノ時ト雖モ君主ハ賢良ナルヲ要ス。君主賢良ナルトキハ憲法上權限ノ爭議ヲ爲スヲ要セズシテ君主之ヲ確守シ玉フガ故ニ、君民ノ幸福是レニ過グルナカルベキヲ以テナリ。且ツ夫レ反對論者

ノ口實トスル所ハ女帝ヲ立ツルハ血統ヲ重ズルナリト云フニ過ギズ。君主國ニ於テ皇帝ノ血統ヲ重ズルコトハ反對論者ノ言ヲ竢タズシテ之ヲ知レリ。然レドモ血統ノ中ニ附テ男女ノ區別ヲ立ツルハ現今何レノ國ト雖モ之アリ。卽チ同胞中ニ於テハ男ヲ先キニシテ敢テ降誕ノ順序ニ拘ハラザルガ如キ是ナリ。論者ハ强テ說ヲ立テンガ爲ニ有ルマジキ事實ヲ引イテ抗論ヲ試ムルモ亦知ル可ラズ、故ニ予ハ豫ジメ之ヲ擊破シテ其ノ遁路ヲ塞グベシ。論者ハ言ハン、女帝ヲ立テザルガ爲ニ皇統絕ユルトキハ如何ント、予ハ直チニ之ニ答ントス、既往二千五百年間、此事ナシ、爾後モ亦是レナカル可キノミト。

以上參考ノ爲ニ原文ニ依リ抄出シ其繁ヲ削ラズ。

然ルニ今度ノ起草ハ我國ノ女帝卽位ノ其實ハ攝位ノ種類ナルニ依ラズシテ、一變シテ歐洲各國（日耳曼人種各國ヲ云フ）ノ例ニ倣ヒ、卽チ女系ヲ以テ男系ナキトキノ皇統トセントシ、皇女ヨリ皇女ノ皇子ヲ傳フルコトヲ明言シタリ。此事ノ結果ハ左ノ英國ノ例ヲカシコクモ我ガ皇統ノ上ニ見ルニ至ラントス。

英國ノ歷史ニ於テ「プランタジネット」家ヨリ「チユドール」家ニ移リ、「チユドール」家ヨリ「スチユアルド」家ニ移リ、「スチユアルド」家ヨリ今ノ「プランスウヰツク」家ニ移リタル

英國ニ於テ女系ニ由テ他姓ノ男子大統ヲ繼ギタルトキハ此レヲ家ヲ變ヘタリトスルコト彼ノ歷史ノ例ナリ、然シナカラ今ノ「ヴイクトリア」女皇ノ夫ハ「アルバルト」氏ナルヲ以テ太子ハ「プリンス・アルバルト」ト名乘ル太子位ニ卽キタルトキハ史家縱令家ヲ變ヘタリトハセズトモ其姓ヲ變ヘタルコトハ明ナリ而シテ姓氏ノ事ハ彼國ノ風トシテ曾テ疑問ニ置カザルガ如シ。

ハ皆女系ノ傳統ナレドモ、其父ノ姓ニ從テ王統ノ名稱ヲ變ジ、是レヲ家ヲ變ズルモノトセリ。例ヘバ今ノ「プランスウヰツク」家ノ初代「ジョルジ」第一世ハ、其母ノ系ヨリ謂フトキハ母ノ母ナル婦人（卽チジョルジ第一世ノ祖母）ハ前朝「スチユアード」家「ゼームス」第一世ノ長女ナルヲ以テ、前朝ニ女系アルモノナレバコソ英國人民ハ之ヲ推立シタルモ、前朝ノ名稱ニハ依ラズシテ更ニ一家ノ男系ノ姓ヲ名ノルハ、彼國ノ相續權ニハ姓氏ノ殊別ヲ問ハズシテ偏ニ血統ヲ以テ權利トスルコト卽チ日耳曼人種ノ風俗ナリ。

今此ノ例ニ依リ、カシコクモ我國ノ女帝ニ皇夫ヲ迎ヘ、其ノ皇夫ハ一タビ臣籍ニ入リ、譬ヘバ源ノ某ト稱フル人ナランニ（起草第十三條ニ依ル）、其皇夫ト女帝トノ間ニ皇子アラバ卽チ正統ノ皇太子トシテ御位ヲ繼ギ玉フベシ。（起草第七條ニ依ル）、然ルニ此ノ皇太子ハ女系ノ血統コソオハシマセ、氏ハ全ク源姓ニシテ源家ノ御方ナルコト卽チ我ガ國ノ慣習ニ於テモ又歐羅巴ノ風俗ニテモ同一ナルコトナリ。但シ歐羅巴ナラバ源姓ト稱ヘナガラ源姓ノ人モ女系ノ緣ニテ皇位ヲ嗣グコト當然ナリト明ラムルナリ、歐羅巴ノ女系ノ說ヲ採用シテ我ガ典憲トセントナラバ、序ニテ姓ヲ易フルコトヲモ採用アルベキカ、最モ恐シキコトニ思ハルヽナリ（女系ノ內親王ヨリ出デタル皇孫ナラバ更ニ是レヨリ甚シ）。

政事法律百般ノ事ハ、盡ク歐羅巴ニ模擬スルコト可ナリ。　皇室繼統ノ事ハ　祖宗ノ大憲ノ

佛、瑞、白、孛等ノ國。

在ルアリ、決シテ歐羅巴ニ模擬スベキニ非ラズ。此ノ理ハ歐羅巴各國ノ同ジキ所ナリ。故ニ歐羅巴ニ在テモ「サリツク」法ノ國ハ婦人ノ王位ニ卽クコトヲ許サズ、其說ヲ助クル者ノ論ニ云ク、凡ソ婦女ハ政權ナキコト一般ノ法ナリ、王位ハ政權ノ最高ナルモノナリ、婦女ノ選擧權ヲ許サズシテ却テ最高政權ヲ握ルコトヲ許スノ理ハ矛盾セルモノナリ。白耳曼人種ノ王位相續法ハ、上古以來家產相續法ヨリ來ルモノニシテ、卽チ王位ヲ以テ私有トセルノ陋俗ノ遺物ナリト。此說ト孛、英諸國ニ行ハル、白耳曼人種ノ繼統法トノ是非ハ姑ク措イテ論ゼザルモ、道理ハ固ヨリ一端ニ非ラズシテ各國遽カニ自ラ其舊典ヲ棄テテ他國ノ例ニ模擬スルノ太早計ナルコトヲ見ルベキナリ。

起草者ハ固ヨリ强チニ歐羅巴ニ模擬スルニ非ラズ、我國ノ固有ノ女帝卽位例ト、並ニ後來萬一ニモ皇胤絕ユルコトアル時ノ爲ニ此數條ヲ揭載シタルナルベシ。然ルニ從來ノ皇胤ヲ繁榮ナラシムル爲ニハ他ニ種々ノ方法アリテ此ノ憂慮ヲ塞グニ充分ナルベシ、（諸王家ヲ華族トスルノ類ハ此ノ必要ニ反對セルガ如シ）、又我ガ國ノ女帝卽位ノ例ハ初メハ攝政ニ起因セルモノニシテ、一時ノ臨時ニシテ、ヤガテ御位ヲ他ノ皇太子又ハ皇太弟ニ讓リ玉フ御事ナレバ、ナルベクハ初メノ　神功攝政ノ御趣意ニ復シタルモノナリ。故ニ故サラニ揭載セザル方マシナルガ如シ。況ンヤ更ニ此レヲ推シ廣メテ一變シテ女系易レ姓ノ事ニ迄及ブヲヤ。決シテ起草者ノ本意ニ非ラザルヲ信ズルナリ。

第二　天皇違豫攝政ノ事

起草第十四條ニ云ク、天皇未丁年又ハ政務ニ堪ヘザル間ハ攝政ヲ置クベシト。

敬デ惟フニ、天子違豫心疾ノ事アリテ政治ヲ親ラシ玉フコト能ハザルハ稀レニ免レザルノ事實ナリ。而シテ動亂ノ機、動モスレバ此時ニ發スルヲ以テ、國家モ亦厄難ノ際トス。是レ歐洲君主政治ヲ行フノ國ニ於テ憲法ニ特殊ノ設ケアル所以ナリ。

孛國憲法第五十六條ニ云ク、國王未成年ニ屬シ若クハ久シク故障アリテ政ヲ親ラスルコト能ハザレバ、最近ナル支親ノ成年ナル者攝政ノ事ヲ行フ。此ノ時ハ其ノ人必ラズ速ニ兩院ヲ徵聚シ、兩院合會シテ攝政ヲ設クルノ必要ナルコトヲ宣告セシムベシ。又其ノ五十七條ニ云ク、若シ成年ノ支親アルコトナク、及ビ法章ヲ以テ豫定シタル者ナキトキハ、宰相會ハ必ラズ兩院ヲ徵聚シ、兩院合會シテ一ノ攝政ヲ撰バシムベシト、其他各國皆此意ニ同ジ、夫レ王室ノ大事ニシテ國會ヲ徵聚セズ、人民ニ宣告セザレバ攝政ヲ定ムルコト能ハザルノミナラズ、豫定ノ攝政ナキトキハ國會ノ選擧ヲ仰ギ、然ル後攝政ヲ任ズルニ至ル。要スルニ攝政ヲ置クト置カザルト

ハ一ニ人民ノ多數議定ニ任ズルモノタリ。此法ニ由リテ行フニハ其終局ノ結果ハ何等ノ情況ニ迄至ル歟ヲ推測セザルベカラズ。

第一　天子ノ孱弱ヲ人民ニ公布シ、王室ノ尊榮ヲ汚スコト。

第二　皇室ノ大事ヲ以テ民議多數ノ裁判ニ委ネ、從テ人民ノ勢力ヲ誘動シ、將來皇室ヲ左右スルノ漸ヲ啓ク事。

譬ヘバ孛國ノ皇帝遽ニ心疾ニ罹リ、公ニ攝政ノ可否ヲ問ヒ、議院ノ動議數日ニ亘リテ決セズトセン、其人心ヲ疑惑セシメ、物議洶々トシテ一時ニ政黨ノ軋轢ヲ激シ、國ノ安寧ヲ妨ゲ、其ノ元氣ヲ害フコト如何ゾヤ。若シ奸人「クロウエル」ノ如キ者アリテ、機ニ乘ジ隙ニ投ジ人民ヲ煽動シ大亂ヲ激成セバ、其禍ハ未ダ測ルベカラザルナリ。昔英國「ジョルジ」第三世不能ニシテ攝政ヲ選ブノ必要ヲ告グルニ當リ、議員疑惑ヲ抱キ論議數日ヲ費シ、遂ニ委員ヲ命ジ國王ノ身體ヲ檢査セリ。是レ其事情亦言フニ忍ビザルモノアリ、夫レ國王心疾輕重既ニ議院ノ裁判ヲ以テ決スベシ。乃チ國王過失ノ有無亦豈議院ノ決スル所ニ由ラザラン乎。微ヲ防ギ漸ヲ愼ムニ於テ深ク思ヲ致サヽルベカラザルニ似タリ。由是觀之、孛國憲法第五十六條ハ吾邦ニ移スベカラザルモノナリ。

然ラバ則チ我國ニ於テ萬一天子違豫ノ事アルトキハ何等ノ方法ヲ用ヒテ之ヲ處分セントスルカ、甲ハ謂ハン、攝政ヲ用ヒテ而シテ議院ニ問ハザルベシ。乙ハ曰ク、陽成天皇讓位ノ例ニ倣フベシ。甲ノ說ハ實際ニ於テ民有二二王一ニ似タリ、故ニ攝政タル者議院ノ助ケヲ假リ、先ヅ其ノ異議ヲ塞ガザレバ政事ヲ攝行スルノ力アルコト能ハザルベシ。是レ或ハ可レ言不レ可レ行ノ說ナラン。昔陽成天皇君德闕クルコトアリ、太政大臣藤原基經ノ計ラヒニテ乘輿ヲ遷シマイラセ、御位ヲ光孝天皇ニ讓リ玉フ。此時天子ノ失德ヲ宣布スルニ至ラズ、人民ヲ激動セズシテ外ハ讓位ノ美名ニ依リ、容易ニ國難ヲ排除スルコトヲ得タリ。此レヲ議院ニ問ヒ議院ノ檢査ニ任ジ、物議ヲ激シ人心ヲ動カシ、泥中ノ鬪牛ノ如キモノニ比ブレバ其得失如何ゾヤ。我國讓位ノ例ハ天子佛法ヲ好ミ玉フニ起リシ事ナレバ、固ヨリ好マシカラヌ事ナガラ、此レモ亦時ニ取テノ一時ノ變通法ナルベケレバ、强チニ此例ヲ塞ガレンコト如何アラン、（起草第九條）、或ハ謂フ、天子違豫ニ因リ讓位シ玉ハヾ後年ニ至リ健康ヲ復シ給フニ及ンデ再ビ登祚ヲ行ヒ玉フコトヲ得ズ。是レ暫ク攝政ヲ置クノ便ニ如カズト、是レ一理アルノ言ナリ。サリナガラ實祚ハ祖宗ノ寶祚ナリ、神孫ノ私シ給フ所ニ非ラズ、一旦疾ヲ以テ位ヲ遜レ玉フノ不幸アラバ、縱令健康ニ復サセ給フトモ祖宗ノ靈ニ對シ再ビ登祚ヲ望マセ給フノ理ナシ。

故ニ天皇違豫ニシテ政務ニ堪ヘ玉ハザルノ不幸アラバ、時宜ニ由テハ攝政ヲ置クコトアルベシト雖モ（議院ニ問ハズ）亦叡慮次第ニハ並ニ時宜次第ニハ穩カニ讓位アラセ玉フコト尤モ美

事タルベシ。起草第九條ノ上項ハ削去アリテ然ルベキカ、又十四條モ修正ヲ要ス。

第三　結　論

歐羅巴各國ノ憲法ニハ最初ニ王室ノ相續法ヲ掲載スルヲ以テ重大トナサヾルハナシト雖モ、恭シク惟フニ、我國ハ開闢以來百王一系ノ國ニシテ、今更ニ王室相續法ノ細目ヲ掲載センコト要ナキニ似タリ。又百王一系ト自稱スルノ國ニ於テ、各國ニ倣フテ憲法ヲ布告スルノ時ニ始メテ新タニ王家ノ相續法ヲ掲載セント、各國ニ對シテモ自ラ尊嚴ヲ毀損スルニ似タリ。其故ハ歐羅巴各國ノ王位ハ皆貴族ノ世傳封地ヨリ來ルモノナリ。世傳封地ハ其封地ヲ創立スルノ人ニ於テ其相續法ヲ定ムルヲ慣例トス。且ツ上古以來種々ノ相續法アリテ國各々其ノ俗ヲ異ニスルノミナラズ、每家其相續法ヲ同ジクセザルニ至ル、長子相續法アリ（プレモゼニチユル）、少子相續法アリ（マイノゼニチユル）、相續ハ男子ニ限ルアリ（サルランド法）、又ハ男女同權ナルアリ、又ハ男ヲ先ニシ女ヲ次ニスルアリ、（コグナード）、又ハ數人ノ子アレバ平均ニ領地ヲ分割スルアリ（有名ナル「シャルマニユ」ハ卽チ此法ヲ行ヒタリ。魯西亞ハ彼得兒以前ハ此分割法ヲ用ヒタリ）。又遺言ニ依テ始メテ相續ヲ定ムル者アリ（羅馬舊法ヨリ來ル）、故ニ歐羅巴ノ歷史中ニハ相續ノ爭ヒ歷々トシテ踵ヲ接シ、甚シキハ甲國ノ君主、女系又ハ結婚ノ名義ニ托シテ乙國ノ位ヲ奪フモノアリ、加フルニ又宗旨ノ爭ヒモアリ、此紛亂ヲ妨グノ必要ナルガ爲ニ歐羅巴各國ノ憲法ニハ先ヅ王家ノ相續法ヲ第一ニ掲ゲタリ。

我國ノ王室ノ系統ハ祖宗以來不文ノ間ニ自ラ不拔ノ憲法ヲ存シタレバ、强チニ事新ラシク掲載スルノ要用アルコトナク、而シテ之ヲ掲載スルハ却テ歐羅巴ニ模倣スルノ痕跡ヲ顯ハスニ似タリ。且ツ歐羅巴ノ王家相續法ニ於テ重要ナル條項ハ第一ニ私生子ヲ退クルコト、第二ニ男系ナキ時ノ女系ノコト、第三ニ君主不能力ノ時ノ處分等ナリ。然ルニ假ニ我國ノ憲法ニハ特別ノ事情アリテ此三ツヲ掲載スベカラズトセンカ、其ノ他ハサシテ重要ナル條項アルヲ見ズ、今重要ナラザル條項ノミヲ掲ゲテ以テ王室相續篇ノ缺ヲ塡メントスルハ、各國ニ模倣セント欲シテ却テ各國人ノ譏ヲ招クニ近カランカ。

故ニ我國ノ憲法ニ於テハ王家ノ事ニ就テハ寧ロオホラカニ一ツノ大綱ヲ掲グルニ止マリ、其他ノ事ハ之ヲ不文ニ附スル方、然ルベキニ似タリ。其大綱ノ條ハ略ボ左ノ如クナルベシ。

一、皇統ハ、皇祖ノ遺範ニ遵ヒ、萬世一系、神孫ノ承クル所トス。

若シ又相續ノ事ノ大綱ヲモ要ストナラバ、

一、若シ先帝登遐ノ際定マレル皇太子又ハ皇太孫ナキトキハ、嫡長ノ順序ニ從ヒ皇子又ハ皇

孫大統ヲ繼グベシ、皇子皇孫ナキトキハ皇兄弟、皇諸父ニ及ブベシ。親王ナキトキハ諸大王大統ヲ繼グベシ。

其ノ他ハ幼冲攝政ノ事及ビ皇族ノ典範ノミニテ足レリ。

典範中繼承ノ大事ニ付今日ニ至リ異議ヲ生ジ候事恐縮ニ堪ヘズ候。

然ルニ此ノ疑議ハ元來有ラザル筈ノ事ニテ、樞密院下付ノ原案ニハ、

皇庶子孫ノ皇位ヲ繼承スルハ長系次系ノ皇嫡子孫皆在ラザルトキニ限ル。

ト有之、三讀會マデ異議ナク通過候而已ナラズ、議事筆記ニ據ルニ、一モ疑問スラ相見エズ候。此原案ノ通リナレバ次系ニ嫡子孫アルトキハ長系タリトモ庶子孫ニ繼承ノ權ナキハ至明至白ナリ。然ルニ三讀會ノ後、制度局ヨリ種々修正ノ意見提出相成候中ノ一ニテ、「長系次系ノ」ノ五字ハ無之トモ固ヨリ明白ナルノミナラズ、且ツ次系ト云フ事ハ三系ヲ包含セザルノ疑ヒアリトノ伊藤議長議員ニ謀ラレタル趣意ニテ削除相成候、實ニ圖ラザリキ今日ニ至リ候テ右ノ五字削除セラレタルハ制度局ノ爲ニ異見ノ論據ノ地ト爲ラムトハ、回想スレバ殘念ノ至リニ存候。

猶ホ泝ツテ此ノ事ノ歷史ヲ探究候ニ十八年ニ宮內省ニテノ立案ニハ、

第二條　皇位ヲ繼承スベキ皇子アラザルトキハ皇孫ニ傳フベシ。

第六條　皇位ノ繼承ハ嫡ヲ先ニシ庶ヲ後ニス、嫡中ノ順序ハ長幼ノ序ニ從フ。

右ニ付小生十九年ノ春ニ於テ意見ヲ櫻井書記官ヘ申述候別冊甲號御一覽被下度候。卽チ凡ソ皇子孫ノ皇位ヲ繼承スルハ嫡出ヲ先ニス、皇庶子孫ノ位ヲ嗣グハ皇嫡子孫在ラザルトキニ限ルベシ。

皇兄弟、皇伯叔以上ハ同等皇親內ニ於テ嫡ヲ先ニシ庶ヲ後ニス。

トハ小生ノ意見中ノ文字ニテ、右起草ニ添ヘタル此ノ節ノ疑問ノ如キ點ヲ解剖スル爲メノ圖モ有之候。

其ノ後右小生意見採用セラレタル歟、宮內省第三次ノ立案ニハ、前顯二項トモ第六條トナリテ記載有之候、卽チ別冊乙號御一見可被下候。

其ノ後、柳原伯ノ起草ニモ「ベシ」ノ二字ヲ削リ、第二項「パ」ノ字ヲ「モ」トシ、同等ノ上ニ「皆」ノ字ヲ加ヘ、「皇親」ノ字削ラレ、第三十一條第三十二條トナリテ記載有之候。

猶ホ其ノ後、伊藤伯手元ニテ起草ノ節、「長系次系ノ」五字ヲ加ヘラレ候。

此ノ時小生伊藤伯ヘ疑問ノ廉々ヲ書シテ起草ノ標準ト致シ候一冊有之候處、今日手元ニ見當リ不申、萬一ハ先頃御手元ニ差出置候哉乍失禮御尋合セ致候。

然ルニ「長系次系ノ」ノ有無ニ拘ラズ「皇庶子ノ皇位ヲ繼承スルハ皇嫡子ノ在ラザルトキニ

限ル」ト云ハズシテ「皇庶子孫ノ皇位ヲ繼承スルハ皇嫡子孫ノ在ラザルトキニ限ル」ト謂ヒ、殊ニ明白ナルハ皆在ラザルトキニ限ルト謂フトキハ、此ノ第四條ハ獨リノ皇子ト皇子トノ間ニノミ嫡ヲ擇ブニハ非ラズシテ皇子孫ニ通ジテ嫡系嫡出ヲ擇ビ、必ラズ一人ノ嫡系嫡出ナキトキニ至テ始メテ庶子孫ニ及ブコト明文ニ於テ毫モ疑義コレナキナリ。

古典ヲ按ズルニ、大寶令繼嗣令ニハ、

無レハ嫡子ニ、立ツ嫡孫ニ、無レハ嫡孫ニ以レ次立ツ嫡子ノ同母弟ニ云々。

ト有之候。右ハ今日ノ繼承ノ大義ニハ引證シ難キ歟ニ候ヘドモ、嫡次子ハ庶孫ニ先ダツコトハ令制ノ主義ニ相見エ候、又參照スルニ公羊傳義ニ、

立レ子以レ嫡、無レ嫡以レ長

ト有之候、此ノ二句至テ簡明ニ見エ候、大請會典ニ

凡襲レ封ニ、必以ニ嫡子孫ニ、無ニ嫡子孫ニ、許以ニ庶子孫ニ襲上、絶レ嗣則以ニ同父兄弟及兄弟之子ニ襲。

此ノ文モ至テ明確ニテ我ガ第四條及ビ第五條ト合節ノ文ニ有之候。

歐洲ニテハ嫡庶ノ例無之候ヘドモ、彼ノ墺、英等ノ先ニ男子ニ後ニ女子ニノ例ニ引當候テモ同樣ニ有之候。

昨日ハ匆卒ノ際失禮而已申上候ニ付追テ熟考致シ候上御參考ノ爲メ奉啓申候、兎ニ角重事ニ付更ニ御精慮奉冀候。頓首

尙々圖解一冊今度拵候モノニテ奉供覽候、甲乙兩冊ハ御返却奉冀候。

明治廿二年四月三日

宮内大臣殿　　井上毅

謹具意見

皇室典範幷皇族令ニ付ロエスレル氏答議

目次

一、家憲ハ私法ニ屬スベキ乎、又國法ニ屬スベキ乎。
二、家憲ハ政務ニ屬スベキ乎、家憲ヲ發スルニハ大臣ノ對署ヲ要スル乎。
三、女性及ビ不能力者ノ王位相續ノ權ニ係ル件。
四、王后ハ君位ニ屬スベキ乎將タ臣位ニ屬スベキ乎。
王族ノ名稱ニ廣キ意義ト狹キ意義トアリ、國法上ニ於テ何レヲ指ス乎。
卽位ノ儀式ノ件。
五、他家ニ嫁シタル王族女子ノ件。
王族ノ子孫ハ何代ニシテ人臣トナル乎。
六、君主ノ奉養ハ國庫ニ取ルベキ乎。
七、同族婚姻ノ件。
八、王族分料ノ二ツノ方法ノ中何レガ便宜ナルヤ。
九、攝政參議ノ件。
十、皇有財産課税ノ件。

一、家憲ハ私法ニ屬スベキ乎、又國法ニ屬スベキ乎

家憲ハ私權ヲ規定シタルモノナル乎、又ハ公權ヲ規定シタル國法ニ屬スベキモノナル乎。若シ果シテ私權ニ屬スベキモノナラバ、各國ノ現行セル家憲ハ其中ニ政事上ノ公權ヲ混雜シタル個條ヲ見出スニ似タリ。正當ノ法理ニ從フトキハ此ノ混雜ノ個條ハ之ヲ家憲中ヨリ除キ去ルベキモノナル乎。或ハ又家憲ハ一種特別ノ性質ニシテ公權ト私權トヲ併セテ之ヲ規定スルヲ以テ其固有ニシテ適當ナル本素トナス乎。

答

君主ノ家憲ニハ其家族法及ビ相續法ヲ掲グ、而シテ此部分ヲ君主私法（フリヴートヒルステンレヒト）ト稱スルヲ常トス。凡ソ家族法及ビ相續法ヲ私法ニ屬スルヲ例トスルノ點ヨリ觀レバ、此部分ハ私法ニ屬スルコト固ヨリナリ。故ニ之ヲ實際ニ適用スルニ當テハ往々私法ノ原則ヲ以テ塡補セザルベカラザルコトアリ。又他ノ一方ヨリ觀ルトキハ、君主私法ナルモノハ又國法ニ屬スルモノトス。何トナレバ君主私法ハ國家ニ勢力ヲ及ボシ、政事上ノ觀察ニ基クモノナレバナリ。故ニ之ヲ國法中ニ論ズルヲ常トス、君主私法ノ此兩樣ノ性質ハ世襲君主國ノ本體ニシテ國家統治ノ權並ニ相續法ノ如キ私法上ノ原則トヲ混同シテ一體トナシタルモノナリ。皇族ハ婚姻ヲ結ビ後見ヲ置キ、又財産ヲ私有シ得ルガ如キ私法上ノ關係ニ於テハ一私人タリ。然レドモ世襲君主國ノ基礎トナリ、時宜ニ依リテハ王位ヲ繼承シ攝政タルコトヲ得ルノ點ニ於テハ公人タリ。又皇室ノ財産ヲ區別シテ一ハ國法上ノ相續ニ據ラシメ、他ノ一ハ私法上ノ相續ニ據ラシムベシ。卽チ現王ノ遺産ハ嗣王ニ屬スルモノト、私法ノ原則ニ據リテ相續シ得ルモノトノ二樣ニ分カルヽガ如キ是レナリ。第二ノ部分ニ關シテハ國君隨意ニ之ヲ贈遺スルヲ得ベシ。皇族ノ王位ヲ繼承スルハ國法ニ準據スルモノナリト雖モ、何人ガ皇族ニ屬スルヤ否ヤハ私法上ノ問題ニシテ、家憲ヲ以テ規定スベシ。故ニ皇室國法上ノ關係ハ之ヲ憲法ニ掲ゲ、私法上ノ關係ハ之ヲ家憲ニ掲グベシト言フヲ得ベシ。然レドモ此兩者ノ間ノ分界ヲ定ムルハ甚ダ困難ナリ。卽チ繼承ノ順序ハ憲法ニ屬スベキヤ、又ハ家憲ニ屬スベキヤノ疑問ノ如キ是レナリ。巴威爾國ニ於テハ王位繼承ノ順序ヲ擧ゲテ之ヲ憲法ニ掲ゲタリ。普國ニ於テハ其憲法五十三條ニ於テ大要ヲ掲ゲ其詳細ヲ家憲ニ讓レリ。故ニ普國ニ於テ男系ノ絶エタル後、女系モ亦王位ヲ繼承シ得ルヤ否ヤノ爭ヒヲ生ジタリ。又普國憲法第五十四條ニ於テハ、唯ダ國王ノ丁年ヲ掲ゲタレドモ、巴威爾ノ憲法第二章第七條ニ於テハ總テ皇子皇女ノ丁年ヲ掲ゲタリ。巴威爾ニ於テハ國王（チフヒリスト）經費、皇族年金（アパナージ）ヲ憲法ニ掲ゲタレドモ、普國ニ於テハ單ニ國王經費ノ條ヲ掲ゲタルノミ。例ヘバ憲法ニ於テ「皇子ハ皆年金ヲ受クベシ」ト定ムルヲ得ベシ。然レドモ此憲法ニ謂フ所ノ皇子トハ如何ナル人ヲ指スヤノ疑問アルトキハ、此事モ亦憲法ニ掲ゲザルベカラズ。從テ又皇族ノ婚姻ニ關スル規程ナカルベカラズ。此ノ如クシテ終ニハ家憲中ノ一切ノ事項ヲ擧ゲテ之ヲ憲法ニ掲ゲザルヲ得ザルニ至ル。何トナレバ私法上ノ關係ニシテ亦國法上ノ關係ヲ有スルモノアレバナリ。此區別ノ實際ノ效力ハ家憲ハ議院ノ議ヲ經ズシテ之ヲ定ムルコトヲ得ルモ、憲法ハ必ラズ議院ノ議ヲ經ルニ非ラザレバ變更スルコトヲ得ザルニ在リ、故ニ上ニ言ヘル如ク憲法ノ區域ヲ擴ムルニ於テハ皇族ハ私法上ノ關係ニ於テモ亦全ク獨立ヲ失ツテ議院ノ束縛ヲ被ムルニ至ルベシ。

他ノ一ノ方法ハ各個ノ事項ヲ家憲ニ掲ゲ、憲法ニ於テハ唯ダ家憲ヲ引用スルコト是レナリ。

此レ普國憲法ノ採ル所ニシテ、唯ダ王位繼承國王ノ丁年攝政ニ關スル規定ヲ憲法ニ掲ゲタリ。此ノ規定ハ直接ニ行政權ノ執行ニ關係ヲ有スルモノナリ。然ルニ丁年ノ最近親ニシテ攝政タルベキ人ハ何人ナリヤハ仍ホ明確ヲ缺クガ故ニ、此ノ如キ問題アルトキハ直チニ家憲ヲ以テ憲法ノ缺ヲ補ハザルベカラズ。斯ノ如キ二三ノ點ニ於テ家憲ヲ以テ憲法ヲ補フベキモノトセバ何故ニ一切ノ事項ヲ家憲ニ讓ルベカラザルヤ、又皇族ノ關係ヲ內外ニ區別シ、國家ニ關スル事件ト皇室ニ關スル事件トヲ分ツハ實際ニ效力ナキモノナリ。何トナレバ君主國ニ於テハ皇族ノ關係ハ同時ニ國家ノ事件ナレバナリ。例ヘバ國王ノ丁年、女系ノ相續權ハ私法上ノ性質ニシテ、併セテ國法上ノ性質ヲ有スルコト明カナルガ如シ。佛國ニ於テハ獨逸國ニ家憲ニ掲グル事件ヲ國法、卽チ「ボナパルト」家ニ關スル元老院ノ千八百五十二年十一月七日ノ決定書ニ掲ゲタリ。而シテ此決定書ニ據レバ、皇帝ハ皇室憲典（スタツート）ヲ以テ皇族ノ關係ヲ定メ、法律ノ效力ヲ有セシムルヲ得ベキナリ。英國ニ於テハ議院法（パルラメントスタツート）律ヲ以テ皇子皇女ノ關係ヲ定メタリ。

此ニ由テ之ヲ觀レバ、君主私法ニ於テ私法上ノ部分ト國法上ノ部分トヲ區別スベカラザルノミナラズ、如何ナル事項ヲ法律若クハ憲法ニ掲ゲ、如何ナル事項ヲ家憲ニ掲グベキヤニ關シ、確乎ノ標準ナキガ故ニ、此問題ハ隨意ノ斷定ニ任カスベキモノナリ。予ノ見ル所ニ據レバ、此事項ハ可成家憲ヲ以テ規定スルコト世襲君主國ノ本體及ビ王室ノ獨立ニ適スルガ如シ。蓋シ家憲ハ國王ノ本體及ビ王室ノ獨立ニ適スルガ如シ。蓋シ家憲ハ國王自ラ之ヲ制定スルヲ得、議院ノ干涉ヲ受ケザルモノナリ。但シ時宜ニ依リテハ皇族ノ既得權ニ害セザランガ爲、其皇族ノ承認ヲ受クベキノミ。此家憲ヲ制定スルノ權ハ國王ニ屬スル家長（フハミリーンヘケワルト）權ヨリ生ズルモノニシテ、其ノ私人ノ家族ニ於ケル關係ヨリ一層强大ナルハ、政治上ノ理由アリテ然ルモノナリ。此政治上ノ理由ヲ觀察スルニ、國會ノ干涉ヲ受ケズシテ專ラ家長タル國王ニ歸スルハ固ヨリ當然ノ事タリ。彼ノ貴族家（フハミリーンスタツート）法スラ國王ノ承認ヲ受クルノミニシテ、國會ノ承諾ヲ要セザルニ非ラズヤ、又家憲ハ現行法ノ一部ナルガ故ニ他ノ法律命令ニ於ケル如ク之ヲ遵守スベキモノナリ。

若シ家憲ノ一部ヲ憲法ニ掲グルトキ如何ナル事項ヲ掲グベキヤハ甚ダ困難ナル問題ナリトス。或ハ總テ行政權ノ執行ニ直接ノ關係ヲ有スル事項ヲ憲法ニ掲グルヲ得ベシト謂フヲ得ベシ然レドモ普國憲法ニ於テモ最重要ナル事項、卽チ王位繼承ノ順序ヲ以テ其憲法第五十三條ニ於テ之ヲ家憲ニ讓レリ。且ツ既ニ陳ベタル如ク男系ノ絕エタル後、女系ヲ以テ繼承スルヲ得ルヤ否ヤハ明白ナラズ、又攝政ノ事ニ至テモ其憲法（第五十六條、第五十七條）ニ於テ總テノ場合ヲ包括セズ、例ヘバ最近親者ハ均シク皆不能力者ナル場合ノ如キ是レナリ。又國王ハ特別ノ場合ニ於ケル共同攝政、或ハ政務代理者ヲ任ジ得ルヤ否ヤヲ憲法ニ掲載セズ。普國ノ今上ハ其兄

タル先王ガ疾病ノ間兩三年間單ニ代理者トナリテ政務ヲ執リ、其後始メテ攝政ノ地位ニ就ケリ。故ニ普國憲法ノ此事項ニ關スル規定ハ甚ダ不完全ナリ、巴威爾國ニ在テハ此事ニ關スル規定ヲ一部ハ之ヲ憲法ニ掲ゲ、一部ハ之ヲ家法ニ掲ゲタリ。之ヲ要スルニ、國法ニ關スル事項ハ總テ憲法ヲ以テ定ムベシト謂フヲ得ズ。却テ純然タル王家ニ關スル事項ニシテ、國民ト主權者トノ間ノ關係並ニ國權執行ノ原則ニ連帶セザルモノハ之ヲ憲法ヨリ除クコトヲ得ベシ。墺國ノ憲法ニ於テハ此王家ノ關係ヲ全ク掲グルコトヲ得ベシ。

總テ之ヲ確論スルトキハ、世襲君主國タルコト、從テ之ニ附帶スル王位繼承ノ順序ハ之ヲ憲法ニ掲グルヲ要セズ。又政務ヲ執ル權ヲ有スル王家ヲ指定スルヲ要セズ。何トナレバ此關係ニ於ケル現狀ハ憲法ノ發布ニ依テ變更スルコトナケレバナリ。此レ普國巴威爾ニ於テモ亦然ル所ニシテ、其憲法ニ於テ單ニ國王及ビ皇族ト言フモ「ホーヘンツオルレルン」家、「ミッテルベツヘル」家ト言ヘルコトナシ。他ノ諸國ハ例ヘバ英國、白國、佛國等ニ於テ特ニ此ノ如キ條章ヲ設クル所以ノモノハ、革命ノ後新興王家ノ權ヲ法律上ニ認ムベキノ必要アルガ故ナリ。日本ニ於テハ固ヨリ此ノ如キ必要アラザルガ故ニ、皇族ニ關スル一切ノ規定ヲ家憲ニ讓ルヲ得ベシ。而シテ此家憲ハ公布スルヲ要セズ、且ツ從來ノ婚姻及ビ相續上ノ關係ヲ保存シ、他日改正スベキ時機ノ來ルヲ須ツヲ得ベシ。

故ニ予ハ如何ナル場合ニ於テモ此事項ニ關スル左ノ條章ヲ憲法ニ掲グルヲ可トス。

第一條　日本帝國ハ永遠ニ向テ分割スベカラザル統一ノ世襲君主國ナリトス。

第二條　帝位ハ家憲ニ從ヒ皇族之ヲ繼承ス。

千八百八十七年一月廿一日

一、家憲ハ政務ニ屬スベキ乎、家憲ヲ發スルニハ大臣ノ對署ヲ要スル乎　ハ、ロエスレル

王家ノ家憲ニシテ其效力ヲ得ルガ爲メ大臣ノ對署ヲ要ルヤ否ヤノ問ニ對シ、予ハ左ノ如ク答フルノ榮ヲ得タリ。

此答ハ又專ラ家憲ヲ發スルコトヲバ國王ノ政務（レギールングスアクト）ト見做スベキヤ否ヤノ問ニ答フルニ依テ定マルモノトス。

此終リノ問ニ對シテ然リト答フルノ理由ハ左ノ如シ。

家憲ハ通常ノ法律ニ均シク一般ニ遵奉スベキ規準ヲ設クルモノナルガ故ニ、立法權ヨリ生ズルモノト見做スヲ得ベク、又王位繼承ノ順序ノ如キ國法上ノ關係ヲ制定シ、或ハ國王ノ經費若クハ料金（アパナージ）ノ如キ、政府ニ義務ヲ負擔セシムルノ點ヨリ見レバ、之ヲ目シテ國王ノ政務ナリト謂フベシ。

此ノ問ニ對シテ否ト答フルノ理由ハ左ノ如シ。

家憲ハ通常ノ意義ニ於ケル法律ニ非ザルガ故ニ、立法權ヨリ生ズルノモノニ非ラズ。又議院ノ承諾及ビ頒布（プブリカチオン）ノ如キ尋常ノ法律ノ要件ニ服從セザルハ一般ニ是認スル所ナリ。

國王ニ屬スル最上ノ國權ト王家ノ首長トシテ均シク國王ニ歸スル最上ノ家長權トハ之ヲ判明ニ區別セザルベカラズ。通常ノ法律ハ國權ヨリ生ジ、家憲ハ家長權ヨリ生ズ。家長權ノ執行ハ政務ニ屬セズ、「シュルチエー」氏ノ言ヘル如ク、此ノ場合ニ於テ國王ハ立法者ノ資格ヲ以テ處理スルニ非ラズ、其家族ヲ指揮スル首長トシテ處理スルナリ。

家憲ハ又國法上ノ關係ニ於テ政府ニ義務ヲ負擔セシメ得ルモ、此レニ依テ上陳ノ意義ヲ變ズルモノニ非ラズ。是レ王國ニ於テ國ト國王ノ家族トヲ連絡スルノ必要ヨリ生ズルモノニシテ、王家ノ家族法ヲ制定スルニ依リ、同時ニ又國法ノ一部ヲ制定スルニ過ギズ。家憲ヲ以テ政府ニ負擔セシムル所ノ義務ハ、國王ト政府ノ間ニ於テ存否隨意ナルモノニ非ラズ。此義務ハ自然ニ存スルモノニシテ、政府ノ本性及ビ必要ヨリ生ジ、家憲ニ之ヲ掲グルハ特ニ之ヲ明言シ且ツ其範圍ヲ限ルニ過ギザルナリ。

家憲ヲ發スルノ權ハ特權（ツオルレヒト）ナリ。而シテ此權ハ古來王家ニ屬スルノミナラズ、獨逸國ニ於テハ又凡テノ往時ノ帝國直轄ノ諸侯ハ勿論、其一部ハ下等貴族ニ屬シタリシナリ。此特權ニ基ク規準ハ法律ニ非ラズ、亦命令ニ非ラズ、高等貴族ノ家憲ニシテ、其效力ヲ得ルノ要件ハ之ヲ主權者ニ奏上シ、且ツ最上官廳ニ通告シテ遵奉セシムルニ外ナラズ。主權者自ラ發スル所ノ家憲ニ在リテハ唯ダ之ヲ內閣ニ通告スルヲ要スルノミ。

然レドモ主權者ノ家憲ヲ發スル特權ハ元來家長權ナルガ故ニ、固ヨリ無制限ナルモノニ非ラズ、故ニ皇族ノ現ニ有スル既得權利ヲ動カスモノニ限リテハ、少ナクモ其承諾アルヲ要ス。又家憲ヲ以テ現行ノ憲法ヲ變更スル場合ニ當テ議院ノ承諾ヲ要スルハ固ヨリ論ヲ須タズ。然レドモ凡ソ家憲ノ揭グル所、政府關涉ノ事件ハ其憲法ニ干ラザルモノニ就テモ亦議院ノ承諾ヲ要スベシトノ說ニ至テハ之ヲ不當ト謂ハザルヲ得ズ。何トナレバ憲法ハ必ズシモ國法全體ヲ包括スルモノニ非ザルガ故ニ、縱令憲法ヲ施行スルモ未ダ此レガ爲ニ國法上一切ノ事件ニ關シ暗ニ家憲制定ノ權ヲ廢シ、若クハ制限スルニ非ラザルガ故ナリ。故ニ近世獨逸諸國ノ家憲ハ議院ノ參與ヲ受ケズシテ發シタルモノ甚ダ多シトス。

大臣對署ノ事ニ關シテハ實際一定ノ例規ナシ。或ハ諸大臣若クハ一名ノ大臣對署スルコトアリ、或ハ然ラザルコトアリ、其ノ對署ヲ要スル國ニ於テモ其ノ要件タルハ立憲上ノ效力ヲ有スル爲ニ非ラズ。事務上(ゲシエフリヒヘ)ノ效力又ハ政事上(ポリシー)ノ效力タルニ過ギズ。宮內大臣ハ總テ王家ノ事務ヲ掌ル點ヨリ見レバ、予ハ其對署ヲ以テ足レリト信ズ。又其對署ハ此レニ依テ責任ヲ負フ所ノ立憲上ノ效力ヲ有スルモノニ非ラズ、何トナレバ大臣ノ責任ハ專ラ國王ノ政務ニノミ關スルモノナレバナリ。國權ト家長權トハ均シク主權者ノ一身ニ會輳スルモノナリト雖モ、此兩者ハ判然之ヲ區別セザルベカラズ。卽チ巴威爾國王ハ新タニ家憲ヲ發スルニ當リテ言ヘルコトアリ、曰ク『朕ハ王家ノ最上首長タルノ資格ヲ以テ家憲ヲ發スルノ權ヲ有ス』ト、此言ヤ家憲ヲ發スルニハ國家ノ首長タルノ資格ヲ以テセザルコトヲ徵スルニ足ル。

普國ニ於テモ王家ノ事件ハ一モ政府ノ事件ト見做サヾルガ故ニ立憲上ノ事務執行ニ關スル原則ヲ家事ニ適用スルヲ得ズ。

此レニ由テ之ヲ觀レバ左ノ原則ハ理由アルモノノ如シ。

第一　皇帝ハ家憲ヲ發スルコトニ關シ最上ノ全權ヲ有ス、但シ憲法ノ制限ニ從フベク、且ツ皇族ノ權理ヲ損シ或ハ之ヲ動カス場合ニ於テ其承諾ヲ受ルヲ要ス。

第二　宮內大臣ノ對署ハ事務上ノ處置ニシテ、立憲ノ意義ニ於ケルニ非ラズ、其效力ヲシテ大臣責任ノ要件タラシムルニ非ラズ。

第三　皇族及ビ內閣ニ對スルノ通告ハ頒布ニ代用スルモノトス。其果シテ通告ヲナシタルヤ否ヤヲ確認スルガ爲ニハ總理大臣ノ對署アルヲ可トス。豫ジメ皇族及ビ內閣ノ意見ヲ問フハ政事上ノ理由ニ於テ嘉スベキノ事ナリト雖モ國法上ノ必要アルニ非ラズ。

第四　憲法ヲ變更スルニ非ザル限リ議院ノ承諾ヲ要セズ。

此事タル學者ノ著書中ニ論及シタルコトナキガ故ニ、實際國王ト國會トノ間ニ爭議ヲ生ジ易キヲ以テ「ハンノフエル」憲法第二十六條ノ如キ一條ヲ憲法ニ揭グルヲ可トス。曰ク、家憲ハ國會ノ承諾ヲ要セズ、但シ家憲ヲ以テ現行憲法ヲ變更スルヲ得ズ」ト。

二月三日

ハ、ロエスレル拜

三、女性及ビ能力者ノ王位相續ノ權ニ係ル件

歐洲各國ノ王位相續法ハ私權上財産相續法ヨリ進化シ來レルモノニシテ、未ダ純粹ナル公權上ノ相續法ニ適當スルニ至ラズトハ、獨逸ノ學者中ニモ往々其ノ論ヲ爲ス者アリ。

若シ此ノ論旨ニシテ大過ナカラシメバ、試ニ私權相續ノ性質ヨリ原因シ來レル一二ノ實例ヲ擧グルコトヲ得ベシ、卽チ左ニ開列ス。

一、英國及ビ其ノ他ノ國ニ於テ女性ノ皇族ニ或ル場合ニ於テ相續ノ權ヲ與ヘタルコト。

一、正當ノ繼承者ノ精神又ハ身體上ノ重患ニ由リ不能力ノ有樣ナルトキモ、猶ホ繼承ノ順序ヲ換ヘズシテ攝政ヲ以テ補佐スルコト。(此事ハ孛國及ビ其ノ他ノ或ル國ヲ除ク外、獨逸ノ舊法ニ依レバ繼承ノ順序ヲ換フルヲ以テ當然トスルガ如シ)。

夫レ國法上ノ相續ハ文武ノ兩大權ヲ統攬シテ之ヲ施行スル爲ニ十分ナル能力アルヲ要スルハ當然ナリ。若シ私權上ノ相續ニ依ラズシテ之ヲ論ズルトキハ、女性並ニ重患ノ不能力者ハ國法上ノ相續權利ヨリ除外(エキクリユズ)セラルヽコト疑ヒヲ容レザルニ似タリ。右ニ付貴下ノ精確高尙ナル意見ニ倚賴ス。

明治二十年一月廿一日

ロエスレル君貴下

井上毅

答

王位繼承權ノ公權タルコトハ一般ニ是認セラレタルモノナリ。何トナレバ其ノ繼承物件ハ往時ノ主義ニ從ヒ之ヲ國土ナリトスルモ、又近世ノ主義ニ從ヒ之ヲ主權全體ナリトスルモ、均シク公權ニ屬スレバナリ。但シ國王ノ私有遺産ニ於ケル私法上ノ相續ハ全ク此レヨリ區別スベシ。故ニ王位繼承權ハ國法ノ觀察ニ依テ定ムベキナリ。

英國ハ王位繼承ノ事ニ關シ左ノ原則ヲ取ル。卽チ王位ヲ繼承スル相續ノ權ハ特種ノ權、卽チ私法上ノ相續權ト異ナルモノナリ。王位繼承權ハ無限ノモノニ非ラズ。時宜ニ依リテハ國王ノ承諾ヲ得、議院ノ決議ヲ以テ之ヲ變更スルヲ得ベク、卽チ王位繼承者ノ全ク不能力ナル時、又ハ或ル宗教ヲ奉ズル時ノ如キ是レナリ。英國ニ於テハ變革ノ爲メ議院ニ於テ王位繼承法ヲ顚覆

シタルコト往々之アリ。但シ英國ニ於テモ亦攝政ノ制度ナキニ非ラズ。

獨逸國ニ於テモ亦英國ト同一ノ原則行ハル。但シ巴威爾及ビ普國ノ如キハ王位繼承者或ハ國王ノ不能力ナル場合ニ於テ、憲法上必ラズ攝政ヲ置クベキコトヲ定メタルハ例外トス。故ニ獨逸諸國ニ於テモ實際不能力者ヲ王位ヨリ黜ケタルコトアリ、例ヘバ當世紀ニ於テモ「フラウンシユワイヒ」國王ガ國權ヲ濫用シタルガ爲メ、巴丁大公ガ精神病ニ罹リタル爲メ、之ヲ王位ヨリ黜ケタルガ如キ是レナリ。而シテ巴丁國ノ繼承者一時攝政トナリテ政務ヲ執リタル後、尙ホ大公存命中ニ於テ位ニ卽ケリ。

故ニ此ノ王位繼承ノ事ハ自由ナル考案ニ從ヒ隨意ニ家憲又ハ憲法ニ揭ダルヲ得ベシ。

第一　皇女ヲシテ王位ヲ繼承セシメザルコトニ關シテ意見ヲ陳ベン。抑モ皇女ハ政務ヲ執ルノ能力ヲ有セザルモノニ非ラズ。露國、墺國、西國、英國ノ如キ君主國ニ於テ、女主ノ政務ニシテ好結果ヲ得シコト往々之アリ。支那ニ於テモ現在皇太后ハ未丁年ノ皇帝ニ代テ政務ヲ執ル、故ニ女主ノ政務ヲ以テ不能ナリト斷言スルヲ得ズ。今ヤ日本ニ於テ國民ノ思想上婦人ニ政務ヲ執ラシムルヲ是認スルヤ否ヤハ予ノ斷言シ能ハザル所ナルガ故ニ、從來ノ舊政ヲ存スルヲ以テ可トナスベキカ。予ノ一個ノ意見ニ據レバ、男系ハ常ニ女系ニ先ツベシト雖モ、男系全ク絕ユル時ハ女系モ亦王位ヲ繼承スルヲ得ベク、而シテ女系ノ子孫ニ於テハ再ビ男系ヲ先ンズベキナリ。此法ニ依レバ王位系ヲ絕ツノ患ヒヲ免ル、コトヲ得ベク、從テ王國ノ統緒永遠安全ナルノ效果アリ。

第二　精神又ハ身體上不治ノ不能力ノ場合ニ於テハ王位繼承ノ權ヲ失ハシメ、或ハ王位ヲ黜カシムルコト事理ニ適スルモノトス。是レ英國及ビ或ル獨逸諸國ニ於テ屢々見ル所ナリ。但シ攝政ヲ設クルノ寬和ナル處分ヲ取ルノ例尤モ多シ。例ヘバ英國ニ於テハ「ゲオルグ」第三世ノ精神病ニ罹リタル時、巴丁ニ於テハ前陳シタル場合ノ如キ是レナリ。攝政ヲ置ク理由數樣アリ、卽チ疾病ノ不治ナルコトハ始メヨリ之ヲ診斷シ難キコトアリ、疾病ニ罹リタル王位繼承者又ハ國王ニシテ能力アル卑屬親ヲ有スルコトアリ。又未丁年、不在、臨時ノ疾病（巴威爾ニ於テハ一年以上ノ疾病）ノ場合ノ如キハ攝政ヲ置カザルベカラザルガ如キ是レナリ。又政治上ヨリ觀察スルモ、不能力ノ皇子ニシテ全ク王位繼承ノ權ヲ失ハシムルニ於テハ、榮譽ヲ好ムノ皇族或ハ反對黨ヨリ輙モスレバ王位ノ爭議ヲ起スノ憂ヒアリ。例ヘバ當時ノ露西亞帝ハ數々新聞紙上ニ其精神病ニ罹レルコトヲ記載セリ。此ノ如キ浮說ニシテ國內ニ傳播スルトキハ國民ニ廢立ノ思想ヲ生ゼシメ、終ニハ革命ノ基トモナルベシ。故ニ攝政ヲ置クコトハ其ノ實ハ固ヨリ王位ヲ廢シ、或ハ繼承權ヲ失ハシムルニ同ジト雖モ、因テ以テ王位繼承ヲ變更スルモノニ非ラザレバ君主國ニ於

テ必要ノ事タリ。

然レドモ攝政ノ制ハ左ニ掲グルガ如キ患害ナキニ非ラズ。

第一　攝政ハ或ル國ノ憲法ニ據レバ、主權者ト同一ノ主權ヲ有スルモノニ非ラズ、例ヘバ巴威爾憲法第二章第十八條及ビ第十九條ニ從ヘバ、攝政ハ總テノ重大ナル事件ニ關シテハ攝政參議（レケントシヤフツラート）ノ意見ニ檢束セラル、普國ニ於テハ此ノ制限アルコトナシ。

第二　攝政其人ハ主權者ニ非ラズ。故ニ主權者ノ如ク其ノ身體ハ侵スベカラザルヤ、且ツ無責任ナルヤ否ヤノ疑問ヲ生ズ。

攝政ニシテ永續スルトキハ爲ニ國家並ニ王家ノ利益ヲ容易ニ妨害セラル、モノナリ。故ニ予ハ通常ノ輕微ナル場合ニ於テハ、攝政ヲ置クノ簡便ナル方法ヲ採リ、實際永久不能力ナルノ場合ニ於テハ攝政ヲシテ王位ヲ繼承セシムルヲ以テ可トス。此場合ハ王位繼承者ナル攝政或ハ皇族總員ノ意見ニ依テ決セシムベク、又皇族ナキトキハ爲ニ置ク所ノ攝政、參議或ハ普國憲法第五十七條、巴威爾憲法第二章第十三條ニ從ヒ撰定セラレタル攝政ノ決定スル所ニ據ルベシ（普ハ內閣會議、巴ハ王后又ハ首相、攝政ニ當ル）

攝政ヲ置クニハ國會ノ承諾ヲ得ルヲ例トス。然レドモ予ハ單一ナル未丁年ノ場合ニ於ケルト均シク、國會ノ承諾ヲ以テ必要ナラズトスルノミナラズ、全ク其當ヲ失ヒタルモノトス。蓋シ議院ニ於テ攝政ノ權ヲ爭フハ害アリテ益ナキコトナリ。

千八百八十七年一月廿二日

ハ、ロエスレル　拜

四、王后ハ君位ニ屬スベキ乎將タ臣位ニ屬スベキ乎

王族ノ名稱ニ廣キ意義ト狹キ意義トアリ國法上ニ於テ何レヲ指ス乎

卽位ノ儀式ノ件

一、王后ハ其尊號ニ於テハ國王ト同等ナルモ、又私法上ニ於テハ同等ノ關係トスルモ、國法ニ於テハ國王ト同ジク國ノ首長タルノ大權、卽チ主權アルモノニ非ラズ。何トナレバ主權ハ必ラズ一人ニ屬スベキモノナレバナリ。果シテ然ラバ國法ニ於テ王后ハ君位ニ屬スベキカ、將タ臣位ニ屬スベキカ、將タ場合ニ依リ或ハ君位ニ屬スルコトアリ、或ハ臣位ニ屬スルコトアルカ、歐洲各國殊ニ獨逸諸國ノ家憲ニ於テ如何ナル定例アリヤ。

二、王族ト稱フル名義ハ廣キ意義ト狹キ意義ノ兩樣アリテ、一ハ國王ノ卑屬親、王ノ伯叔男女、兄弟姉妹、從兄弟姉妹及ビ其配偶ヲ指シ、他ノ一ハ國王ノ祖宗ヨリ分レ來リタル同族ニシテ、臣下ノ列ニ下ラザルモノヲ總稱スルカ、若シ然ラバ廣キ意義ノ王族ト狹キ意義ノ王族トハ其禮遇及ビ尊稱ヲ異ニスルカ。

國法上ニ於テ凡ソ王位ヲ繼グベキノ身分アル者ヲ王族ト稱フルハ、廣キ意義ニ就テ謂ヘルナルガ如シ、如何。

三、歐洲ノ帝王國ニ於テ王位繼承ノ後、更ニ儀式（ホルマリチー）上ノ卽位ノ禮（セレモニー）ヲ行フハ登極ノ祭祀ニシテ專ラ宗旨上ノ朝儀（ユートセラモニー）ナルガ如シ。而シテ其ノ國法上ノ關係ハ如何、或國ニ於テ、憲法ニ揭載シタル卽位ノ宣誓ノ外、此儀式ハ何等ノ價格ヲ付スベキヤ、憲法又ハ家憲ニ於テ之ヲ揭載スルノ要用ヲ見ルヤ。

答　第一

皇后ハ其餘ノ皇族ト均シク臣下ニ屬ス。獨リ國君ノ榮譽權、卽チ其ノ尊稱爵位ト特別ノ臣僚（ホーフスタート）ヲ有スルノ權及ビ位置相當ノ供奉ヲ享クルノ權ヲ有スルノミ。而シテ此ノ費用ハ國君ノ經費中ヨリ支出スルヲ通例トス。又國君崩殂シ、皇后寡婦トナリタル時ニハ、寡婦俸ヲ享クルノ權ヲ有シ、而シテ其ノ額ハ結婚契約又ハ法律ヲ以テ定ムルヲ得ベシ。

民法上ニ於テハ皇后ハ其ノ餘ノ皇族ト同ジク、家憲ニ規定シタル君主私法（プリワートヒュルステンレヒト）ノ下ニ立チ、且ツ、特別ノ裁判管轄ニ屬ス。卽チ遺言、婚姻、後見ノ如キ非裁判事件ニ在テハ通例宮內省ノ管轄ニ屬シ、刑事及ビ純粹ノ人事又ハ皇族間ノ訴訟ニ在テハ國王ノ管轄ニ屬シ、皇族外ノ者トノ爭訟又ハ物事上ノ爭訟ニ在テハ高等裁判所ノ管轄ニ屬ス。例ヘバ往時普國ニ於テハ伯林ノ「カムメルチリヒト」（控訴裁判所）ノ司法參事ニ屬シ巴威爾ニ於テハ控訴裁判所ニ屬シタルガ如シ。國王親カラ裁判ヲ行フノ場合ニ於テハ宮內、司法兩大臣ノ意見ヲ問フコトアリ、或ハ其ノ裁判ヲ親族會議ニ任ズルコトアリ。

答　第二

皇族ヲ別テ宗系、支系トス。巴威爾國ニ於テハ國王ノ卑族親ハ皆宗系ニ屬ス。獨リ王位繼承者ノミナラズ其皇子及ビ皇女モ亦之ニ屬ス。其ノ次子以下ヨリ分派スル者ハ支系ニ屬ス。宗系及ビ支系間ノ權利上關係ニ於テ大體ハ異ナルコトナシ。獨リ皇太子ハ尊稱上ノ特權、親族會議員或ハ參議院議官トナルノ權利及ビ國庫ヨリ特定ノ給料ヲ享クルノ權ヲ有シ、其ノ餘ノ宗系ニ屬スル人ハ支系ニ屬スル人ヨリハ多額ノ給料ヲ享クルノ差アルノミ。

王位ヲ繼承スルノ權ニ關シテハ皇族ナル語ハ之ヲ總括的ニ解釋スベシ。何トナレバ宗系ニ於テ王位ヲ繼承スベキ者ナキニ於テハ、其ノ權ヲ支系ニ及ボスガ故ナリ。

皇女他人ニ嫁シ其ノ家族トナリタルトキハ皇族ヲ脫スベキハ固ヨリナリ。

又皇族ノ列ニ加ハル者ハ必ラズ正當ナル婚姻ニ依テ生ジタルモノナラザルベカラズ。

答第三

卽位ハ天帝ヨリ王位ヲ受クルコトヲ表證スル所ノ祭儀ナリ。天祐ヲ保有スト言フコトハ則チ此ニ基クモノナリ。往古ノ國法上卽位ノ效用ハ王位及ビ之ニ附帶シタル權利ハ此レニ由テ始メテ之ヲ得有スルニ在リ。例ヘバ往古ノ獨逸帝ハ羅馬ニ於テ卽位ヲ行フマデハ其ノ名稱ヲ用ユルコトナカリシナリ。予ノ知ル所ニ據レバ「ウンガルン」國ニ於テハ今日現ニ王位ヲ享クルニハ必ラズ卽位ヲ行ハザルベカラズ。然レドモ近世ニ至テハ卽位ハ儀式ニ止マリ、各國之ヲ行フコトハ甚ダ稀ナリ。普國ノ今上ハ千八百六十一年ニ卽位ヲ行ヒタリト雖モ、其ノ卽位ハ自ラ王冠ヲ載キタルコトニテ、嘗テ僧侶ノ手ヲ假リタルコトナシ。奈破侖翁ハ王冠ヲ羅馬法王ニ受ケ、以テ其ノ武勳ニ依テ得有シタル尊稱ヲ神聖ニセンコトヲ求メタリ。

卽位ニ附帶シテ卽位宣誓ナルモノアリ。此ノ宣誓ニ依テ國王ハ發令ヲ保護シ、法律ヲ遵守スルノ義務ヲ有シ、又敎會ハ國王ニ對シ諸侯ノ背反ヲ保障スベキノ義務ヲ帶ブ。王位繼承法ノ未ダ確定セザル中古ニ於テハ、之ヲ近世ニ比スレバ卽位ニ大ナル價値ヲ與ヘタリト雖モ、卽位ヲ以テ始メテ統治權ヲ得ルニハ非ラズシテ此ニ依テ其ノ統治權ヲ鞏固ニシタルノミ。近世ニ至テハ卽位ハ殆ンド人類ノ間然スベカラザル天授ノ統治權ヲ表證シ、國民ニ對シ王位ヲ得有スルノ儀式タル價値ヲ有スルノミニシテ、一モ其權利ヲ生ゼシムルモノニ非ラズ。故ニ卽位ノ事ヲ憲法或ハ家憲ニ揭グルハ不用ナルノミナラズ、卽位ヲ行フニ非ラザレバ王位ヲ有セズトノ口實ヲナスノ點ヨリ見レバ却テ弊害アルモノナリ。

純粹ノ政事上便宜ノ點ヨリ論ズレバ、王位ヲ得有スルノ祭儀ハ之ヲ除却スルノ必要ナシ。何トナレバ此ノ祭儀ハ人心ニ道德上ノ感覺ヲ銘刻スルモノナレバナリ。若シ憲法宣誓ニ加フルニ此ノ祭儀ヲ行フニ於テハ、國王ハ人民ニ對シテ憲法上ノ義務ヲ負フノミナラズ、更ニ人民ノ間然スベカラザル天授ノ權ヲ有スルコトヲ表證スルノ效アリ。然レドモ此ノ如キ儀式ハ憲法宣誓或ハ其ノ他特別ナル「フルヂグングス、ハイエル」ノ如ク必要ナルモノニ非ラザルナリ（「フルヂクングス、ハイエル」ハ臣僚忠順ノ儀式ナリ）

千八百八十七年一月十七日

ハ、ロエスレル拜

五、他家ニ嫁シタル王族女子ノ件

王族ノ子孫ハ何代ニシテ人臣トナルベキ乎

第一問ニ答フ。（他家ニ婚嫁シタル皇族ノ女ハ皇族タルコトヲ失フヤ）

他家ニ婚嫁シタル王族ノ女子ハ王族ニ婚嫁シタル場合ヲ除クノ外ハ王族タルノ資格ヲ失フ。

引證。

「バイエルン」國、家憲　千八百十九年八月五日制定

第一章第一條　王族トハ左ノ人員ヲ包括ス。

第一、國王ノ允許ヲ得タル正當ノ同族婚姻ニ由テ國王若クハ共同祖宗ノ卑屬親ヨリ男系ニ於テ降誕スル所ノ子及ビ女、

但シ右家憲ニハ皇女トノミアリテ他家ヘ婚嫁シタル場合如何ヲ掲ゲザレドモ「ビヨーツル」氏「バイエルン」國憲論ニ皇族ノ女ハ王族ニアラザル家ノ子ニ婚嫁スルトキハ「バイエルン」國ノ王族ヲ脱シ其ノ夫ノ所屬ノ家ノ一族トナル明文アリ。

故「ハノーフル」國、家憲（千八百三十六年制定）

第四條　王家ノ皇女ハ王族ニアラザル夫ニ婚嫁スルトキハ王族ヲ脱ス。

「リヨンネ」氏孛國國法論第二卷第二百七十九丁

王族ニ屬スル者左ノ如シ。

第一、第二（略）

第三　國王ノ允許ヲ得タル正當ノ同族婚姻ニ由テ最初ノ帝王ヨリ男系ニ於テ降誕スル所ノ子及ビ女、但シ皇族ノ女ハ王族ニアラザル家ノ夫ニ婚嫁スルトキハ王族ヲ脱シ其ノ夫所屬ノ家ノ一族トナル。

第二問ニ答フ　（皇族ノ系統ノ子孫ハ何代ニ至テ降テ人臣トナルヤ）

王族ノ系ハ國王ノ允許ヲ得タル正當ノ同族ノ婚姻ニ由テ降誕スル子孫ハイツマデモ王族ナリ。

引證。

バイエルン國家憲　（千八百十九年八月五日制定）

第一章第一條　王家トハ右ノ人員ヲ包括ス。

第一　國王ノ允許ヲ得タル正當ノ同族婚姻ニ由テ國王若クハ共同祖宗ノ卑屬親ヨリ男系ニ

於テ降誕スル所ノ子及ビ女。

故「ハノーフル」國家憲（同上）

第三條第一、第二（略）

第三　王國ニ於テ王位ヲ繼承スルノ權利アル「ハノーフル」王系ノ子女ニシテ現時ノ王ニアラザル者云々

「リヨンネ」氏孛國國法論、第二卷第二百七十九丁

王族ニ屬スル者左ノ如シ、

第一、第二（略）

第三　國王ノ允許ヲ得タル正當ノ同族婚姻ニ由テ最初ノ帝王ヨリ男系ニ於テ降誕スル所ノ子及ビ女。

六、君主ノ奉養ハ國庫ニ取ルベキ乎

君主政ノ主義ニ從テ解釋ヲ下ストキハ、君主ハ一國ノ元首ナルガ故ニ、君主ノ奉養ハ當然ニ國庫、卽チ一國ノ租稅又ハ官有物ノ入額ヨリ供給スベク、憲法又ハ法律ヲ以テ之ヲ確定スルコト尤モ立憲國ノ意義ニ稱フルモノナリ。歐洲各國ノ君主ハ其ノ初メハ封建ノ一大豪族ニシテ、自ラ其ノ私有ノ領地ヲ占メ、其ノ入額ニ依テ一家ノ奉養ト並ニ政務ノ公費ヨリ支辨シタリ。此レ乃チ當時政治上ノ主義未ダ發達ヲ得ズシテ國法ヲ以テ私法ト混淆シタルナリトハ獨逸諸大家ノ通論ナリ。

我國ハ上代ヨリ帝室及ビ政府ノ費要ハ均シク全國ヨリ徵收スル所ノ租稅ヲ以テ之ヲ支辨シ、更ニ帝室ノ費用ニ充ツル爲メ帝室ノ財產ヲ置カザリシハ全ク至尊ノ位ヲ以テ公法上ノ元首トナシ一個ノ私事トナサヾル立憲ノ主義ニ符合スルモノニシテ、彼ノ孛國ノ先主ガ千七百年代ノ初メニ於テ從前ノ領地ヲ擧ゲテ之ヲ官有ニ歸シ、同時ニ其ノ中ノ入額ヲ以テ帝室費ヲ定メタルト其ノ精神ヲ同ジクスルモノナリ。

此ノ事ハ我國ノ憲法ヲ立ツルニ於テ第一ニ貴重スベキ國體ノ基礎ナリト信ズ。貴下ノ意見ヲ示サレンコトヲ乞フ。

ロエスレル君　　井上毅

答

皇帝及ビ其ノ餘ノ皇族ノ奉養ハ政府ヨリ供給スベキハ疑ヒナキコトナリ。何トナレバ若シ然ラザルニ於テハ皇族ヲ分限相應ニ存立セシメ、及ビ君主國ヲ維持スルコト難ケレバナリ。此事ヲ正當ニ確定スルハ卽チ憲法ヲ鞏固ニスルモノナルガ故ニ、多少精密ニ之ヲ憲法上ニ記載スベク、其ノ一部ハ憲法ニ附帶スル家憲ニ記載スベキナリ。今此ニ要スル所ノモノハ如何ナル方法ヲ以テ此ノ奉養ヲ供給スベキヤ、且ツ如何ナル方法ニ由リテ之ヲ規定スベキヤ是レナリ。

第一ノ關係ニ就テ論ゼンニ、政府ヨリ供給スル奉養ニ地所(ドメーネン)ヲ以テスルト、金錢(卽チ經費(チウイリスト))ヲ以テスルノ二樣アリ、經費金ヲ以テスル奉養ハ近世各國ノ執ル所ノ制ナリ。何トナレバ近世政府ノ理財ハ一般ニ地所ヲ以テ基礎トナサヾルニ至リタレバナリ。尤モ此ノ經費金ニハ地所宮殿等ノ王位ニ附屬スルモノナカルベカラズ。佛國ニ於テハ之ヲ名ケテ「ドタシヨンド、ラクロオン」ト云ヒ、又王冠附屬ノ寶石等ノ如キ動產ヲ使用スルノ權モ亦此レニ屬ス。抑モ此ノ經費金ノ政府所有物ノ收入ヨリ特別ニ供給スルコトアリ、普國及ビ巴威爾ノ如キ是レナリ。或ハ一般ニ國庫ヨリ供給スルコトアリ、佛國及ビ英國ノ如キ是レナリ。英國ニ於テハ經費金ハ所謂「コンソリデーテツト、フント」ニ屬スルモノニシテ、此ノ「コンソリデーテツト、フント」ハ第一ニ政府ノ所有物ヨリ支出スベキガ故ニ、實際普國ト異ナルコトナシ、經費金ノ額ハ每年之ヲ確定スルニアラズシテ、國君ノ終身ニ亙リテ確定スルコトアリ。英國及ビ白國ノ如キ是レナリ。或ハ恒久ニ確定スルコトアリ、普國及ビ巴威爾ノ如キ是レナリ。但シ後日需要アルガ爲ニ之ヲ增スモ妨ゲナキナリ。又經費金ヲ以テ供給スベキ費目ヲ詳細ニ規定スルコト必要ナリ。何トナレバ此ノ費用外ハ別ニ國庫ノ負擔トナルベケレバナリ。是レ殊ニ皇子、皇女ノ「アバナージ」(分料)ヲ供給スルコトニ關シテ緊要ナリ。

以上陳ベタル王位ノ附屬物ヲ併セタル經費金ノ制度ハ尤モ採ルベキモノトス。此ノ制度ハ國君ニ每年一定ノ金額ヲ供給スベキモノナルガ故ニ、其家ヲ安全ニシ且ツ之ヲ政府ノ財政ノ外ニ置クコトヲ得セシムルモノナリ。而シテ其收入大藏省ニ於テ之ヲ管理スベク、國君ハ其ノ管理上ノ結果ニ關シ一モ責ニ任ズルコトナシ。故ニ皇帝ハ年金ノ費用ヲ整理スルコトニ就テ負擔ヲ生ズルコトナキヲ以テ、國家ノ利害ヲ裁定スルニ當リ常ニ獨立公平ヲ保ツヲ得ベシ。

第二ノ關係ニ就テ論ゼンニ、經費金額及ビ其ノ附屬物ハ法律ヲ以テ確定スルヲ例トス。普國ニ於テハ往古以來一千八百二十年ニ至リテモ尙ホ勅令ヲ以テ之ヲ確定シタリト雖モ、立憲制ヲ行ヒシ以來議院ノ承諾、卽チ法律ヲ以テ其增額ヲナスコトトナレリ。從來王室ニ屬シタル地所(カムメルゲート)ヲ變ジテ政府ノ地所トナスモ、國王ハ尙ホ後來議院ノ承諾如何ニ拘ラズ、自ラ經費金額ヲ確定

スルノ權、卽チ王室財産ヲ維持スルノ權ヲ存スルヲ得ベシ。何トナレバ左ノ言ヲナスモ全ク正當ノ事ナレバナリ。「從前國君ニ屬シタル財産ハ自今政府ノ所有トナスベシト雖モ、現今或ハ後來王室ノ費用ニ充ツル爲ニ必要ナリト認ムルモノハ、嗣後ニ於テモ亦國君之ヲ確定スベシ」ト。此ノ事ハ或ル負擔ヲ以テスル讓與ニ外ナラズシテ、其效力ハ固ヨリ制限ナキノ讓與ニ非ラザルナリ。抑モ古來帝室所有地所ヲ存セザル日本ニ於テハ、經費金ノ確定ニ關スル上ニ述ベタル沿革上ノ理由ヲ適用スルコトヲ得ズ。今此ニ一般ノ原則ニ據テ經費金ヲ確定シ得ベキヤ否ヤノ問題アリ、此ノ問題ニ就テハ左ノ考案ヲ下スコトヲ得ベシ。

一、王室ノ經費金ヲ承諾スルノ權ハ議院ニ屬スルモノニ非ラズ。何トナレバ經費金ハ法律上ノ必要ニ基クモノニシテ、此レナキニ於テハ國家ハ全ク存立スルコト能ハザレバナリ。故ニ法律ニ依テ經費金ヲ確定スルハ無益ノ方式ニ止マルモノト謂フベシ。

二、經費金額ニ至テハ議院ノ承諾ヲ受クルモ不可ナルコトナシ。而シテ此額ハ帝室需要ノ實費ニ從テ定マルモノナレバ、皇帝ノ外ニ之ヲ判定シ得ルモノナシ。何トナレバ帝室ノ家計ヲ掌ル者ハ皇帝ニシテ其至尊ナル地位ヲ維持スル情念ハ獨リ皇帝ノ有スル所ナレバナリ。之ヲ實際ニ考フルニ、國王ハ其ノ家計ノ爲メ必要ナル金額ヲ確定シ、議院ハ方式上之ヲ承諾スルモノトス。何トナレバ國王ノ至尊ナル地位ニ對シ、財産上ノ强制ヲ加フルコト能ハザレバナリ。又國王ヲシテ其ノ費額ノ豫算決算ヲ議院ニ呈出セシムベシトセバ、是レ國王ノ尊嚴ヲ凌迫スルモノニシテ、又其ノ勅語ヲ信用セザル所爲ト謂フベシ。故ニ議院ニ於テ經費金額ニ關シ爭議ヲ生ズルハ既ニ美事ニ非ラズ。但シ皇族ノ「分料（アバナージ）」ニ關シ稀ニ見ル所ナレドモ、是レ全ク君主制ヲ顚覆セントスル過激黨ニ出ヅルノミ。

此ヲ以テ予ハ經費金ノ事ヲ以テ家憲ニ任ズルヲ正當ナリト信ズ。但シ家憲上一般ニ行ハル、所ノ要件アルヲ要ス。卽チ皇族會議及ビ內閣ノ意見ヲ諮詢スルガ如キ是レナリ。又家憲ヲ以テ經費金ヲ定ムルニ當リ、或ル收入ヲ以テ經費金ニ充テ帝室ノ需要ヲ政府ノ收入ト分別スルハ尤モ必要ナルガ如シ。

皇族ノ「分料（アバナージ）」ニ關シテハ裁定ノ全權ヲ國王ニ與フルヲ例トス。是レ法律ヲ以テ經費金ヲ定ムルノ國ニ於テ亦然リトス、但シ此ノ「アバナージ」ノ事ハ別問題タルコト國王ノ私有財産ニ於ケルト同一ナリ。

一月廿八日

ハ、ロエスレル拜

七、同族婚姻ノ件

皇族及ビ貴族ハ必ラズ同族ノ者ト結婚セザル可ラズト謂ヘル規則ハ何等ノ理由アルヤ、高諭ヲ乞フ。

答

「エーベンブユールチヒカイト」(卽チ同等)トハ其ノ門地ノ等シキヲ指スコトニシテ、妻子ノ權利ノ充全ナラン爲ニハ門地ノ等シキヲ要スト云フコトナリ。故ニ例令ヘバ皇族ニシテ門地同ジカラザル婦人ト結婚センニ、此ノ婦ハ則チ「プリンツエスシン」(皇女)トナルヲ得ズ。而シテ其ノ子モ亦公子(プリンツ)ト稱スルヲ得ズ。皇族トシテ相續ノ權利ヲ有セズ。但シ此ノ如キ結婚者ハ固ヨリ正當ノ夫妻ニシテ、其ノ子モ亦正當ノ子ナリ。私生ノ子トシテ取扱ハル、ニハアラズ。唯ダ其ノ子ハ皇族ニ加ハラズ、皇位繼承ノ權利ヲ有セズ。皇族ノ財産ヲ相續セズ、公子タルノ稱號位階等ヲ有スルヲ得ザルナリ。

「エーベンブユルチヒカイト」ノ原則ハ自由ノ人ト不自由ノ人(奴隸)トノ間ノ結婚ハ充分ノ效力ナシト云ヘル往古ノ原則ニ出デタルモノナリ。往古ハ此ノ種類ノ異ナリタル夫妻ノ間ニ生ジタル子ハ同ジク不自由ナルモノトシ、其ノ父ヲ相續スルヲ得セシメズ、父ノ門地ヲ承クルヲ得ザルモノトセリ。此ノ原則後世ニ至テ其ノ他ノ門地ノ差異ニモ及ビ、卽チ貴族ト平民トノ結婚又ハ貴族中ニテモ其格ノ異ナル者ノ結婚ニモ此ノ原則ヲ及ボスコトトナレバ「エーベンブユルチヒカイト」ノ原則ハ一時擴張シテ此ノ如キ迄ニ至リシガ、近年復其ノ區域ヲ狹メ、僅カニ至高ノ門地、卽チ皇族間ニノミ限ルコトトナレリ。今日、實際ニ於テ低キ門地ノ者ト結婚セズトノ原則ハ猶ホ世ノ遵行スル所ナリト雖モ、法律上ノ原則トシテ羅馬法採用以來全ク消滅セリ。蓋シ羅馬法ハ全ク此ノ原則ヲ承認セザルナリ。獨逸ノ貴族ハ多クハ同等結婚ノ事ヲ其ノ家法ニ於テ定メタリ。又王ハ門地ノ同ジカラザルトキ一方ノ門地ヲ上ゲテ之ヲ同等ナラシムルノ權ヲ有シタリシガ、前世紀、卽チ千七百四十二年ニ貴族等王ヲシテ不當ノ結婚ニ此權利ヲ實行セシメザルコトヲ定メシメタリ。所謂不當ノ結婚トハ何ヲ指スベキヤトノコトニ付テハ當時既ニ種種ノ議論アリ、或ハ貴族ト平民、卽チ貴族ナラザル者ノ結婚ヲ不當ノ結婚ト云フト云ヘリ。習慣ニ於テハ婚姻ニ門地ノ同等ヲ要スルコト既ニ久シ、卽チ國君ノ后妃ハ皇族カ又ハ「スタンデスヘル」卽チ昔時獨逸帝國ノ頃一國ノ君主タリシ者、又ハ此レト同格ノ家ノ女ニ限ルコトトセリ。

外國ノ皇族、高貴族モ亦同ジ門地トス、位ヲ退ケラレタル皇族モ同ジク然リ。

不同等ノ結婚ハ血脈ヲ汚ガシ、貴族ノ體面並ニ其ノ利益ニ關ストノ推定ハ、則チ「エーベンブユルチヒカイト」ノ原則ニ基ク所ナリ。皇族ニ於テハ更ニ此ノ原則ヲ守ルニ依テ君主政體ノ原則ヲ鞏クスト云フノ說アリ。是レ皇族ヲ以テ全ク人民ト血脈上ノ關係ヲ絕チ、皇家ヲシテ自ラ人民ノ企及スベカラザル地位ニ置クガ故ナリ。次ニ又各國ノ皇族相互ニ結婚スルトキハ自ラ政治上ノ利益トナルコトアルナリ。「エーベンブユルチヒカイト」ノ原則ニ此等ノ利益アルハ卽チ其ノ法律上ニ於テ既ニ消滅シタルモ、猶ホ實際ニ於テ成ルベク遵奉セラルヽ所以ナリ。佛蘭西ニ於テモ英吉利ニ於テモ「エーベンブユルチヒカイト」ノ原則ハ法律上ニハ存セザルカト記憶セリ。近クハ奈破侖三世ノ如キ曾テ同等ナラザル婦人、卽チ「モンチヨ」女侯ト結婚シタリシガ、此ノ夫妻ノ間ニ生レタル奈破侖皇子ノ相續權ヲ疑フモノハアラザリキ。英國ニ於テ昔時ノ諸王ハ尋常貴族ト結婚シタルモノ少ナシトセズ。近時ニ至テモ此ノ諸國ニ於テハ別ニ非常ノ原因ナキ不同等ノ結婚ヲナスヲ得テ差支アルコトナシ。要スルニ近年ニ至テ一般ノ貴族ニハ法律上復タ「エーベンブユルチヒカイト」ノ原則アルコトナシ。唯ダ武官結婚ノ際、國王ノ認許ヲ乞フニ當テ其ノ婦甚ダ下賤ノ者ナルカ、又ハ不良ノ評アル者ナルトキ國王ニ於テ之ヲ拒ムノ權アルハ稍ヤ此ノ原則ノ殘存シテ間接ニ働クモノト云フベシ。

「エーベンブユルチヒカイト」ノ原則一般ノ貴族ノ爲ニハ、既ニ歐羅巴ノ諸國ニ於テ消滅シタル程ナレバ、之ヲ曾テ此ノ規則ノ存セザリシ國ニ採用セントスルノ無益タルハ固ヨリ論ヲ待タズ。蓋シ「エーベンブユルチヒカイト」ハ世財襲產ノ制ト共ニ存スルモノニシテ、共ニ家族ノ榮譽ヲ保護セントスルノ意ニ出デタルモノナリ。然レドモ社會門地ノ差等ハ今日ニ於テハ復タ法律上ノ等差タラザルガ故ニ、此ノ制度アルヲ要セズ。唯ダ君主ニ於テ結婚ヲ可否スル權アル場合ニ於テハ、判然タル卑賤者トノ結婚ヲ拒ムコトアルノミニテ足レリ。其ノ餘ハ凡テ貴族自己ノ感覺ニ任セテ可ナリ。若シ强テ政府ニ於テ此ノ事ニ干涉セントナラバ、世襲財產ニ於テ此ノ事ノ規則ヲ定メ、門地ニ不適當ナル夫妻ノ間ニ生レタル子ハ父方ノ親族ノ承諾ナクシテハ世襲財產ノ相續者タルヲ得ズトスルヲ得ベシ。然レドモ是レトテモ世襲財產創設者ノ隨意ニ任スベシ。

君主並ニ皇族ニモ「エーベンブユルチヒカイト」ヲ以テ必要ナリトハ云ヒ難シ。「エーベンブユルチヒカイト」ハ上ニ述ブル如ク、獨逸法律ノ一種ノ原則ニシテ、他ノ諸國ニ於テハ多ク政事上ノ原則トシテ視ル所ナリ。何レニシテモ此ノ原則ハ內部ノ國法ニ屬スルモノニシテ、萬國公法上ニハ其君主並ニ相續ノ「エーベンブユルチヒカイト」ナルト否トハ其ノ夫妻ノ其ノ國ノ法律又ハ皇家ノ家則ニ於テ正當ナル以上ハ問フベキ所ニアラズ。又皇子、皇女ノ結婚ハ君主其ノ

家長ノ權ヲ以テ之ヲ許否スルコト何レノ國モ同一ナレバ、「エーベンブユルチヒカイト」ノ法ヲ採用セズトモ、皇子、皇女ノ不釣合ノ結婚ハ國君其ノ家長タルノ權ヲ以テ之ヲ禁ズルヲ得ベク、又其ノ結婚ニ政事上ノ性質ヲ帶ビザラシムルコトモ充分ニ實行シ得ベシ。今各國皇家ノ家憲ヲ觀ルニ、國王ノ認許ヲ經ズシテ結婚シタルモノハ「エーベンブユルチヒカイト」ナラザル（不同等）結婚ト同一ノ不利ヲ受クベシト定メタルモノ多シ。君主自身ノ結婚モ亦家憲又ハ丁年以上ノ諸皇族ノ同意ヲ以テ之ヲ制限スルヲ得ベシ。太子其ノ他ノ諸皇子ノ結婚ハ君主ノ認許ヲ要ストスルコトヲ得ベシ。但シ其ノ之ヲ認許スベキ君主幼年ナルトキハ、例ヘバ顧問官ノ意見ヲ問フベシト定メンカ。

右千八百八十三年十一月十九日

ヘルマン、ロエスレル

八、王族分料ノ二ツノ方法ノ中何レガ便宜ナルヤ

王族ノ料金（アパナーデ）ハ或ハ國ニ於テハ王室ノ經費（チウイルリスト）ノ外ニ於テ之ヲ國庫ヨリ要求シ、或國ニ於テハ王室經費ノ内ニ包括シ、國王ヨリ各王族ニ分結ス（孛國ハ後ノ方法ニ依ル）。前ノ方法ニ從フ者ハ各王族ノ分料ヲ家憲ニ詳細ニ列記スルヲ必要トスト雖モ、後ノ方法ニ依ル者ハ各王族ノ分料ハ家憲ニ列記スルヲ要セズシテ王室ノ内規トシテ施行スルガ如シ。此ノ兩樣ノ方法ノ中、何レガ尤モ適當ニシテ且ツ實際ニ便宜ナル乎、貴下ノ意見ヲ垂示セラレンコトヲ望ム。

明治二十年一月廿九日

ロエスレル氏

井上毅

答

皇子、皇女ニ關シテ各國ニ行ハル、所ノ原則ハ、其ノ未丁年ノ間ハ兩親ノ費用ヨリ給養ヲ受ケ丁年ニ至リタル後、特ニ結婚ノ後ハ國庫ヨリ料金(アパナージ)ヲ受クベキコト是レナリ。

英國ニ於テハ時々國王ヨリ議院ニ此ノ定額ヲ諮詢シ其ノ承諾ヲ受クルモノトス。

佛國ニ於テハ往時ハ千七百九十年ノ勅令(デクレー)ヲ以テ英國ト同一ノ規定ヲ設ケ、「オレアン」家ノ時代ニ至リテモ千八百三十二年ノ法律ヲ以テ同一ニ規定セリ。但シ此ノ法律ノ異ナル所ハ次子以下ノ皇子、皇女ハ國王私有財産ノ不足スル場合ニ限リ、法律上定ムベキ料金ヲ受ケ、太子ハ常ニ百萬「フラン」ノ料金ヲ受ケ、其ノ婚姻シタル場合ニ於テ必要ナルトキハ、法律ヲ以テ增額スベキコト是レナリ。千八百五十二年ノ元老院決議ニ據レバ、皇子、皇女ハ總テ一億七千二百萬「フラン」ノ奉養(ドメシヨン)ヲ受クベキモノニシテ、此ノ金額ハ皇帝ノ勅令ヲ以テ配當ス。

普國ニ於テハ貴下ノ問ニ謂ヘル如ク此ノ料金ハ國王ノ經費中ニ包含セラルヽモノニシテ、其ノ額及ビ配當法ハ國王之ヲ定ム。

巴威爾ニ於テハ國王家憲ヲ以テ皇族料金ヲ定ムト雖モ、其ノ最上限、最下限ニ規定アリテ、卽チ十萬「グルテン」ヲ最上限トシ、宗系ノ皇子ハ婚姻ヲナスカ、或ハ婚姻前ニ宮殿(エタブリーシン)ヲ設クルノ差ニ因テ八萬「グルデン」或ハ六萬「グルデン」ヲ以テ最下限トシ、支系ニ在リテハ二萬「グルデン」ヲ最下限トス。若シ此ノ額ヲ以テ實際ニ不足スルトキハ國王之ヲ增額スルヲ得ベシ。太子ノ料金ハ其ノ都度特ニ確定スベク一切ノ皇族料金ハ國庫ノ支辨トス。

此ニ由テ之ヲ觀レバ、何レノ國ニ於テモ皇族料金ハ國庫ノ支辨トス。獨リ普國ニ於テハ國王ノ經費ヨリ支辨スベキヲ以テ、間接ニ國庫ノ支辨タリ。其ノ額ハ其ノ場合ニ當テ國王之ヲ確定スベシト雖モ、或ル國ニ於テハ立法院ノ承諾ヲ受ケ、或ハ家憲上一定ノ制限アルコト明カナリ。

皇族料金ト國王ノ經費トヲ混同スル普國制度ノ利益ハ、國庫ノ負擔タル皇族ノ奉養ハ常ニ一定ノ額ニ止マルト、皇子ノ人員僅少ナルトキニハ國王ノ經費ニ支出減少スルガ故ニ、容易ニ貯蓄ヲナスコトヲ得ルコト是レナリ。然レドモ他ノ一方ヨリ見レバ、皇子ノ人員一時增加シタルトキ、從テ國王分料不足ヲ告グルニ至ルベシ。此ノ場合ニ於テハ固ヨリ國王經費ノ總額ヲ增加スルノ道アリト雖モ、可成之ヲ實行セザルヲ可トス。拿破列翁時代ノ如ク總額ヲ以テ帝室ノ經費ヲ定メ、主權者ノ見込ヲ以テ之ヲ皇族間ニ配當スルハ、帝王ノ經費ニハ全ク義務ヲ負ハシメズ、又國庫ノ負擔ヲ永遠ニ一定スルノ利益アリ。予ハ此ノ制度ヲ尤モ可ナリト信ジ、且ツ各皇族ノ料金ニ關シテ最下限ヲ確定シテ其不足アル不レ得レ已場合ニハ國庫ヨリ補充セシメン

ト欲スルナリ。故ニ毎年國庫ヨリ皇子、皇女ノ奉養ノ爲メ一定ノ總額ヲ支出シ、又一定ノ標準ニ基イテ皇帝之ヲ皇族ノ間ニ配當シ、而シテ此ノ額ノ管理及ビ各皇子ニ給與スルハ宮内省ノ職掌ニ屬スベキナリ。若シ此ノ額ヲ以テシテ不足スルトキニハ政府ヨリ之ヲ補充シ、有餘アルトキニハ之ヲ蓄積シテ皇族ノ世襲資金（プリンツヘハイディコンミスフオン）ヲ貯ヘ其ノ收入ヲ皇子間ニ分配スベシ。

皇族料金ハ實ニ巨大ナル私有財産ヲ有スル歐洲諸王家ニ於テハ別ニ緊要ナルニ非ラズ。且ツ料金額モ過大ナラザルガ故ニ、間接ニ支系ノ王位繼承權ヲ認定スル方式ニ外ナラズ。此ノ巨大ナル私有財産ノ大部ヲ政府ノ所有物ヨリ分別スルニ基キ、或ハ婚姻又ハ財産相續ニ依テ得タルモノナリ。日本ニ於テハ全ク此レト關係ヲ異ニスルガ故ニ、歐洲各國ノ料金制度ヲ直輸スルヲ得ズ。普國ニ於ケルガ如ク皇族ノ世襲財産ヲ設ケテ、料金外ノ他ノ收入ヲ支系ノ爲ニ計畫スルヲ善シトスルガ如シ。故ニ予ノ陳述シタル考案ハ支系ニ關スル皇室ノ利益ヲナスト雖モ、亦帝室所有地（カムメルゲートシステーム）ノ制度ニ變遷スルヲ勸ムルニハ非ラズ。

皇族料金ハ或ハ純然タル一代限ノ物ニシテ、之ヲ受クル皇子ノ死去ト共ニ消滅スルアリ。或ハ系統ニ屬スルモノニシテ一定ノ最下限ヲ限極トシ、一系ノ全員ニ之ヲ分配シ、死去ノ場合ニ於テハ生存者ニ之ヲ贈與スルアリ、此ノ第二制度ハ巴威爾家憲第六章第六條ニ揭ゲタリ。普國ノ制度如何ハ予未ダ之ヲ知ラズ、一系統ニ於テ料金ヲ相續スル弊害ハ之ニ依テ皇族ノ間ニ不平均ヲ來タスコト、卽チ一系統ノ人員多クシテ他ノ系統ノ人員少ナキトキノ如キ是レナリ。然レドモ此ノ弊害ハ一系統ノ財産相續ニ依テ他ノ系統ニ傳移スルガ如キ時日ノ經過ニ從テ之ヲ除クコトヲ得ベシ。又國庫ニ就テモ此ノ制度ハ利益アリトスルノミナラズ、各系統ノ爲メ一定ノ收入ヲ安全ニシ、自家ノ財産ヲ貯蓄スルヲ得ルノ道ヲ開クヲ以テ支系ノ爲ニモ亦利益トナルベシ。純然タル一代限ノ料金制度ニハ此ノ安全アルコトナク、各個料金ノ消滅スル場合ニ於テハ皇族（プリンツ）ノ料金資額（リヘゲサムントアバナーゼンフオン）ニ有餘ヲ與フルニ過ギザルノミ。故ニ予ハ料金ノ相續法ヲ尤モ可ナリト信ズ。

要スルニ皇帝ハ國庫ヨリ支辨スベキ皇族料金ヲ處分スルノ權ヲ有スベシト雖モ、上陳ノ考案ヲ參酌シ、此レニ關スル家憲上ノ規定ヲ設ケテ以テ支系ノ財産ニ法律上ノ標準ヲ與フルヲ可ナリトス。

二月二日

ハ、ロエスレル拜

九、攝政參議ノ件

共同攝政ハ王國ノ主義ニ乖クコトハ各著述家ノ論ニ具ハリタリ。抑モ攝政參議モ亦共同攝政ト同ジク王國立憲ノ取ラザルベキ所ナルヤ如何、又實際ノ便宜ニ於テ攝政ノ場合ニハ攝政參議ヲ置クノ必要アリヤ。乞教。

二月五日

ロエスレル貴下

井上毅

答

共同攝政ノ制ハ主權ヲ數人ニ分割スル意義ニ於テハ予モ亦固ヨリ立憲制ニ背クモノナリト信ズ。何トナレバ立憲ノ主義ニ從ヘバ國權ハ分割スベカラザルモノニシテ、主權ハ國王ノ一身ニ集合スベキモノナレバナリ。然レドモ或ル政務ニ關シテ國王ヲ代理スルノミニ止マリ、且ツ主權者ニ從屬スル意義ニ於ケル共同攝政ハ必ラズシモ排斥スベキモノニ非ラズ。又往々見ル所ナリ。例ヘバ普國ノ現王ハ已ニ高年ニ達シ、病患ニ侵サレシ間ハ暫時太子ニ政務ヲ委ネタリ。是レ攝政トシテ委ネタルニ非ラズ、只ダ常務ヲ代理セシメタルニ過ギズ。又主權者ニシテ外國ニ旅行シ、或ハ出陣シ、或ハ急病ニ罹カル等ノ場合ハ勿論、或ル事務ニ關シテモ亦代理ヲナサシムヲ得ベシ。例ヘバ議院ヲ開キ、公使ヲ待遇スルガ如キ是レナリ。凡テ此等ノ場合ニ於テハ代理ノ名義ヲ以テスルモ十分ナルガ故ニ、共同攝政ノ名義ヲ避クルヲ可ナリトス。

攝政參議ノ制モ亦予ハ不可ナリト信ズ。此ノ制ハ巴威爾、撒遜、瓦敦堡及ビ其ノ他ノ獨逸諸國ニハ行ハル、モ普國ニ於テアルコトナシ。

通例內閣ヲ以テ攝政參議ニ充テ、凡百ノ政務ニ於テ意見ヲ陳ブベキガ故ニ、各省大臣ハ其ノ主管事務ノ職權ヲ制限セラル、ニ過ギズ。凡ソ攝政ハ凡テ國王ノ歸スル所ノ權理ヲ執行スベキノ任ニ當ル者ナルニ、更ニ一定ノ監督ヲ受ケ、國王ノ權限ヲ薄弱ナラシメ、却テ內閣ノ權限ヲ增長スルノ理ナシ。況ンヤ攝政ハ通例王位繼承者ニシテ、一時國王ノ名ヲ以テ政務ヲ執ルヲ

內閣ヲ以テ攝政參議ヲ兼ル故ニ攝政ヲ制束シ又各省ノ權ヲ制限スルヲ云フ

ヤ。

然レドモ過日卑見ヲ陳ベタル如ク、憲法改正等ノ如キ重大ノ事件ニ關シテ、攝政ノ權利ヲ制限スルハ不可ナルコトナシ。元來攝政ナル者ハ一時政務ヲ執ル者ナルガ故、其ノ間ニ於テ國家ノ根本ヲ變更セシメザルハ理由アリトス。

二月八日　ハ、ロエスレル拜

十、皇有財産課税ノ件

官有地並ニ帝室常産（クローンビデーコミス）ニハ獨逸ニ於テハ總テ税ヲ課セズト聞ケリ。果シテ然リヤ。佛國ニ於テハ官林ニ縣税ヲ課ス、又露國ノ如キハ國税及ビ地方税ヲ課スト聞ケリ。抑モ國税ヲ官有又ハ皇有地ニ課セザルハ道理ニモ適シ、又實際ニ妨ゲナシ。地方税ハ此レニ反シ今一村アランニ、其中皇有地其ノ大部分ヲ占メタリト假定センニ、若シ其ノ村路ヲ修復スルニ當テ、皇有地ハ道路税ヲ課セザルモノトセバ其ノ結果ハ他ノ村民ノ賦課ヲ重クセザルコトヲ得ズ。此ノ事ノ當否ニ付貴下ノ教ヲ煩ス。

答　井上毅

公有財産（ヲエツフエントツツヘ）ニ租税ヲ賦課スル事ニ關シテハ獨逸諸國一定ノ規定ナシ。

第一　政府ニ屬スル地所ハ獨逸國中地租ヲ免ズルモノ多シトス。卽チ普國ノ如キ其ノ一ナリ。（一千八百六十一年ノ地税規則第四條）。然レドモ巴威爾國ニ於テハ通例地税ヲ免ゼズ。或ハ借地人ヨリ其ノ税ヲ拂ヒ、或ハ貸付ザル地所ニ在リテハ實際徴收スルコトナク、只ダ帳簿上ニ於テ收入ノ部ニ記入スルノミ。

政府ノ有ニ歸スル建築物（ゲボイテ）ハ公開ニ供シタル時ニ限リ家屋税ヲ免ズ。（一千八百六十一年ノ家屋

税規則第三條)。

營業税及ビ營業ニ據テ課スル間税ニ至テハ、經濟上競爭ヲ重ズルノ點ヨリシテ官有物ニ之ヲ課スルコト私有物ニ於ケルト同一ナリ。

地方税(コムモナールアブガーベン)(按ズルニ地方團結體、卽チ町村等ヨリ賦課スル税)ハ官有物ニ賦課スルヲ例トス。(一千八百五十三年普國市街規則第三條一千八百十九年ノ巴威爾ノ町村税規則第二條第三項)、然レドモ收入ナキ或ハ公用ニ供シタル建築物ハ税ヲ免ズルモノトス。官有ノ森林、湖海、山岳等ニ地方税ヲ負擔セシムルノ程度ハ別段ノ契約ヲ以テ之ヲ定ムベキナリ。

收入税ハ官有物ノ收入ニ賦課セザルヲ例トス。

第二　皇有地(カムメルギューテル)、卽チ皇族ノ有ニ歸スル地所ニ關シテ論ゼンニ、主權者ハ一般ニ一モ國税ヲ納メズ、何トナレバ納税義務ハ臣下ノ義務ナレバナリ。

一千八百六十一年ノ普國地税規則ニ於テハ、皇族ノ所有地ヲ免税地ノ中ニ列記セズ。皇族ガ地税ヲ納ムルハ往時ヨリ由來セル地税特免ノ制ヲ廢止シタルノ結果ナリ。但シ之ガ爲ニ賠償金ヲ受ケタルハ勿論ナリ。

然レドモ國王ニ屬スル宮殿、皇族所有ノ建築物ニ家屋税ヲ賦課セザルハ今日ト雖モ尙ホ往時ニ異ナラズ。

營業税及ビ間税ハ國王ノ有ニ歸スルト、皇族ノ有ニ歸スルトヲ問ハズ、所有地ヨリ之ヲ拂ハザルベカラズ。

地方税ハ國税ヲ免ズルモノニ限リ、皇有地ニ之ヲ賦課セザルヲ例トス。卽チ其免税ニ屬スルモノハ國王及ビ皇族宮殿及ビ庭園其ノ他一モ收入ナキ地所是レナリ。

皇有一般ノ租税ニ關スル特權ハ身上税特ニ收入税ヲ免ズルニ在リ、故ニ皇族ハ又地方ノ收入税或ハ政府收入ノ附加トシテ徵收スル所ノ地方税ヲ免ゼラルヽモノナリ。

國王年金及ビ之ニ附屬スル公園等ハ國税ハ勿論地方税モ之ヲ拂フヲ要セザルナリ。

二月十四日

ハ、ロエスレル拜

皇族令修正案

明治廿二年七月

第一章　制規

第一條　皇族ノ列次ハ皇位繼承ノ順序ニ依ル、內親王、女王ハ男子ノ順序ニ準ジ、妃ハ其ノ夫ノ身位ニ從フ、若シ疑義ニ涉ルコトアルトキハ皇族會議ニ諮詢シテ之ヲ勅定ス。

第二條　皇族ノ繼承ハ男系ノ男子ニ限ル、但シ嫡長ヲ先ニシ庶幼ヲ後ニス。

第三條　皇族ハ勅許ヲ得ルニ非ザレバ別居シ又ハ一家ヲ建ルコトヲ得ズ。

第四條　皇族成年ニ達シタルトキハ皇室典範及ビ皇族令ヲ遵守シ天皇ニ忠順ニシテ帝國ニ義務ヲ盡スベキ旨ヲ宣誓スベシ。

第五條　皇后、皇太子妃、皇太孫妃ハ皇族又ハ之ヲ出セシ先例アル公侯ノ家ヨリ選立ス、其ノ他皇族ノ嫁娶ハ皇族又ハ華族ニ限ル。

第六條　皇族ノ徽章ハ各皇室菊花章ノ樣式ヲ斟酌シ、勅許ヲ經テ之ヲ定ム。

第七條　皇族勳章受佩ノ制規ハ別ニ定ムル所ニ依ル。

第八條　皇族男子ノ禮服及ビ皇族旗ハ別ニ定ムル所ニ依ル。

第九條　皇族ノ受クベキ禮砲及ビ儀仗兵ハ別ニ定ムル所ニ依ル。

第十條　皇族ノ婚儀及ビ葬儀ハ別ニ定ムル所ニ依ル。

第十一條　皇族其ノ家則ヲ設クルトキハ勅許ヲ經ベシ。

第十二條　皇族家職ノ制規ハ別ニ定ムル所ニ依ル。

第十三條　皇族ノ名ニ仁ノ字ヲ用フルハ今後親王ニ限ル。

第二章　牒籍

第十四條　皇族牒籍ハ皇位繼承ノ順序及ビ皇族ノ身上ニ關スル事件ヲ登錄ス、若シ疑義ニ涉ルコトアルトキハ皇族會議ニ諮詢シテ之ヲ勅定ス。

第十五條　皇族牒籍ハ毎年一月一日ノ現狀ニ依リ宮內大臣之ヲ訂正シ、勅定ノ後圖書寮ニ付シ

テ尙藏セシム。

第十六條　皇族ノ誕生、命名、婚姻、薨去、離緣ハ直ニ最近親ノ皇族ヨリ其ノ事件ヲ錄シ手署上奏ス、上奏書ニハ他ノ皇族一名以上連署スベシ。

第十七條　皇族誕生又ハ薨去ノトキハ勅使及ビ侍醫ヲシテ臨檢セシメ其ノ現況ヲ錄シ連署復命セシム。

第三章　會議

第十八條　皇族會議議員ハ勅召ニヨリ集會ス、但シ會議ノ事件ニ當該スル者及ビ其ノ父子兄弟ハ勅召ノ限ニ在ラズ。

第十九條　議案ヲ辯明セシムルタメ委員ヲ勅選シ皇族會議ニ出席セシムルコトアルベシ、但シ決議ノ數ニ加ヘズ。

第二十條　皇族會議ノ書記官ハ宮內省高等官ヨリ勅選ス。

第二十一條　議事規則ハ別ニ之ヲ定ム。

第四章　財産

第二十二條　皇族財産ハ分テ世傳財産ト私有財産トナス。

第二十三條　世傳財産ハ左ノ三類トシ、勅許ヲ經テ之ヲ定ム。

第一類　祖先遺傳其他貴重ノ物品。

第二類　不動産。

第三類　公債證書又ハ政府ノ特別監督ニ屬スル銀行若クハ會社ノ株券。

第二十四條　前條ノ第三類抽籤ニ當リ又ハ解社等ニ由リ收入シタル金ハ其額ニ相當スル不動産又ハ公債證書又ハ政府ノ特別監督ニ屬スル銀行若クハ會社ノ株券ヲ買收シテ之ヲ補充スベシ

第二十五條　皇族本住ノ宮殿地所及ビ世傳財産ハ宮內大臣ヨリ之ヲ公告ス。

第二十六條　皇族本住ノ宮殿、地所及ビ世傳財産ハ負債ノ抵當ト爲シ、又ハ分割讓與スルコトヲ得ズ、但シ親王別居シ又ハ諸王一家ヲ建ツル者ハ勅許ヲ經テ之ヲ分割スルコトヲ得。

第二十七條　皇族薨去シ繼承者ナキトキハ其世傳財産ハ皇室ニ歸ス。

第二十八條　私有財産ハ普通ノ法規ニ從ヒ之ヲ處分ス、但シ皇族薨去シ繼承者ナク又證憑アル

遺命ナキトキハ其遺留財産ハ皇室ニ歸ス。

第五章　歳費

第二十九條　太皇太后ハ歳費〇〇圓トス。

第三十條　皇太后ハ歳費〇〇圓トス。

第三十一條　皇后ハ歳費〇〇〇圓トス。

第三十二條　皇太子、皇太孫未成年ノ間ハ歳費六萬圓、成年ノ後ハ十萬圓、妃ハ五萬圓トス。

第三十三條　皇太子妃、皇太孫妃寡居ノ後ハ歳費三萬圓トス。

第三十四條　皇太子、皇太孫、皇后ノ外、攝政タル者ニハ特ニ歳費三萬圓ヲ賜フ。

第三十五條　皇子未成年ノ間ハ歳費左ノ如シ。

但シ別居者ニハ各一萬圓ヲ增加ス。

〇〇圓　嫡出皇子

〇〇圓　庶出皇子

第三十六條　皇子成年ノ後ハ歳費左ノ如シ、但シ別居者ニハ各一萬圓ヲ增加ス。

〇〇圓　嫡出皇子

〇〇圓　庶出皇子

第三十七條　皇女未成年ノ間ハ歳費左ノ如シ、但シ別居者ニハ各五千圓ヲ增加ス。

〇〇圓　嫡出皇長女

〇〇圓　嫡出皇女

〇〇圓　庶出皇女

第三十八條　皇女成年ノ後ハ歳費左ノ如シ、但シ別居者ニハ各〇〇圓ヲ增加ス。

〇〇圓　嫡出皇長女

〇〇圓　嫡出皇女

〇〇圓　庶出皇女

第三十九條　皇女出嫁ノ後ハ歳費左ノ如シ、但シ妃ト爲リ其歳費減ズル場合ニ於テハ仍ホ本條ニ依ル。

〇〇圓　嫡出皇長女

〇〇圓　嫡出皇女

〇〇圓　庶出皇女

第四十條　皇子ノ外別居ノ親王未成年ノ間ハ歳費左ノ如シ。

○○圓　嫡出皇孫
○○圓　庶出皇孫
○○圓　嫡出皇曾孫
○○圓　庶出皇曾孫
○○圓　嫡出皇玄孫
○○圓　庶出皇玄孫

第四十一條　皇子ノ外別居ノ親王成年ノ後ハ歳費左ノ如シ。

○○圓　嫡出皇孫
○○圓　庶出皇孫
○○圓　嫡出皇曾孫
○○圓　庶出皇曾孫
○○圓　嫡出皇玄孫
○○圓　庶出皇玄孫

第四十二條　親王妃ハ歳費左ノ如シ。

○○圓　皇子妃
○○圓　皇孫妃
○○圓　皇曾孫妃
○○圓　皇玄孫妃

第四十三條　親王ノ嗣子成年ノ後ハ歳費左ノ如シ。

○○圓　皇子嫡出嗣子
○○圓　皇子庶出嗣子
○○圓　皇孫嫡出嗣子
○○圓　皇孫庶出嗣子
○○圓　皇曾孫嫡出嗣子
○○圓　皇曾孫庶出嗣子
○○圓　皇玄孫嗣子

第四十四條　家主タル諸王未成年ノ間ハ歳費左ノ如シ。

○○圓　五世以下十世
○○圓　十一世以下二十世

○　○　圓　二十一世以下

第四十五條　家主タル諸王成年ノ後ハ歳費左ノ如シ。

○　○　圓　五世以下十世

○　○　圓　十一世以下二十世

○　○　圓　二十一世以下

第四十六條　家主タル諸王妃ハ歳費左ノ如シ。

○　○　圓　五世以下十世

○　○　圓　十一世以下二十世

○　○　圓　二十一世以下

第四十七條　諸王ノ嗣子成年ノ後ハ歳費左ノ如シ。

○　○　圓　五世以下十世嗣子

○　○　圓　十一世以下二十世嗣子

○　○　圓　二十一世以下嗣子

第四十八條　親王、諸王ノ妃寡居ノ後ハ歳費ノ半額ヲ減ズ、但シ別居ニシテ繼承者ナキトキハ別ニ其夫ノ歳費三分ノ一ヲ賜フ。

第四十九條　支系ヨリ入テ大統ヲ承ケタル天皇ノ皇兄弟姉妹ハ皇子、皇女ノ歳費ヲ賜フ。

第五十條　別居ノ親王及ビ家主タル諸王ニ其歳費ノ一部又ハ全部ニ相當スル收入ヲ得ベキ世傳財産ヲ賜フコトアルベシ、其一部ヲ賜フ者ニハ其不足相當ノ歳費ヲ補賜ス。

第五十一條　本令規定外ノ皇族ニハ總テ歳費ヲ賜フコトナシ、但シ其情狀ニヨリ特ニ扶助料ヲ賜フコトアルベシ。

第六章　諸　給

第五十二條　親王別居スルトキハ皇室附屬ノ宮邸ニ住ス、但シ相當ノ宮邸ヲ賜ヒ又ハ其建設費ヲ賜フコトアルベシ。

第五十三條　諸王一家ヲ建ツルトキハ宮邸建設費ヲ賜フ。

第五十四條　皇族女子出嫁スルトキハ嫁資ヲ賜フコト左ノ如シ。

○　○　圓　嫡出皇長女

○　○　圓　嫡出皇女

○　○　圓　庶出皇女

○○圓　嫡出皇孫女
○○圓　庶出皇孫女
○○圓　嫡出皇曾孫女
○○圓　庶出皇曾孫女
○○圓　嫡出皇玄孫女
○○圓　庶出皇玄孫女

第七章　懲戒

第五十五條　皇族其品位ヲ辱シメ又ハ皇室ニ對シ忠順ヲ缺クノ行爲アルトキハ委員ヲ勅選シ事情ヲ審理セシメ、皇族會議ニ諮詢シタル後勅旨ヲ以テ之ヲ懲戒ス。

第五十六條　懲戒ヲ分テ左ノ三種トス。

一、謹慎
二、停權
三、剝權

第五十七條　謹慎ハ後來ヲ訓戒シ十日以上一年以内其邸内ニ於テ謹慎セシム。

第五十八條　停權ハ皇族ニ屬スル特權ノ一部又ハ全部ヲ停止ス、但シ一部停止ノ場合ニ於テ歲費ヲ受クルノ權ヲ停止スルハ其額十分一以上十分五以内タルベシ。

第五十九條　剝權ハ皇族ニ屬スル特權ノ一部又ハ全部ヲ剝奪ス、但シ一部ノ剝奪ノ場合ニ於テ歲費ヲ受クルノ權ヲ剝奪スルハ十分二以上十分六以内タルベシ、又全部剝奪ノ場合ニ於テハ皇族ノ班列ヲ除クモノトス。

第六十條　停權ノ場合ニ於テハ三月以上五年以内指定シタル邸内ニ閉居セシメ、又ハ指定シタル地域内ニ居住セシムルコトアルベシ。

剝權ノ場合ニ於テハ五年以上ノ期限ヲ定メ又ハ終身前項ノ處分ヲ爲スコトアルベシ。

第六十一條　懲戒處分ヲ受ケ改悛ノ狀顯著ナルトキハ皇族會議ニ諮詢シタル後其懲戒處分ノ一部ヲ減免シ又ハ全部ヲ免ズルコトアルベシ。

第八章　補則

第六十二條　現ニ親王ノ號ヲ宣賜セラレタル者ノ列次ハ明治二十二年二月十一日ノ特令ニ依

ル。

第六十三條　現ニ親王ノ號ニ宣賜セラレタル者及ビ其妃ニ限リ特ニ歳費ヲ賜フコト左ノ如シ。

○○圓　熾仁親王
○○圓　熾仁親王妃
○○圓　威仁親王（熾仁親王繼嗣）

以上庶出皇曾孫及ビ其妃嗣子ノ例ニ準ズ。

○○圓　晃親王
○○圓　彰仁親王
○○圓　彰仁親王妃
○○圓　依仁親王（彰仁親王繼嗣）
○○圓　貞愛親王
○○圓　貞愛親王妃
○○圓　故邦家親王妃
○○圓　朝彦親王
○○圓　能久親王

○○圓　能久親王妃
○○圓　載仁親王
○○圓　故博經親王妃

以上庶出皇玄孫及ビ其妃寡居ノ妃成年嗣子ノ例ニ準ズ。

第六十四條　本令施行ノ細則ハ宮内大臣之ヲ定ムベシ。

第六十五條　將來本令ノ條項ヲ改正シ又ハ增補スベキノ必要アルニ當テハ皇族會議及ビ樞密顧問ニ諮詢シテ之ヲ勅定スベシ。

喪紀令案

二十二年五月八日

一、喪紀ヲ分テ三款トナス、一ヲ國喪トシ、二ヲ宮中喪トシ、三ヲ通常喪トス。

一、國喪ハ天皇及ビ太皇太后、皇后、皇太子、皇太孫、皇伯叔父姑、皇兄弟姉妹、皇子、皇女並ニ皇太子ノ妃、皇太孫ノ妃ノ喪ノ爲ニ國民之ニ服スルヲ謂フ。

一、宮中喪ハ天皇ノ皇族及ビ外國皇室ニ對シ發セラル、喪ノ爲ニ皇族及ビ文武官員、有爵、有位、有勳ノ者之ニ服スルヲ謂フ。

通常喪ハ皇族以下文武官員、有爵、有位、有勳ノ者、其ノ親族ニ對スル喪ノ爲ニ服スルヲ謂フ。

第一款　國喪

第一條

國喪ヲ分ツテ四等トス。

第一等

天皇　五十日　前期十四日　後期三十六日

第二等

太皇太后
皇太后
皇后　三十日　前期七日　後期二十三日

第三等

皇太子
皇太孫　二十日　前期五日　後期十五日

第四等

皇伯叔父姑
皇兄弟姉妹
皇子女　十日　前期三日
皇太子妃
皇太孫妃　後期七日

第二條

各等前期廢朝。

第三條

第二等以上葬儀執行ノ當日ハ官廳休務、第三等以下ハ其ノ地方ニアル官廳ニ限リ休務。

第四條

各等全期死刑ノ執行ヲ停ム。

第五條

各等前期國中ノ歌舞、音曲、諸興行等ヲ停メ、其ノ營業ニアラザルモノハ各等全期仍ホ之ヲ停ム。

第六條

歌舞、音曲、諸興行等ヲ停ムルコト第五條ノ如シト雖モ、葬儀執行ノ地方ニ於テハ既ニ前期ヲ終フルコトアルモ其ノ葬儀當日マデ仍ホ之ヲ停ム。

第七條

七歳未滿ノ殤ノ爲ニハ國喪ヲ發セズ、但シ葬儀執行ノ當日ハ其ノ地方ニ限リ歌舞、音曲、諸興行等ヲ停ム。

第八條

喪期日數ハ發喪公布ノ當日ヨリ計算シ、懸隔ノ地方ニ於テハ公布到達ノ日ヨリ計算ス、但シ最初日ハ時間ニ拘ハラズ其ノ日ノ午後十二時マデヲ一日ト算シ、最後日ハ午後十二時ニ終ル。

第九條

兩喪相重ナルトキハ其重キニ從フ、例ヘバ、

甲喪前期七日ノ中既ニ五日ヲ過ギ、乙喪ノ前期五日ニ遭フトキハ其ノ當日ヨリ乙喪ノ前期ヲ畢ヘ、剩ル甲喪日數ニ服ス、若シ甲喪後期中乙喪ニ遭フトキハ、先ヅ乙喪ノ前期ヲ畢ヘ然シテ甲喪後期ノ剩ル數ト乙喪後期ノ日數トヲ比較シ、其ノ長キ方ニ服ス。

第十條

第十一條、第十二條中國喪ヲ發セラレザル者ノ喪ト雖モ、葬儀執行ノ當日ハ其ノ地方ニ限リ歌舞、音曲、諸興行ヲ停ム。

第二款　宮中喪

第十一條

宮中喪ヲ分ツテ七等トス。

第一等　一週年

一期　二十五日
二期　二十五日
三期　三百十五日

天皇
皇太后

第二等

一期　二十日
二期　十五日
三期　百四十五日

『舊服九十日、茲ニ第二等ヲ進ム』

皇后

『……』ハ朱書、以下之レニ倣フ

第三等

一期　十五日
二期　十五日
三期　百二十日

百八十日

百五十日

太皇太后
皇太子
皇太孫

『舊服九十日、茲ニ一等ヲ進ム』

第四等

一期　十日
二期　十日
三期　七十日

九十日

皇曾祖母
皇曾祖父母
皇伯叔父姑
皇兄弟姉妹
皇子
皇太子妃
皇太孫妃

『舊服三十日、茲ニ一等ヲ進ム』
『補』
『補』

第五等

一期　十日
二期　十日

三十日

皇高祖母
皇舅姨
皇甥姪
皇孫
皇后ノ父母

『大寶令、姪ハ二等親ニ位ス英國ノ法ニ姪ト結婚スルコトヲ得ズ』

『舊服七日、茲ニ一等ヲ進ム』
『舊服七日、茲ニ一等ヲ進ム』
『補』

第六等

七日 一期三日 二期四日

皇外曾祖父母
皇曾孫
皇外孫
皇從父兄弟姉妹
皇子妃

『舊服遠慮一日、茲ニ二等ヲ進ム』
『補』

第七等

三日

皇太伯叔父姑
皇外高祖父母
皇玄孫
皇舅姨ノ子
皇兄弟ノ妃
皇伯叔母
皇后ノ兄弟姉妹
七歲未滿ノ儲嗣タル皇子孫

『補』
『舊服遠慮一日、茲ニ一等ヲ進ム』
『舊服七日、茲ニ一等ヲ下ス』
『舊服七日、茲ニ一等ヲ下ス』
『補』
『補』
『補』
『補』

第十二條

第十一條ノ外四世以上ノ親王及ビ內親王幷ニ五世以下親王ノ號ヲ宣賜セラレタル皇族ノ爲ニ宮中喪ヲ發セラルヽコトアルトキハ左ノ如シ。

二　日

第十三條

皇族ノ臣籍ニ嫁シタル者又ハ皇族外ノ親及ビ七歳未滿ノ者ノ爲ニハ喪ヲ發セズ。

第十四條

外國ノ皇帝皇族又ハ大勳位ヲ有スル戴冠ノ國主及ビ其ノ妃ノ爲ニ宮中喪ヲ發セラルヽコトアルトキハ左ノ如シ。

二十一日（一期）〜（二期）十一日

十四日（一期）〜（二期）七日

十二日（一期）〜（二期）六日

七日（一期）〜（二期）四日

三日（一期）〜（二期）三日

第十五條

宮中喪第一等、第二等、第三等、第四等ヲ重喪トシ、第五等、第六等ヲ輕喪トシ、第七等及ビ第十二條ノ喪ヲ心喪トス。

第十六條

重喪ニハ各等全期文武官員、有爵、有位、有勳ノ者之ニ服ス。

第十七條

輕喪ノ各等一期ハ文武官員、有爵、有位、有勳ノ者惣テ之ニ服シ、二期ハ勅任官以上、從三位、勳三等以上及ビ宮内奏任官、近衞將校、有爵者、公使、領事館在勤ノ者之ニ服ス。

第十八條

第十四條ノ喪及ビ心喪ニハ宮内奏任官以上、近衛將校之ニ服ス。

第十九條

宮中喪ニ服スルモノ重喪ニハ各等全期、輕喪ニハ各等一期祝宴、歌舞、音曲等ヲ爲シ又ハ其ノ席ニ臨ムヲ停ム。但シ第十四條ノ喪ニハ全期仍ホ之ヲ停ム。

第二十條

喪期日數ヲ計算スルハ第八條ニ依ル。

第二十一條

兩喪相重ナルトキハ第九條ニ依ル。

第二十二條

重喪ニハ二期、輕喪及ビ第十四條ノ喪ニハ一期ヲ除ク外祭儀等缺ク可カラザルコトアルトキハ其ノ執行ノ間特ニ除喪セラルヽコトアルベシ。

第二十三條

服裝左ノ如シ。

男子

文官及ビ有爵、有位者大禮服（上衣下衣及ビ袴同色）

第一期

一、黑紗ヲ左腕ニ纏フ。
一、黑紗ヲ以テ帽ノ飾章ヲ覆フ。
一、黑紗ヲ以テ劒ノ緒ヲ卷ク。
一、襟飾　白。
一、手套　黑。

第二期

一、黒紗ヲ左腕ニ纏フ。
一、黒紗ヲ以テ劔ノ緒ヲ卷ク。
一、襟飾　白。
一、手套　黒。

第三期

一、黒紗ヲ左腕ニ纏フ。
一、襟飾　白。
一、手套鼠色又ハ白。
宮内官員ノ小禮服之ニ準ズ、但シ乘馬ノ時ハ袴白又ハ鼠色ノ手套ヲ用フルコトアルベシ。

通常禮服（上衣下衣同色）

第一期

一、黒紗ヲ左腕ニ纏フ。
一、帽黒羅紗ヲ以テ之ヲ卷ク。
一、襟飾　白。
一、手套　黒。

第二期

一、黒紗ヲ左腕ニ纏フ。
一、襟飾　白。
一、手套　黒。

第三期

一、黒紗ヲ左腕ニ纏フ。
一、襟飾　白。

一、手套鼠色又ハ白。

通常服

第一期

一、上衣下衣及ビ袴黑羅紗。
一、帽黑黑羅紗ヲ以テ之ヲ卷ク。
一、襟飾　黑。
一、手套　黑。

第二期

一、上衣下衣及ビ袴黑羅紗。
一、帽黑黑羅紗ヲ以テ之ヲ卷ク。
一、襟飾　黑。
一、手套黑又ハ鼠色。

第三期

一、黑羅紗ヲ以テ帽ヲ卷ク。
一、襟飾　黑。
以上靴ハ黑半靴ニハ黑又ハ鼠色ノ足袋ヲ用フ。

陸軍正裝及ビ禮裝
海軍大禮服及ビ禮服

第一期

一、黑紗ヲ左腕ニ纏フ。
一、黑紗ヲ以テ肩章ヲ覆フ。
一、黑紗ヲ以テ劍ノ緒ヲ卷ク。

第二期

一、黑紗ヲ左腕ニ纏フ。

一、黒紗ヲ以テ劍ノ緒ヲ卷ク。

第三期

一、黒紗ヲ左腕ニ纏フ。

陸軍軍裝及ビ通常禮裝略裝
海軍正服及ビ常服

全期

黒紗ヲ左腕ニ纏フ。

下士官ハ喪期服制ノ別ナク黒紗ヲ左腕ニ纏フ。但シ兵卒ハ喪章ヲ付セズ。

職務上帶劍ノ制アル正服及ビ通常禮服ニ換用スル服(警察官、司獄官等ノ服制ヲ指ス)

第一期

一、黒紗ヲ左腕ニ纏フ。

一、黒紗ヲ以テ劍ノ緒ヲ卷ク。

第二朝

一、黒紗ヲ左腕ニ纏フ。

第三期

一、第二期ニ同ジ。

職務上帶劍ノ制アル略服。

全期

黒紗ヲ左腕ニ纏フ。

判任官ハ喪期服制ノ別ナク黒紗ヲ左腕ニ纏フ。但シ等外吏ハ喪章ヲ付セズ。

婦人

袴袴ヲ用フルトキ。

第一期

一、髪　垂髪鬢ヲ引ク。
一、元結　白。
一、素服　白布。
一、袴　布黒橡。
一、袴　布柑子色。
一、扇　ボンボリ黒骨鈍色地。
一、手套傘ノ類ヲ用フルコトアルトキハ惣テ黒。
一、靴ヲ用フルコトアルトキハ柑子色又ハ黒。

第二期

一、素服ヲ除ク外第一期ニ同ジ。

第三期

一、髪　垂髪。
一、元結　白。
一、袴　生絹鈍色。
一、袴　生絹萱草色。
一、扇　ボンボリ黒骨鈍色地。
一、手套黒又ハ鼠色。
一、靴ヲ用フルコトアルトキハ萱草色又ハ黒。

西洋服ヲ用フルトキ。

第一期

一、服地ハ黒ノ毛織、其飾ハ黒ノ縮紗。
一、帽ハ黒ノ縮紗ヲ以テ造リ其一條ヲ帽ヨリ長ク背後ニ垂ル。
一、手套　黒。

一、飾具黑。
一、扇傘ノ類惣テ黑。
一、靴黑、半靴ニハ黑ノ足袋。

第二期

一、帽ヨリ背後ニ垂ル黑ノ縮紗ヲ少シク短縮スルノ外惣テ第一期ニ同ジ。

第三期

一、服地及ビ飾ハ黑ノ無地。
一、帽ハ黑其飾ハ黑又ハ白。
一、手套ハ黑又ハ鼠色。
一、靴ハ黑。

第二十四條

服裝惣テ第二十三條ノ如ク定ムト雖モ、判任官（傭等外吏ヲ除ク）七位、勳七等以下及ビ宮內

省傭等外吏（皇宮警手ヲ除ク）ハ服製服色ヲ問ハズ左腕ニ黑紗ヲ纏ヒ黑ノ襟飾ヲ用フルノミニテ妨ゲナシ。

第二十五條

輕喪及ビ第十四條ノ喪ニハ第二十三條ノ二期服ヲ一期ノ服ニ充テ、三期ノ服ヲ二期ノ服ニ充ツ但シ輕喪及ビ第十四條ノ喪ニ婦人西洋服ヲ着スルトキ服地ハ黑ノ無地ヲ用ヒ、且ツ帽ヨリ背後ニ垂ル、縮紗ヲ除ク。

第二十六條

心喪及ビ第十四條三日ノ喪ハ服裝ハ第二十三條三期ノ服ヲ以テ之ニ充ツ。

第二十七條

宮中喪ニ服セザル者參內スルトキハ第二十三條ニ掲グル定規ノ喪服ヲ用フベシ。

第二十八條

葬儀執行ノ當日參列ノ者重喪ニハ第二十三條一期ノ服ヲ用ヒ輕喪及ビ心喪ニハ同條二期ノ服ヲ用フベシ。

第二十九條

帝室旗ヲ掲標スル左ノ如シ。

第一期

一、掲旗ノ位置ハ竿頭ヨリ下スコト五分（中央）。

一、黑紗ヲ以テ竿ヲ卷ク。

一、黑紗ヲ旗ノ上部ニ付ス、其長サ旗ニ均シ。

第二期

一、掲旗ノ位置ハ竿頭ヲ下スコト三分餘ハ第一期ニ同ジ。

第三期

一、掲旗ノ位置ハ竿頭ヲ下スコト二分、竿ヲ卷クノ黑紗ヲ撤ス。

一、旗ノ上部ニ付スル黑紗ヲ半バニ短縮ス。

一、官衙ニ於テ國旗ヲ掲グルトキハ本條ニ依ル。

一、輕喪及ビ第十四條ノ喪ニハ本條ノ第二期ヲ一期ニ充テ、第三期ヲ二期ニ充ツ、但シ心喪ニハ第三期ヲ以テ之ニ充ツ。

一、葬儀執行ノ當日ハ重喪ニハ第一期ニ依リ、輕喪幷ニ心喪ニハ第二期ニ依ル。

第三款　通常喪

第三十條

通常喪ヲ別ツテ七等トス。

第一等

一週年
（一期 二十五日
二期 二十五日
三期 三百十五日）
父母
夫

第二等
（一期 十五日
二期 十五日
三期 百四十五日）
夫ノ父母
妻

『舊服百五十日、茲ニ一等ヲ進ム』
『舊服九十日、茲ニ二等ヲ進ム』

第三等
（一期 十五日
二期 十五日
三期 百二十日）
祖父母

第四等
（一期 十日
二期 十日
三期 七十日）
九十日
曾祖父母
夫ノ祖父母
伯叔父母
伯叔父姑
兄弟姉妹
子

『補』
『嫡子外衆子茲ニ一等ヲ進ム』

第五等

三十日（一期十日、二期二十日）

高祖父母
夫ノ曾祖父母『補』
夫ノ伯叔父姑『補』
夫ノ兄弟姉妹『補』
舅　姨
甥　姪『舊服七日、茲ニ一等ヲ進ム』
孫『嫡孫ヲ除ク外衆孫茲ニ一等ヲ進ム』
妻ノ父母『補』

第六等

七日（一期三日、二期四日）

夫ノ高祖父母『補』
外曾祖父母『舊服遠慮一日、茲ニ二等ヲ進ム』
夫ノ舅姨『補』
曾　孫
外　孫
從父兄弟姉妹
子ノ婦『補』

第七等

三日

大伯叔父姑『補』
外高祖父母『舊服一日、茲ニ一等ヲ進ム』
玄　孫『舊服七日、茲ニ一等ヲ下ス』

夫ノ甥姪　『補』
舅姨ノ子　『舊服七日、玆ニ一等ヲ下ス』
伯叔母　『補』
兄弟ノ妻　『補』
妻ノ兄弟姉妹　『補』

第三十一條

通常喪第一等、第二等、第三等、第四等ヲ重喪トシ、第五等、第六等ヲ輕喪トシ、第七等ヲ心喪トス。

第三十二條

喪期ヲ計算スルハ第八條ニ依ル。

第三十三條

兩喪相重ナルトキハ第九條ニ依ル。

第三十四條

重喪ニハ各等全期、輕喪ニハ各等一期、祝宴、歌舞、音曲等ヲ爲シ又ハ其席ニ臨ムヲ停ム、輕喪ノ二期及ビ心喪ニ於ケルモ避クベカラザル場合ヲ除クノ外仍ホ戒愼スベシ。

第三十五條

喪服ヲ着用スルハ第二十三條ニ依ル、但シ輕喪ニハ二期ノ服ヲ一期ノ服ニ充テ、三期ノ服ヲ二期ノ服ニ充テ、心喪ニハ三期ノ服ヲ以テ之ニ充ツ、輕喪中婦人西洋服ヲ着スルトキ服地ハ黑ノ無地ヲ用ヒ、且ツ帽ヨリ背後ニ垂ル、縮紗ヲ除ク。

第三十六條

心喪ノ喪服ハ第二十六條ニ依ル。

第三十七條

皇族ハ同族外ノ親ニ對シ服喪セズ。

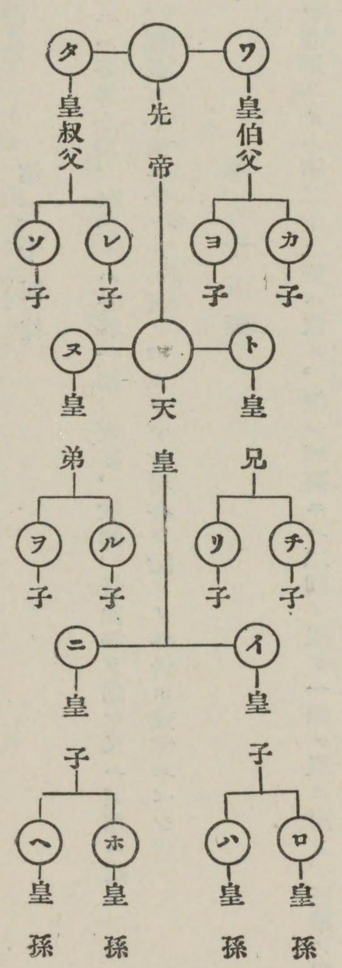
第三十八條

皇族ノ其ノ親族ニ對シ服喪セラルヽニ方ツテハ其ノ宮殿ニ奉仕スル者物テ此令ニ依リ服喪スベシ。

第三十九條

朝拜、參賀、參拜ノ外ハ物テ其ノ期相當ノ喪服ヲ着用スベシ。

第一圖



第一圖解

(イ)ヲ皇長子トシ、(ロ)ヲ皇長孫トス、(イ)ヨリ(ロ)ニ傳フルハ其ノ常ナリ、(イ)若シ庶出ニシテ(ニ)嫡出ナレバ(イ)ニ傳ヘズシテ(ニ)ニ傳フ。

若シ(ロ)庶出ニシテ(ハ)嫡出ナレバ(ロ)ニ傳ヘズシテ(ハ)ニ傳フ、(ホ)ノ(ヘ)ニ於ケル亦同ジ。

嫡長ノ(イ)在ラザルモ(ロ)(ハ)在ルトキハ(ニ)ニ傳ヘズシテ(ロ)(ハ)ニ傳フ、(ロ)(ハ)俱ニ庶出ニシテ(ニ)嫡出ナレバ(ニ)ニ傳フ。

若シ(イ)ハ庶出(ニ)ハ嫡出ニシテ俱ニ在ラズ、(ロ)(ハ)(ホ)(ヘ)ノミ在ルトキハ(ニ)ノ嫡系ニ由リ(ホ)ニ傳フ、(ホ)庶出ニシテ(ヘ)嫡出ナレバ(ヘ)ニ傳フ、又(ホ)(ヘ)俱ニ庶出ニシテ(ロ)(ハ)ハ嫡出ナルモ亦(ニ)ノ嫡系ニ由リ(ホ)ニ傳フ。

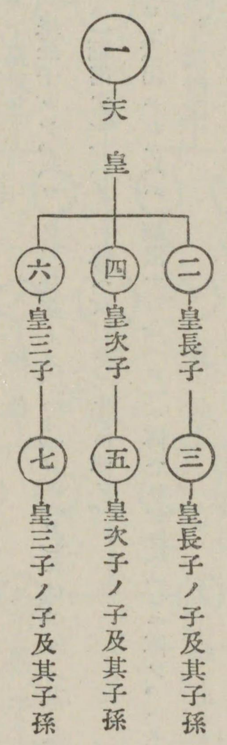
(イ)(ニ)及ビ其ノ子孫皆在ラザルトキニ於テ始メテ(ト)ニ及ブ、(ト)(ヌ)及ビ其ノ子孫ノ嫡、庶、長、幼ノ先後ハ(イ)(ニ)ノ處ニ述ベタルト異ナルコトナシ。

(ト)(ヌ)及ビ其ノ子孫皆在ラザルトキニ於テ始メテ(ワ)ニ及ブ、(ワ)(タ)及ビ其ノ子孫ノ嫡、庶、長、幼ノ先後モ亦(イ)(ニ)ノ處ニ述ベタルト同ジ、以上推知スベシ。

附箋

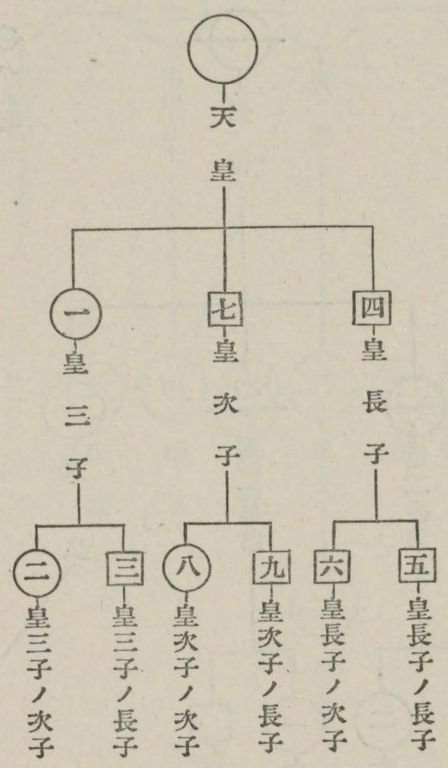
本文ニ嫡系ノ嫡出ト記セズシテ單ニ（嫡出）ト記セリ、又本文（在ラザルトキ）トハ、始メ嫡子孫アリシト始メヨリ之ナキトキトニ拘ラズ、繼承ノ際現在セザルヲ謂フナリ、又嫡孫ニ嫡系、庶系ノ別アレドモ齊シク嫡孫ト稱スベシ、然ルニ（ニ）ノ嫡系ナル故ヲ以テ（ロ）（ハ）嫡出ノ嫡孫ヲ措テ（ホ）（ヘ）庶出ノ庶孫ニ傳ヘントスルハ、註釋ヲ以テ注文ヲ左右スルモノト謂ハザルヲ得ズ。

（第二圖）



解　第一圖ノ（イ）（ニ）ノ例ヲ敷衍シタルナリ。

（第三圖）

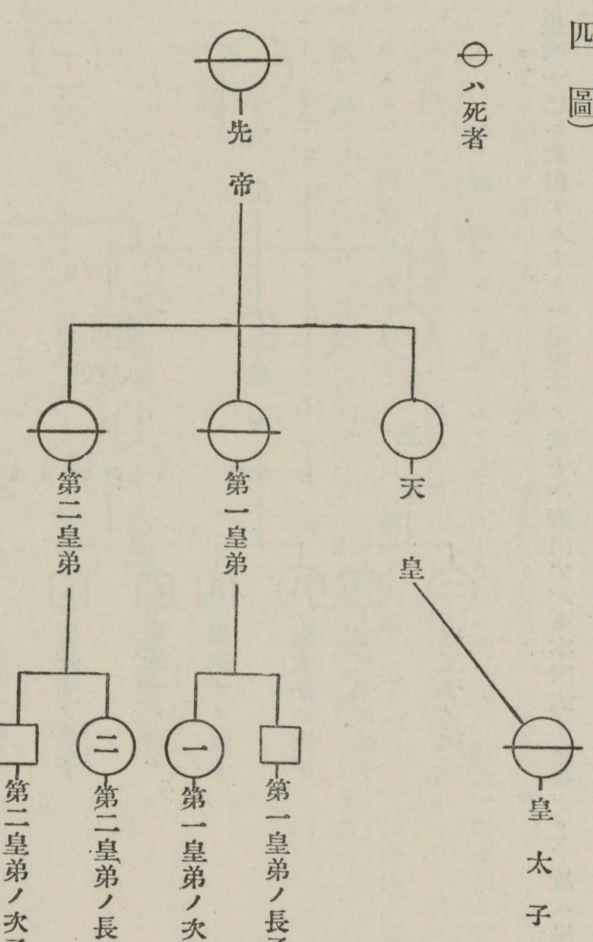


○ハ嫡出。　□ハ庶出。

解　皇次子已ニ庶出ナルトキハ皇次子ノ次子ハ嫡出ナルモ亦庶流ノ皇孫ナリ、故ニ皇庶長子ニ先ダツコトヲ得ベカラズ。

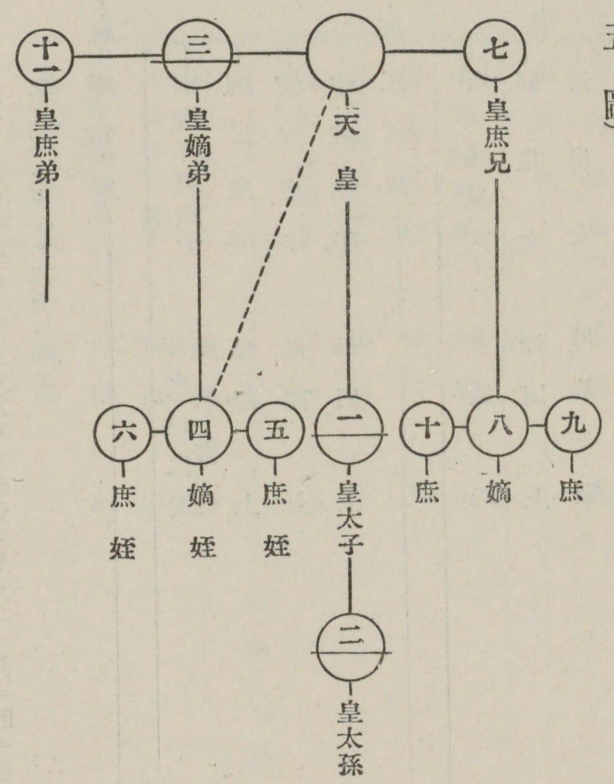
喪紀令案

（第四圖）



解　皇子孫在ラザルトキハ皇兄弟及ビ其ノ子孫ニ傳フ、而シテ嫡ヲ先ニシ、庶ヲ後ニシ、長ヲ先ニシ、幼ヲ後ニス。

（第五圖）



解　第四圖ニ同ジ。

（第六圖）

解　繼承ノ本位ハ現在ノ天皇ニ屬シテ先帝ニ屬セズ、故ニ既ニ位ヲ繼グノ後ハ先帝ノ子ニ傳ヘズシテ其子ニ傳フ。

- 履仲天皇
  - 市邊押羽皇子　母皇妃仁賢顯宗御父
  - 御馬皇子　母同上
  - 清海皇子　母同上
  - 中磯皇子　母同上
  - 反正天皇
    - 香火姫皇女　母皇后
    - 圓皇女　母同上
    - 財皇女　母弟姫

- 高部皇子　母同上
- 允恭天皇
  - 木梨輕皇子　母皇后
  - 安康天皇　母同上
  - 名形大娘皇女　母同上
  - 境黑彥皇子　母同上
    - 輕大娘皇女　母同上
    - 八釣白彥皇子　母同上
    - 但馬橘大娘皇女　母同上
    - 酒見皇女　母同上
  - 雄略天皇

（參　照）

巴威里亞國王室系統

（一）ハ先王。

（二）ハ先王ノ長男（王太子タリシモ先王ノ位ヲ繼ガズシテ殂去セリ。）

（三）ハ故王太子ノ長男（先王殂去ノ後其父タル（二）ニ代リテ王位ヲ繼ギ後自殺シタリ。）

（四）ハ故王太子ノ次男（現今ノ國王卽チ其兄（三）ノ王位ヲ繼ギタリ、然レドモ現今狂病ニ罹レルヲ以テ、其伯父（五）卽チ故王太子ノ弟ヲ儲嗣ト定メ目下（五）ハ攝政タリ。）

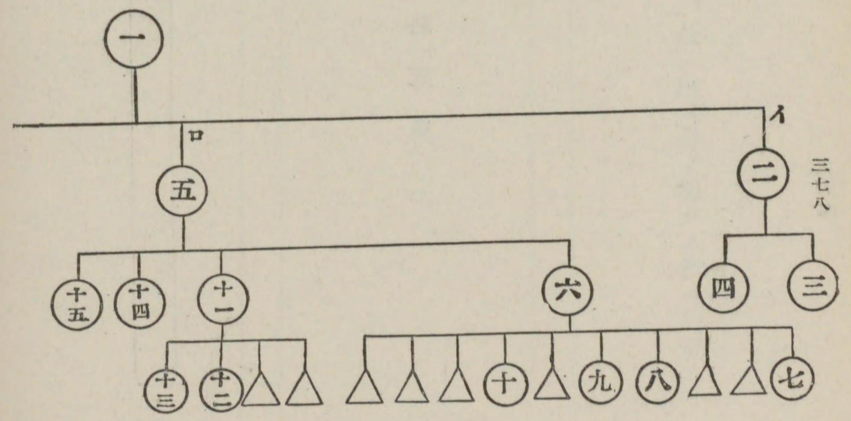
△ハ女子

イ、第一統

ロ、第二統

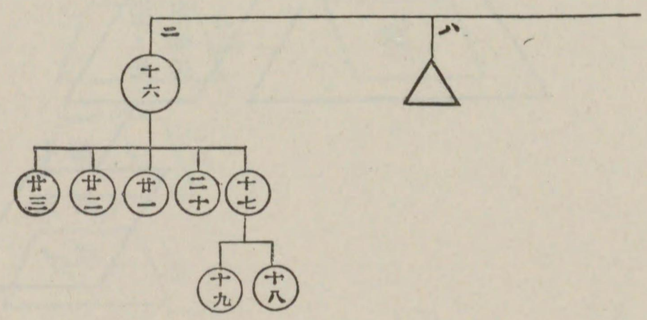
ハ、第三統

ニ、第四統



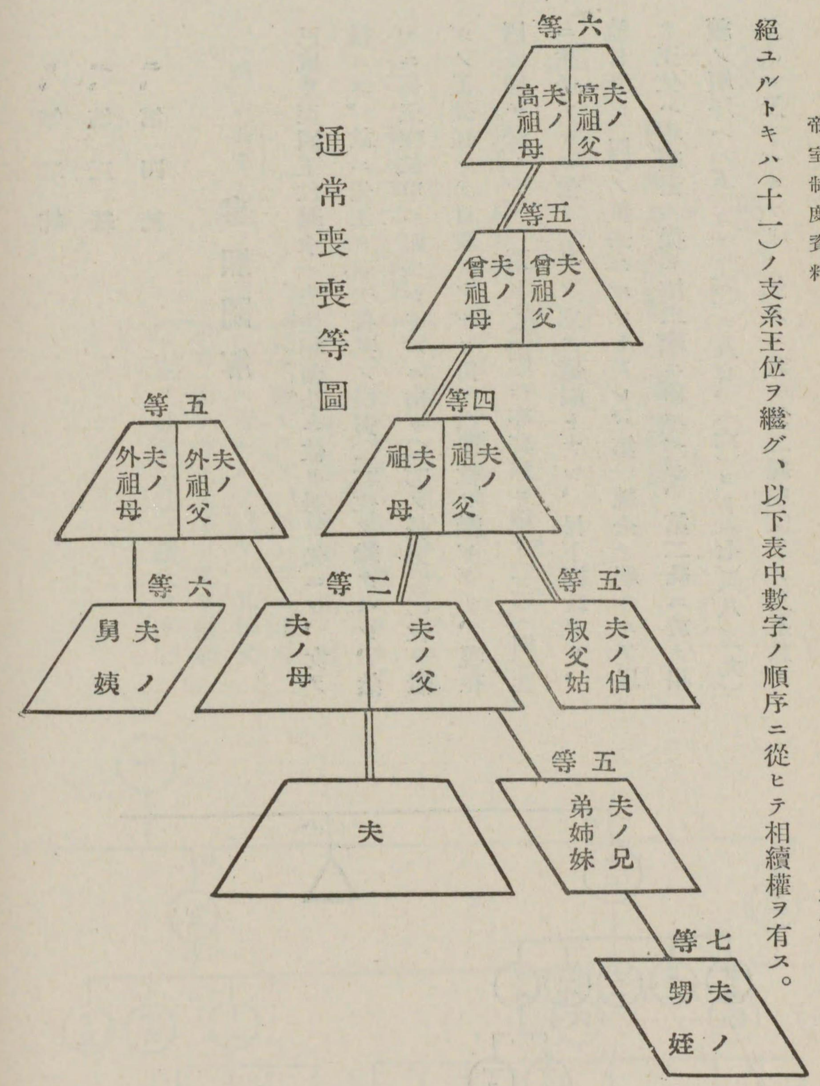
參照圖解

巴威里亞國王位繼承ハ先生相續法（プリヒヂニチウール）ニ依リ男ヲ先ニシ、女ヲ後ニス、故ニ先王ノ殂去後其ノ長男（二）位ヲ繼クベシ、然ルニ先王在位中ニ殂去シタルニ由リ（二）ノ長男（三）位ヲ繼グノ後發狂シテ自殺シタルニ由リ（四）位ヲ繼ギタリ、現在國王卽チ是レナリ。而シテ（四）モ亦狂病ニ罹リ（三）（四）共ニ生子ナキニ依リ（五）ヲ立テ儲嗣トナシ、目下攝政タリ、他日若シ（四）ノ殂去スルコトアレバ第一統全ク絶ユルヲ以テ王位ハ相續法ニ從ヒ第二統ニ移ルベシ、第二統ニ於テ相續ノ順序ハ（五）ヨリ（六）ニ及ビ、（六）ヨリ（七）（八）（九）（十）ニ及ブベキナリ。然ルニ若シ第二統中（六）ノ支系悉ク

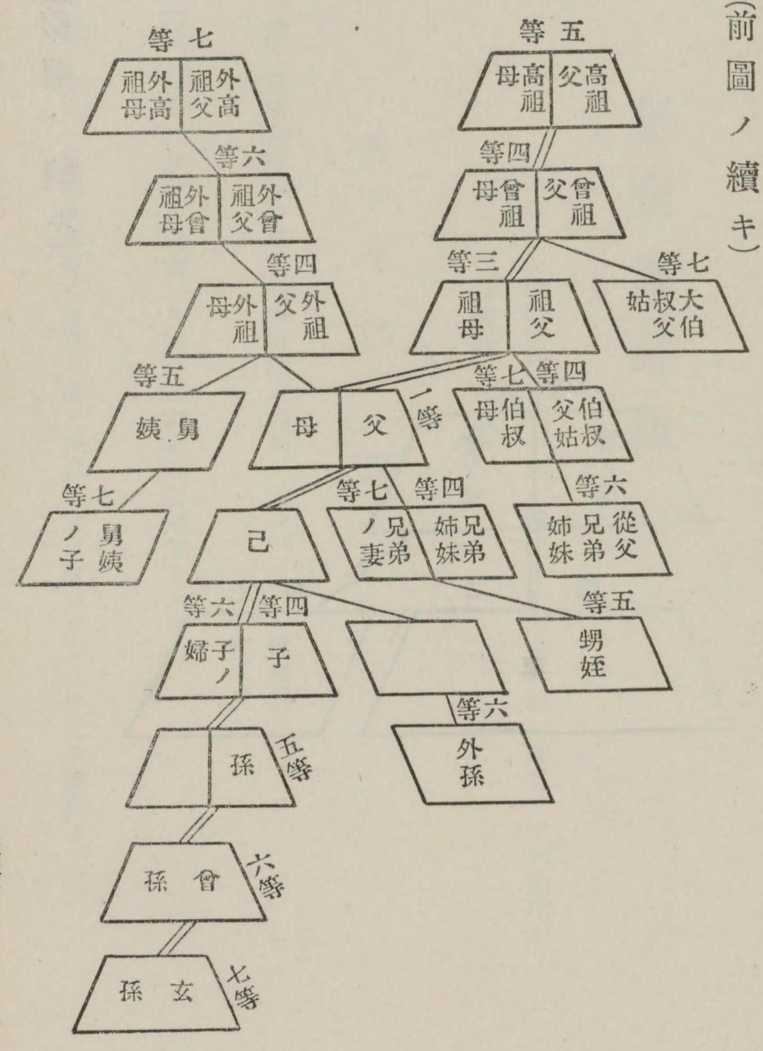


絶ユルトキハ（十一）ノ支系王位ヲ繼グ、以下表中數字ノ順序ニ從ヒテ相續權ヲ有ス。

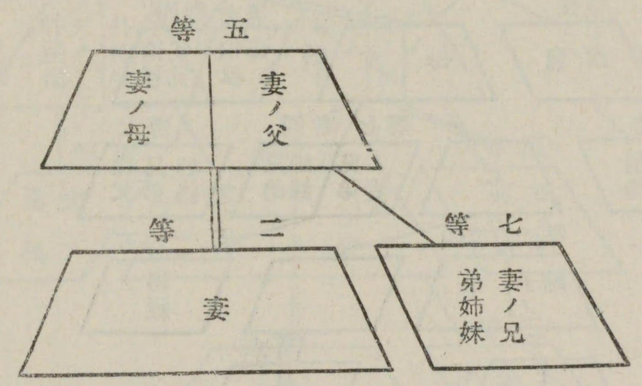
通常喪喪等圖



（前圖ノ續キ）



（前圖ノ續キ）



皇室會計法

過般經濟會議ニ於テ議決セシ原按ニ對シ修正シタル箇所ハ各條頭ニ記載ス

第一章　總則

第一條　皇室會計法ハ皇室財政經理ノ典則ヲ云フ。

第二條　皇室ノ會計ヲ大別シテ御料部御資部常用部トス。

（設ケ豫算ヲ）ノ五字ヲ加フ

第三條　會計ハ其歳入歳出ノ性質ニ由リ科目ヲ設ケ豫算ヲ定メテ之ヲ經理ス。

第四條　皇室ノ會計年度ハ曆年ニ據ル。

（各年度所屬出納ニ關スル事務）ノ十三字ヲ（毎年度歳入歳出）ト修正シ（六月）ヲ七月ト修正ス。

毎年度ノ歳入歳出ハ次年七月三十一日迄ニ之ヲ完結ス。

第四章常用部ヨリ第一章總則ニ組直ス。

第五條　各年度ニ於テ決定シタル經費豫算額ヲ以テ他ノ年度ニ屬スベキ經費ニ充ルコトヲ得ズ

第六條　前年度以前ニ係ル出納ノ脫落若クハ過誤訂正ノ爲メ收支ヲ要スルトキハ現ニ發見セシ年度ノ歳入歳出ニ立ツ。

第七條　工事ノ請負及ビ物件ノ購入拂下ハ競爭ニ付スルモノトス。

但シ特旨ニ出ヅル購入及ビ特ニ競爭ニ付セザルコトヲ規定シタルモノハ此限ニアラズ。

第八條　御料部ノ會計ハ御料局長之ヲ經理ス、御資部會計ハ內藏頭之ヲ經理ス。

常用部會計ハ內藏頭之ヲ總轄經理シ、其各部局主管ニ係ルモノハ其部局長之ヲ經理ス。

第九條　現金ノ管守出納ハ御料部ニ係ルモノハ御料局長ニ專任シ、其他ハ總テ內藏頭ニ專任

更ニ挿入ス。

文章ヲ修正セシマデニテ趣意原按ニ異ナラズ、但シ末項地方ニ在ル官吏ニ分任スルヲ得ル云々ハ執行ノ條規ニ下シ本法中ヲ削ル。

審査課外ノ內經濟內譯ヲ更ニ明記シ尙ホ皇族家費ヲ加ヘ隨テ但書文章ヲ修正ス。

ス、御料局長內藏頭ハ宮內大臣ノ認可ヲ請ケテ銀行ニ現金取扱方ヲ命ズルコトヲ得。

第十條　皇室ノ會計ハ皇室會計審査局ヲシテ審査セシム其審査條規ハ別ニ之ヲ定ム、但シ御內儀用並ニ皇太后宮、皇后宮、東宮一家ヲ立テザル御直宮ノ內經濟會計其他皇族家費ハ審査ノ限ニアラズ。

第二章御料部會計ノ部ハ過般經濟會議議定ノ趣意ニ基キ全章ヲ修正ス。

第二章　御料部會計

第十一條　御料部ノ財本ハ之ヲ二種ニ區分シ、第一種御料、第二種御料トス。

第一種御料ハ世傳御料ニ編入シタル土地森林原野トス。

第二種御料ハ世傳御料ニ編入セザル土地、森林原野並ニ御料ノ事業ニ係ル營造物其他ノ物件トス。

第十二條　土地ハ其地質ニ應ジテ適當ノ事業ヲ施スベキモノトス、但シ經濟ノ便宜ニ由リ之ヲ貸付シテ料金ヲ收ムルコトヲ得。

諸事業及ビ土地貸付ニ關スル條規ハ別ニ之ヲ定ム。

第十三條　第二種御料ニ屬スル土地物件ハ正當ノ事由アルニ於テハ賣却讓與又ハ除去スルコトヲ得、其賣却代金ハ基金ニ移入ス。

第十四條　御料部ハ財本ノ經濟ヲ主トシ其財本及ビ事業ヨリ生ズル收入ヲ以テ歲入トシ、御料ニ係ル經費ヲ以テ歲出トス。

歲入ヲ以テ歲出ヲ支辨シ其殘餘ハ基金ニ加殖ス、作業ニ屬スル收入ハ直ニ支出ニ移用シ其純益ヲ以テ歲入トス。

第十五條　御料部ハ特ニ基金ヲ備ヘ左ノ用途ニ供ス。

一、事業ニ要スル運用金。

一、歲入ニ先チ歲出ノ假用。

一、事業ヲ興シ又擴張スルトキ若クハ歲入出相償ハザルトキノ補足。

第十六條　基金ハ經濟上ノ便宜ニ由リテハ其幾部ヲ株券、公債證書若クハ大藏省證券ニ換置スルコトヲ得、其種類制限ハ豫ジメ之ヲ定ム。

第十七條　御料部ノ會計ハ左ノ如ク區分シテ之ヲ經理ス。

一、財本會計

一、基本會計

一、經常會計

一、作業會計

一、雜部會計

第十八條　御料ノ事業ニ關セザル土地及ビ附屬物件ノ購入ニ要スル金員ハ御資部ヨリ御料部財本ニ移入ス。

第十九條　御料ノ事業ニ關シ購入シタル土地及ビ附屬物件ハ直ニ御料部財本ニ加ヘ、其代金ハ歲出ニ立ツ。